

2019 年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

(グローバル型)

2021 年度研究開発実施報告書

【第 3 年次・最終年度】

和歌山信愛中学校高等学校

はじめに

和歌山信愛高等学校 校長 平良優美子

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」（以下「地域協働事業」）研究開発実施報告書の巻頭言にあたり、SGH アソシエイトプログラム活動からの 9 年間、これまでに様々な形で多くの方から有形無形のご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。本校の設立母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のコンセプトは、生まれたばかりの無力な赤ん坊のイエス（幼きイエズス）を、見返りを求めずに守り慈しむ強く優しくしなやかな母マリアのような女性を育てる、というものです。この修道会は貧困家庭や孤児の面倒を見るという活動から修道会に発展し、フランスの片田舎ショファイユで 1859 年に創立されました。明治の初めにフランスから 4 人のシスターが来日し、大阪で同じような活動を始めました。明治初めの日本はフランスからみると未知の国で、4 人のシスターたちのチャレンジ精神やエネルギーたるやそれは大変なものであったと思います。当時の手記をみると、大変な苦労の中、自分たちのシーツを裂いておむつにし、米を重湯にしてミルク代わりにするなど献身的に活動しながら周囲の理解を得、その活動を広げていきました。修道会の創設以来、本校にも脈々と受け継がれているのが、見返りを求めず人に尽くす、可能性を追究する、物事や人の背景を考える、持っている力を伸ばす努力・工夫をする、という理念です。この理念は今まさに必要とされている問題解決能力、チャレンジ精神などに合致するものであり、「地域協働事業」プログラムは、本校の理念を体現できるものと言えます。2021 年度で 3 年間のプログラムを終えましたが、コロナ禍にもかかわらず、生徒も教員も工夫を凝らしながら、自分たちの探究活動に打ち込んでいました。どのような状況であれ創意工夫を重ね可能性を追求する生徒や先生方の姿勢はまさに本校の理念を体現したもので、非常に感銘を受けました。「地域協働事業」では、地域と世界の両方の視点を持って社会に貢献していける女性「Key Girl」を育てることを目標にしておりました。今後、先行き不透明な状況の中、本校の生徒が少しでも地域に貢献し、それがこれからの地域での女子生徒のモデルの一つになることを楽しみにしています。本校では「地域協働事業」のプログラムは終えましたが、引き続き課題を解決するプログラムを行ってまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2019年度文部科学省指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
2021年度研究開発実施報告書【第3年次・最終年度】

はじめに	1
目次	2
I 研究開発の概要	
① 研究開発概要図	3
② 研究開発の概要	4
③ 育成を目指す人材像	6
④ 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制	
⑤ 海外交流アドバイザー（グローバル型のみ）・地域協働学習実施支援員	
⑥ 三カ年の実施内容、実施方法およびスケジュール	7
⑦ 目標設定シート	11
II 具体的な研究開発内容報告	
① 開発単位Ⅰ「リージョン探究」（現高校1年生対象 ※4月から実施）	13
② 開発単位Ⅱ「グローバル探究」（現高校2年生対象）	46
③ 開発単位Ⅲ「キャリア探究」（現高校3年生対象 ※プレ活動）	70
④ 開発単位Ⅱ「グローバル探究」（現高校1年生対象 ※本来は1月開始予定）	95
⑤ 開発単位Ⅲ「キャリア探究」（現高校2年生対象 ※本来は1月開始予定）	97
⑥ 開発単位Ⅳ 各教科による「ミニ探究」授業開発	99
⑦ 2021年度最終成果発表会	101
⑧ その他の取り組み	104
III コンソーシアム運営会議報告	
① 第1回コンソーシアム運営会議	140
② 第2回コンソーシアム運営会議	141
③ 第3回コンソーシアム運営会議	141
④ 第4回コンソーシアム運営会議	142
IV 運営指導委員会報告	
① 第1回運営指導委員会	144
② 第2回運営指導委員会	148
V 次年度以降の活動について	151



和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる 「Key Girl」育成プログラム

「Key Girl」の資質

- ① 献身的性
- ② 興味・関心
- ③ 確かな知識
- ④ 課題発見および設定力
- ⑤ 課題解決力
- ⑥ 表現・発信力
- ⑦ 主体性
- ⑧ 多様性受容力

【キャリア探究】
「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の3要素を絡め合わせて、自らの「ミッション」をみつけ、主体的に未来を切り拓いていく姿勢を育成

＜探究テーマ＞
「社会課題の解決に貢献する自己キャリアの探究」

オリエンテーション
有識者による講演
自己理解のための
ラーニングセッション
キャリアアランニング
学年発表会



【グローバル探究】

世界に目を向け、世界を学び、グローバルな視野を持って地域にフィードバックする力を育成

オリエンテーション
課題設定
国内フィードバック(選抜式)
成果発表会

有識者による講演
修学旅行イベントビュー
ポスターセッション

＜探究テーマ＞
「世界の抱える課題」
教育 福祉 女性 環境



カンボジア研修
・現地の子どもたちの教育支援活動
・現地の高校生とティーンズセッション
・現地で働く日本人を訪問

【リージョン探究】

社会課題に対する当事者意識と地域の未来への責任感を醸成

1 年生

＜探究テーマ＞
「地域の抱える課題」
地域経済 地域医療
地域行政 地域産業
地域農業 地域林業



【和歌山県の現状】

- ・18歳人口の流出による人口減少
- ・超高齢化社会 (2060年には現役一人が老人一人を支える)
- ・地域産業の衰退

自己研鑽
自己犠牲と奉仕
自己肯定
自己肯定
【和歌山信愛のカトリック教育】

【「ミニ探究」授業開発】

- ・各教科における探究の手法の開発
- ・本事業との効果的な関わりをふまえたカリキュラムやイベント

【英語運用能力向上プロジェクト】

- ・英語で学ぶ授業開発
- ・アジア高校生架け橋プロジェクト
- ・海外語学研修
- ・Advanced Communication Program
- ・オンライン英会話

海外交流アドバイザー 地域協働学習実施支援員

【コンソーシアム】



I 研究開発の概要

① 研究開発の概要図

② 研究開発の概要 (2018 年度の申請時のもの)

指定期間	ふりがな	わかやましんあいちゅうがっこうこうとうがっこう				②所在都道府県	和歌山県
2019～2021	①学校名	和歌山信愛中学校高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全日制普通科の女子校。1学年は8学級。医進・特進・学際の3コース制。中高で1043名。年次進行で全生徒を対象とする。	
	普通科	231	263	248			
(中学部)	104	100	97		301		
⑥研究開発構想名	和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる「Key Girl」育成プログラム						
⑦研究開発の概要	地域の抱える課題を最善の解で解決に導きたいと考え、主体的に行動できる女性（Key Girl）を育成するため、「リージョン」「グローバル」「キャリア」をテーマとした探究学習プログラムを、コンソーシアム参加機関と協働しながら開発・実践する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>若く有能な人材が都市部へと流出し続けることで、少子高齢化が加速し、様々な社会課題に悩まされるようになった和歌山県において、カトリック教育を通して己の利益に固執しない清廉さと他者の心に寄り添い、奉仕・貢献する心を身につけた本学生徒が、地域の未来を憂うコンソーシアム参加機関からの全面的支援を受け、3つの探究学習プログラムを通してグローバルな視点も有しながら、地域の未来のために主体的に行動できる女性へと成長することを目的とする。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>現状①本学のある和歌山県は、急速に少子高齢化が進み、このままでは2060年度には現役世代1人が1人の高齢者を支えるという社会構造となり、税収の減少などから行政サービス、医療、交通など生活を支える機能の維持が困難になると予測されている。そのため、次世代を担う高校生の主体的な関わりが強く求められている。</p> <p>②上記のような状態を招いたのは、30年近くに渡り和歌山県の高校卒業者の県外大学進学率が90%近くで全国1位という状態であることが大きく関係している。地域の高等学校は有名大学への進学を競い、保護者世代も地域の未来に対して悲観的な印象を持っているのか、大都市圏にある偏差値の高い大学へ進学させることが最大の目的となっている。</p> <p>③本学は建学よりカトリックの理念による人間教育に邁進してきた。1990年代からは②の影響を受け、英語教育・理系科目の充実・二人三脚の指導が導入され、めざましい進学実績の伸びへとつなげたものの、その指導が生徒の能動的な学びを奪い、内向きの状態を招くことになってしまった。そこで、近年になって探究学習を導入したところ、生徒たちの中に主体的に将来を切り拓こうとする姿勢が見られたり、様々な外部のプログラムにチャレンジしようとしたりするなど、明らかな変容が見られはじめた。</p> <p>仮説①【地域】地域の様々な機関がコンソーシアムを構成し、本学生徒と協働して、地域に貢献する人材を育成することは本地域に大きな影響を与え、産学官と地域住民とが一体となって、地域の抱える課題を解決しようとする動きへと広がりを見せる。また、これまで地域に貢献する人材の育成には関心が薄かった周辺の高等学校も地域協働推進連携校へと名乗りをあげる。</p> <p>仮説②【生徒】本事業の各プログラムを通して、課題解決力や表現・発信力、主体性などの各種能力を身につけるとともに、地域の未来のために尽力する人々との協働の経験から地元との「絆」が結ばれ、将来何らかの形で地域の未来のために奉仕・貢献したいという思いを抱くようになる。</p>					

⑧- 2 具 体 的 内 容	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>地域課題に取り組む「リージョン探究」、グローバルな社会課題に取り組む「グローバル探究」、これまでの探究活動の成果を踏まえ、自らの生き方を考える「キャリア探究」の3つの探究プログラムを設定し、下記のように展開する。</p> <p>I 「リージョン探究」（高校1年生1学期～3学期）</p> <p>コンソーシアム参加機関の支援のもと、6つ（経済・医療・産業・行政・農業・林業）の地域課題の中から1つを選んで探究学習を行い、地域課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成するとともに、探究活動の基礎的な手法を身につける。</p> <p>なお、本プログラムでは、クラスを越えてグループを編成し、「多様性受容力」「表現・発信力」等の育成を目指す。また、課題の設定は担当講師が行う。</p> <p>II 「グローバル探究」（高校1年生3学期～高校2年生3学期）</p> <p>コンソーシアム参加機関の支援のもと、「SDGs」の中から本学と関連の深い4つ（教育・福祉・女性・環境）のグローバル課題の中から1つを選んで探究学習を行い、グローバルな視野を有した上で、地域にフィードバックする手法を身につける。</p> <p>なお、本プログラムでは、課題設定や国内フィールドワークの作成を生徒自身が行う挑戦的な形をとることによって、「課題解決力」だけでなく「課題設定力」、困難に負けない「主体性」、交渉を成功に導く「表現・発信力」等を育成する。</p> <p>III 「キャリア探究」（高校2年生3学期～高校3年生2学期）</p> <p>カトリックの精神を土台とし、I・IIのプログラムを経て成長した生徒たちには、今後予測される大きな社会構造の変化に対して受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながら未来を切り拓いていく姿勢が求められる。「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の3要素を関連させながら、自らの「ミッション」を見つけた上で、キャリアプランニングを行う。</p> <p>なお、本プログラムは、個人による探究学習とするが、ディスカッション等を通して、他者から刺激を受けることで、「深い学び」を実現させる。</p> <p>※ 各活動期間が重複しているが、その期間を利用し、コンソーシアム参加機関との実践を伴う発展的な活動の実現を目指す。また、2年次には、「リージョン探究」の成果を「グローバル探究」の学びで改善しながら各種の外部コンテストに応募する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>本事業で育成を目指す人材像を全教職員と生徒が理解・共有した上で「総合的な探究の時間」を用いて行う本事業の学びと各教科における学びとが、目標の達成に向けて効果的であるかを、カリキュラム検討会議を実施して改善する。なお、指定終了直前の会議では、本事業の1期生の代表を本会議に参加させ、生徒の意見も反映させる。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>「総合的な探究の時間」を2単位（1単位増）とし、LHRと併用しながら運用する。</p>
⑨ そ の 他 特 記 事 項	<p>(1) その他の取り組み（グローバル型として）</p> <p>I 各教員による「ミニ探究」授業の開発</p> <p>本事業による探究学習を補完・発展させるものとして、各教員がミニ探究授業を開発・実践する。また、教科会議の振り返りを通して、カリキュラム検討会議を実施する。</p> <p>II 「カンボジア研修」の実施</p> <p>グローバル型の本事業におけるリーダー研修として実施する。本学管理機関の共同体として、カンボジアの地方で教育支援活動を行うシスターを訪問し、ボランティア活動を行うことで「学ぶことへの意識改革」「自己のキャリアに対する意識改革」を促す。</p> <p>III 「英語運用能力向上プロジェクト」</p> <p>① 「英語で学ぶ」授業開発。各教科の教員と英語科教員とが協働し、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ授業を共創する。</p> <p>② 「アジア高校生架け橋プロジェクト」2期生（1名）を受け入れる。</p> <p>③ 「海外語学研修」の実施（2019年度は、カナダとオーストラリア）</p> <p>④ 「Advanced Communication Program」（中学3年生は全員。高校生は希望者で実施）</p> <p>海外の大学生を招き、4泊5日の短期集中型プログラムを展開する。</p> <p>⑤ タブレット端末を用いた「オンライン英会話授業」の実施。（2019年度新規実施）</p> <p>※上記の取り組みを通して、卒業段階で7割の生徒をCEFRのB1以上とする。</p>

③ 育成を目指す人材像

1 「Key Girl」とは、

- ・人と人を繋ぐキー（Key）パーソン
- ・地域の未来を拓く鍵（Key）となり
- ・和歌山県（紀伊）にキャンパスを構える本学に通う、女子高校生

2 資質

- ①献身性
- ②興味・関心
- ③確かな知識
- ④課題発見および設定力
- ⑤課題解決力
- ⑥表現・発信力
- ⑦主体性
- ⑧多様性受容力

④ 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
和歌山県	知事 仁坂 吉伸
和歌山市教育委員会	教育長 阿形 博
みなべ町	町長 小谷 芳正
公立大学法人和歌山県立医科大学	理事長・学長 宮下 和久
国立大学法人和歌山大学経済学部	学部長 藤永 博
学校法人和歌山信愛大学	※1 副学長 大山 輝光
一般社団法人女性と地域活性推進機構	代表理事 堀内 智子
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川	会長 宮本 安津子
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校（推進校）	※2 副校長 紙岡 智
学校法人和歌山信愛女学院（管理機関）	理事長 森田 登志子

※1 管理機関の理事長が大学の学長を兼任しているため、代表を副学長とする。

※2 管理機関の理事長が推進校の校長を兼任しているため、代表を副校長とする

⑤ 海外交流アドバイザー（グローバル型のみ）・地域協働学習実施支援員

・海外交流アドバイザー

氏名	所属・職
Sr.橋本 進子	ショファイユの幼きイエズス修道会カンボジアカンポット共同体
伊東 邦将	HAPPY SMILE TOUR CEO

・地域協働学習実施支援員

氏名	所属・職
柳岡 克己	学校法人和歌山信愛女学院 学監

※ 本事業の担当として、コンソーシアム参加機関との連絡、調整を担当し、管理機関において雇用する。

⑥ 3カ年の実施内容、実施方法及びスケジュール

1 2019年度（指定1年目） ※実施済

重点実施項目

- 高校1年生「リージョン探究」の完全実施
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究基礎」を改変した「リージョン探究」の全活動を実施する。

実施項目

- 高校2年生「グローバル探究」の一部実施と開発
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究発展I」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ 国内フィールドワーク、海外フィールドワークを実施し、次年度の実施に向けて研修内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ カナダ修学旅行で実施していたグローバルインタビューが、イタリア修学旅行（2019年度から行き先が変更）でも実施可能であるかを模索する。
 - ・ 必要な評価基準（ループリック）を策定する。
- 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材開発
 - ・ 今後の基準となるモデル授業の指導案の作成と実践を行い、その後、評価・改善を行う。
- 各教科における「ミニ探究」授業の開発・実践
 - ・ 全教員が通常の授業において「探究」の要素を含んだ1コマを開発し、実践する。
 - ・ 実施した授業は、教科会議で共有する。さらに教科主任会議において、「総合的な探究の時間」に実施する本事業の進行と連携し、大きな効果をあげることができるようカリキュラムマネジメントを実施する。
- その他
 - ・ 生徒、教員、保護者、コンソーシアム参加機関で、本事業の内容、成長目標を理解・共有する。
 - ・ 高校3年生「キャリア探究」の実施に向けて環境整備を行う。
 - ・ 強い興味、関心と深い学びを生徒たちに生じさせるために、学校の特性、課題研究の内容、海外研修の渡航地等で共通性の高い他校と合同研修会の実施を模索する。
 - ・ 各取り組みの成果をいかに蓄積していくかを模索する。

2 2020年度（指定2年目） ※実施済

重点実施項目

- 高校2年生「グローバル探究」の完全実施
 - ・ 前年度部分実施を踏まえ、改善の上、実施する
 - ・ 国内フィールドワーク・海外フィールドワークは昨年度の取り組みを踏まえ、改善の上実施する。なお、海外交流アドバイザーとともにその妥当性と効果を検証し、更なる改善を行う。

実施項目

- 高校3年生「キャリア探究」の一部実施と開発
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究発展II」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ ジェネリックスキルを客観的に測定するため、外部業者の測定ツールを利用する。
 - ・ 必要な評価基準（ループリック）を策定する。
- 各教科による「ミニ探究」授業の開発・実践およびカリキュラムマネジメント
 - ・ 前年度の反省を踏まえ、実施した「ミニ探究」授業を改善および更なる新規実施を行う。探究活動の評価基準・方法については、各教科で策定を行う。
 - ・ 各教科の教科会議でこれまで実施してきた「ミニ探究」の授業と「総合的な探究の時間」で実施する本事業との連携を踏まえ、最大限の効果が発揮できるような授業配置を行い、教科主任会議にて共有・検討する。
- 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材の開発
 - ・ アジア高校生架け橋プロジェクト第3期生が在籍するクラスを中心に、前年度のモデル授業をもとに、さらに拡大、実施する。
- 英語外部検定（GTEC等）における目標スコアの設定
 - ・ 過去2カ年のGTECの結果を踏まえ、英語科を中心にコースごとの目標スコアを設定する。
- 「合同カンボジア研修研究会」を幹事校として開催
 - ・ 地域協働事業（グローバル型）およびSGH等でカンボジアをフィールドとして海外研修を実施する学校を招き、それぞれの学びを共有するだけでなく、さらに深化させるための会を企画・実施する。

3 2021年度（指定3年目） ※今年度

重点実施項目

- 高校3年生「キャリア探究」の完全実施
 - ・ 前年度の部分実施を踏まえ、改善の上実践する。
- 最終成果発表会の実施
 - ・ 本事業の成果を地域や他校に普及するために、外部施設を借りて発表会を実施する。
 - ・ 初年度にプレ学年として参加した現高校3年生も数名招き、本事業と大学の学びとの繋がりについても報告させる。
- 本事業の研究完了報告書の作成
 - ・ 本年度は本事業1期生の卒業年度にあたるため、3年間の事業成果を総括の上、取りまとめる。
 - ・ 公開可能な部分に関しては本学HP上に公開し、事業普及のために貢献する。
- 指定終了後の取り組みについて
 - ・ 指定終了後の2022年度も本申請内容を継続できるような体制の構築を模索する。

実施項目

- 各教科による「ミニ探究」授業の開発再開
 - ・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「ミニ探究」授業開発を再開する。
- 「英語で学ぶ」授業の開発再開
 - ・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「英語で学ぶ」授業開発を再開する。
- 探究活動におけるビデオ会議ツール等の利用推進
 - ・ 今年度、新型コロナウイルスの感染拡大という突然の事態に陥り、当初予定していたプログラムの中で、学外で活動するものや、他者との対面を伴うものを実施することができなかった。本学が一気に ICT 教育の環境を整えたことで、Zoom や Google Meet などのビデオ会議ツールを用いての調査活動を推奨した。次年度の状況はまだ不透明であり、対面型の調査活動の方が生徒たちへの衝撃という点では大きく、効果も高いものになるという考えには変わりはないが、ビデオ会議ツールには距離を越えて調査活動を実施できるという利点もあり、次善の策としてこれらを用いることを推進する。
- 新学習指導要領に対応したカリキュラムマネジメント
 - ・ これまでの取り組みを踏まえ、次年度に控えた年次進行による次期学習指導要領へのスムーズな移行を目指し、本学独自のカリキュラム作成を完成させ、学校、保護者、生徒に周知徹底を行う。
- オンライン型探究教材の開発
 - ・ 本事業への取り組みを通して多くの外部機関との繋がりが生まれた。その中から、コロナ禍においても活用できるオンライン型探究教材の協働開発を行う。
- 英語外部検定（GTEC 等）について
 - ・ 前年度設定した英語外部検定の目標スコアの達成度合いを確認の上、英語に対する学びのモチベーションの向上も含めた指導方法の改善を行う。同時に目標スコアの適宜修正を加える。

(参考) 2022 年度～（指定外 1 年目以降）

重点実施項目

- 本申請内容の本校予算（管理機関支援）による運営
 - ・ 地域協働推進校として指定期間と変わらない運営を実施する。
- 文部科学省による本学事業に対する評価の精査
 - ・ 文部科学省からの事業評価を受け、一連の研究開発について、場合によってはその内容を抜本的に見直し、より成果の見込まれる手法へと改善し、実践を継続する。

実施項目

- 次期学習指導要領に基づく指導の実践
 - ・ 次期学習指導要領への移行期間が終了し、2022 年度より年次進行で新しい学習指導要領のも

とでの教育が実施される。編成した本学独自のカリキュラムを実践しながらも評価・改善を繰り返すことで、さらに質の高いカリキュラムへと練り上げていく。

- ・ これまでの地域協働推進校としての活動成果を十分に発揮し、地域の高等学校を牽引する存在となる。

⑦ 目標設定シート (2021 年度報告)

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数 (人)			732	684	638
本事業対象生徒数			485	684	638
本事業対象外生徒数			247	0	0

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2021年度)
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
推進校以外の機関が実施する課題探究プログラムに自主的に参加する生徒の数 単位： 名						
a	本事業対象生徒：		126	59	74	175
	本事業対象生徒以外：		38	52	0	0
目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校1、2年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
オンライン等を含んだ外部団体が主催するシンポジウムおよび講演に参加する生徒の数 単位： 名						
a	本事業対象生徒：		168	37	263	200
	本事業対象生徒以外：		—	32	0	0
目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校1、2年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
ローカルおよびグローバルな社会課題に関する公益性の高い大会（オンラインも含む）に自主的に参加する生徒の数 単位： 名						
a	本事業対象生徒：		75	22	259	175
	本事業対象生徒以外：		73	115	0	0
目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校1、2年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
高校卒業段階で、将来地元には戻らないかもしれないが何らかの形で地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合 単位： %						
b	本事業対象生徒：		81	88	85	90
	本事業対象生徒以外：		—	30	0	0
目標設定の考え方：本事業を通して、全ての生徒に地元の依頼に貢献する気持ちをもってほしいと考え算出した						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
高校卒業段階で、将来地元に戻り地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合 単位： %						
b	本事業対象生徒：		56	87	84	65
	本事業対象生徒以外：		—	10	0	0
目標設定の考え方：本事業を通して、将来多くの生徒に地元で働いてほしいと考え算出した						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
高校卒業段階で自宅から通学できる地元の大学や専門学校に進学する生徒の割合 単位： %						
b	本事業対象生徒：		—	39	37	35
	本事業対象生徒以外：		17	21	29	0
目標設定の考え方：本事業を通して、地元の大学に通うという選択肢を持つようになると考え算出した						
(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標)						
大学卒業段階で、地域の未来のために貢献できると感じる職業に就く生徒の割合 ※2026年度 単位： %						
b	本事業対象生徒：		—	—	—	60
	本事業対象生徒以外：		—	—	0	0
目標設定の考え方：本事業の効果が大学卒業後も継続していると考え算出した						
(その他本構想における取組の達成目標)						
高校卒業段階における4技能の総合英語力がCEFRでB1以上の生徒の割合 単位： %						
c	本事業対象生徒：		—	59	42	70
	本事業対象生徒以外：		—	24	18	0
目標設定の考え方：本事業を通して、留学等でグローバルな視野を獲得したいと考える生徒が増えると考え算出した						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a1	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 教育改革推進事業運営委員会の主催で全教員が参加するカリキュラム検討会議の実施回数					単位： 回
	—	0	1	1	3	2
目標設定の考え方：運営指導委員会の指導・助言を反映させるため、運営指導委員会後に開催することを踏まえて算出した						
a2	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 開発単位Ⅳ「ミニ探究」の充実および開発教材の情報を共有するための教科主任会議の回数					単位： 回
	—	0	1	0	0	8
目標設定の考え方：「ミニ探究」は5月から開始し、8・12・3月は実施しないことを考えて算出した						
a3	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 研究授業の実施回数（年間1回 3教科）					単位： 回
	—	1	1	1	1	1
目標設定の考え方：研究授業は現行通りとするが、「ミニ探究」授業は日常的に参観し、学びあえる環境を作る						
b1	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 各開発単位における発表会（動画形式を含む）の実施回数					単位： 回
	—	2	5	7	8	8
目標設定の考え方：開発単位Ⅰ・Ⅱはポスターセッションと最終発表会の2回ずつと成果発表会の1回と合わせ、計5回とした						
b2	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本学HP上での本事業の活動報告を行う回数					単位： 回
	—	43	35	6	8	20
目標設定の考え方：S G Hアソシエイトプログラムにおける2018年の活動報告の回数をもとに算出した						
c新	(その他本構想における取組の具体的指標) 他のグローバル校と連携し、地域人材の育成を補助するような取り組みを行う					単位： 回
	0	0	0	1	2	2
目標設定の考え方：2020年度に「Glocal High School Meetings2021」の協力校として活動する実績から算出した						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(年度)
a1	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアム構成団体数					単位： 団体
	—	(10)	10	10	11	12
目標設定の考え方：本事業を継続する中で、連携を申し出てくれる機関が増えると考えて算出した						
a2	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 課題研究または発展的な実践に協働する外部人材の参画状況（オンラインを含む）					単位： 人
	—	72	153	のべ438	のべ472	のべ230
目標設定の考え方：本事業のプログラムおよび各発表会等への参加を依頼することを踏まえて算出した						
a3	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コンソーシアム運営委員会の実施回数					単位： 回
	—	0	3	3	4	4
目標設定の考え方：年間で前年度反省・新規参入1、カリキュラム検討・助言2、成果報告1と考え算出した						
d新	(その他本構想における取組の具体的指標) コンソーシアム参加機関等との協働のもと地域協働事業の学びを踏まえたオンライン教材の開発を行う					単位： 個
	—	0	0	0	2	2
目標設定の考え方：株式会社マイナビとの教材開発を踏まえて算出した						

II 具体的な研究開発内容報告

① 開発単位 I 「リージョン探究」(現高校1年生対象 ※4月から実施)

1 目的

地元和歌山の抱える地域課題と向き合うことによって、社会課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成し、探究活動の基礎的な手法を身につけることを目的とする。地域の未来のために尽力するそれぞれの立場の人たちと協働することで「絆」が結ばれると同時に、人と人をつなぐ「Key」パーソンとしての資質が育成される。また、自己の利益だけを考えたキャリア形成ではなく、将来地元のために奉仕・貢献したいという気持ちが育まれる。

2 内容

地域が抱える「医療」「経済」「産業」「行政」「農業」「林業」という6つの分野の課題をテーマに、高校1年生を6つのグループに分けて探究学習を実施する。コンソーシアム参加機関から派遣された講師が提示した課題についてグループディスカッション、フィールドワーク、中間発表等の活動を経て、最終発表会において、最善の解決策を提案する。本探究プログラムは、グループによる協働活動とし、コースやクラスの垣根を越えたグループ編成を行う。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・⑤・⑥・⑦・⑧

4 新型コロナウイルスの影響

2020年度と比較すると休校などによるスケジュール的な面での影響は非常に少なかった。しかし、対面型の活動、地域課題の現状を自らの五感で感じる機会であったフィールドワークなどの実施にあたり、内容を変更しながらの活動を余儀なくされた。なお、年間および指定最終年度における本事業の成果報告会については、当初2月14日(月)に外部施設を借りて対面型で実施する予定であったが、2022年2月5日より和歌山県にまん延防止等重点措置が適用されたため急遽 Zoom ウェビナー機能を用いたオンライン形式へ変更した。詳しくは、6のiに述べる。

5 ICT機器の活用

昨年度より本学ではiPadを1人1台所有することとなった。当初は手探りの中での使用であったが、今年度においては年度当初の段階で新型コロナウイルスにおける影響は短期間で終わるものではないと判断し、高校1年生に関しては、対面型のポスターセッションや発表会などを実施できないという前提でプログラムの変更を行った。そのため、いかにICT機器を上手く活用しながら、対面型と変わらない教育効果を生徒たちにもたらすかという点について、ある一定の成果を得ることができた一年となった。詳しくは8のixに述べる。

6 概要（実践）

i 年間実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施状況	
1	①	4月15日（木）	1	新入生研修会（内進生）にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス	通常実施	
			2	「信愛フェスタに企画を出そう」グループワーク		
		4月16日（金）	1	「信愛フェスタに企画を出そう」発表会		
		4月16日（金）	1	新入生研修会（高入生）にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス	通常実施	
	②	4月26日（月）	2	プレ活動（ブレーンストーミング練習）	通常実施	
	③	5月下旬	2	「リージョン探究」パネルディスカッション（体育館）	中止	
		5月18日（月）	2	「リージョン探究」講師による課題提示（オンライン）	代替実施	
	－	－	－	探究分野の選択および活動グループの編成	通常実施	
	④	5月31日（月）	2	グループワーク① アイスブレイク	通常実施	
	⑤	6月14日（月）	2	グループワーク② 解決策のアイデア出し	通常実施	
	⑥	7月12日（月）	2	グループワーク③ フィールドワークに向けての準備 ※原則、生徒は校外での調査活動を行わない	変更実施	
	⑦	7月中旬	6	フィールドワーク	中止	
		7月下旬	2	グループワーク④ フィールドワークの振り返り	中止	
		7月15日（木）	6	各種フィールドワーク 「地域医療」… 和歌山県立医科大学、すさみ病院（オンライン） 「地域経済」… 湯浅町伝統建築地区（現地訪問） 「地域産業」… みなべ町うめ課（オンライン） 「地域行政」… 和歌山市役所、ぶらくり丁等（一部現地訪問） 「地域農業」… 桃山町、有田川町農業関連施設（オンライン） 「地域林業」… 田辺市林業現場等（現地訪問） ※一部分野は担当教員が事前に現地を訪問し、フィールドワーク動画を作成		代替実施
グループワーク④ フィールドワークの振り返り				変更実施		
夏休み	－	夏期休暇中	－	自主的な活動を推奨 ※新型コロナウイルスへの感染予防を徹底した上で実施	変更実施	

学期	回	月日	コマ数	内容	実施状況
2	⑧	9月6日(月)	2	グループワーク⑤ 中間発表のアウトラインを考える ※昨年度同様、動画による発表	変更実施
	⑨	9月13日(月)	2	グループワーク⑥ 中間発表資料作成	変更実施
	⑩	10月4日(月)	2	グループワーク⑦ 中間発表用ポスターおよび発表原稿の作成	変更実施
	⑪	10月11日(月)	2	グループワーク⑧ 中間発表動画の撮影	変更実施
	-	10月中旬	2	ポスターセッション(体育館・口頭発表)	中止
		10月18日(月)	2	動画による中間発表(オンライン) ・GoogleMeetを用いて分野ごとに実施 ・各分野講師も参加の上、アドバイスおよび評価の実施 ・本学独自の発表用ループリックを用いて評価 ・生徒も動画を視聴の上、評価活動を実施	変更実施
	⑫	10月25日(月)	2	グループワーク⑨ 中間発表からのブラッシュアップ活動	通常実施
	⑬	11月8日(月)	2	グループワーク⑩ 最終発表用資料作成および発表原稿の作成 ※最終発表はオンラインによる口頭発表形式で実施	通常実施
	⑭	12月6日(水)	2	グループワーク⑪ 最終発表会に向けての発表練習	変更実施
	⑮	12月中旬	8	最終発表会(ホール・口頭発表)	中止
		12月13日(月)	4	最終発表会(オンライン・口頭発表) ・GoogleMeetを用い、全分野の発表を全生徒が視聴 ・質疑応答の実施(ロイロノート for Schoolの提出箱に質問を提出。その中から教員が選択し、代わりに質問の実施)	変更実施
		12月14日(火)	4	・本学独自の発表用ループリックを用いて評価活動の実施 ・各分野講師にも参加を依頼、評価・講評の実施	
	⑯	12月15日(水)	1	「リージョン探究」リフレクション ・ループリック評価表を用いて、評価活動(自己、他者)	通常実施
-	-	-	「リージョン探究」レポート作成 ※12月19日(月)を提出期限とし、Classi上に提出	変更実施	

3	⑰	2月中旬	3	最終成果発表会 ・和歌山城ホールにて各分野の優秀班のみが口頭発表	中止
		2月14日(月)	3	最終成果発表会(オンライン・ホールより配信) ・Zoomウェビナー機能を用いてオンラインにて実施 ・各分野の優秀班1班が口頭発表 ・オンラインでの質疑応答の実施 ・他のグローバル型校、地域の学校からの参加を募る ・ここまで参加して下さった地域の方々にも告知 ・文部科学省担当官による視察	変更実施

※3学期は自主的な活動の期間としており、「Glocal High School Meetings 2022」にも1班が参加

ii 担当講師および提示課題

医療：和歌山県立医科大学 上野雅巳先生

〔課題〕 ①和歌山県における医師偏在、診療科偏在をどのように解決するか
②和歌山県民が平均寿命、健康寿命を延ばすために必要なことは

経済：和歌山大学 足立基浩先生

〔課題〕 With コロナの時代に観光で地域経済を活性化させるには

産業：みなべ町うめ課 中野愛理先生

〔課題〕 みなべ町の梅産業全体として働き手を確保するには

行政：和歌山市都市再生課 まちなか再生班 中村英人先生

〔課題〕 ①道路や広場、公園などの公共空間をどのように使えば賑わいが生まれるか
②あなたが行ってみたいと思う公共空間とは

農業：和歌山県農林水産部農林水産政策局 庄司統弘先生

〔課題〕 和歌山県の農業をどのようにして活性化するか

林業：和歌山県森林・林業局 林業振興課 石橋寛紀先生

〔課題〕 現在の若者が、林業への関心を持ち、実際に働いてもらうためにはどのような取り組みが必要か

7 評価

i 評価方法

各担当講師から提示された地域の抱える課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究学習に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の4段階からなる本学独自のルーブリック評価表（表1）を用いて評価を行った。なお、本ルーブリック評価表は、「リージョン探究」のスタート段階で生徒に配布し、評価基準を明確化するとともに、目指すべき目標としている。また、評価は自己および他者（グループのメンバー）、そして担当教員から実施し、より多面的かつ客観的なものとなるようにしている。

また、発表に関しても、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表2）を用いて、各分野の講師、生徒、教員、コンソーシアム参加機関、など複数の視点から評価を行うようにしている。

ii ルーブリック評価表

(表1)

2021年度和歌山信愛高等学校「リージョン探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究	コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題解決力	表現力・発信力（他者へ）	多様性受容力（他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、活動を通して進んで地域の未来のために貢献しようとする強い意志が感じられた。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、強い好奇心とともに深い探究が行われ、未来の地域のあり方に強い興味関心を持つようになった。	充実した調査を通して得た資料やデータを踏まえ、十分な論拠とともに独創的な解決策を提案することができた。	他者に対して様々な方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげることができた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来地域の未来のために貢献したいという思いを抱くに至った。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、未来の地域のあり方に興味関心を持つようになった。	熱心な調査を通して得た資料やデータを解釈して、解決策を提案することができたが、ありふれた内容に留まってしまった。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、探究活動がより意義あるものとなるように協働することができた。
B	与えられた自らの役割は果たしたが常に受動的で、地域の未来のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、積極的に探究活動に取り組むことができず、興味関心を広げることができなかった。	独自の解決策を提案することができたが、資料やデータ等を活用しておらず、論拠に乏しいものとなってしまった。	他者に対して自らの思いを伝えようとする気持ちはあるものの、伝わらないもどかしさから感情的になる場面が多く見られた。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えを押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、地域の未来のために貢献することへの価値を全く見出すことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、興味関心を持つ意義を全く見出すことができず、探究活動を他のメンバーに任せきりであった。	調べた資料やデータ等をただ提示しただけであった。もしくは、解決策を提案することができていない。	そもそも他者に思いを伝えようとする気持ちに乏しい。もしくは他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、自分の考えに固執していた。もしくは、協力しあうことを放棄するなど協調性に欠けた。

(表2)

【発表に関するルーブリック評価表】

S	説得力があり、内容の理解を助ける発表資料とともに、声量やスピード、視線など聞き手への配慮もなされるなど発表の姿勢もすばらしかった
A①	発表資料に秀でたものが感じられる発表であった
A②	発表の姿勢に秀でたものが感じられる発表であった
B①	発表資料に改善の必要性が感じられる発表であった
B②	発表の姿勢に改善の必要性が感じられる発表であった
C	発表資料に説得力が乏しく、発表の姿勢にも大きな改善が必要な発表であった

【内容に関するルーブリック評価表】

S	丁寧な調べ学習の成果を踏まえ、独創性のある実現可能な課題解決策を提示することができた
A	課題解決策の着眼点などにはおもしろさが感じられたが、具体性や実現性には課題が残った
B	課題解決策が一般的なものであったり、調べ不足であったりして物足りなさが感じられた
C	提示された課題について調べたことをただ発表しているだけであった

※①は資料作成、②は発表の様子に評価の軸を置いたものとなっている。

8 成果 ※文中の【 】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は初年度から数えて3度目の実施となり、その都度改良を加えながら実践している。そんな中で、今年度の大きな特徴は、新型コロナウイルスの感染拡大を恐れ、活動を縮小した昨年度と異なり、新型コロナウイルスの影響を受け入れ、コロナ以前の教育効果を目指した点にある。特に、Key Girlの8つの資質の1つである「表現・発信力」の育成において、フィールドワークにおける地域の方々との交流や、各種発表会での発表や質疑応答の機会を奪われることは大きな痛手であったが、担当教員による模索を通して、コロナ禍における発表会の形式が確立されたことは大きな成果であると考えている。

それでは、まず以下に、本開発単位で育成したい資質における成果について昨年度と対比しながら述べていきたい。

i 資質①「献身性」

		2021年度	2020年度
本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「リージョン探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒	献身性		
	向上した	67.8%	68.0%
	向上していない	2.4%	2.5%
	分からない	29.8%	29.5%

が67.8%となっており、昨年度と比較して大きな変化は見られなかった。

昨年度の報告書でも述べたが、本学はカトリックミッションスクールであり、週に1コマ「宗教」という授業が設定されているだけでなく、日々のお祈りや聖母祭、物故者追悼ミサ、クリスマスミサなどの各種宗教行事、また、教室やトイレなどの学校施設を生徒たち自身が毎日清掃するという伝統もあり、日々の学校生活の中でも「献身性」を育てているため、本開発単位の活動を通して「献身性」が向上したとは考えにくいのだろう。しかし、レポートの中には【和歌山の課題について1年近く取り組み、地域のために活動するということの充実感を味わうことができた。今後は、自分自身の日でも地域を見つめ、貢献できるようになりたいと思う：医療】、【最初はこの「リージョン探究」に何の意味があるのだろうかと思ったが、活動を通して自分たちの生活する地域に対してもっと「当事者意識」を持つべきだという最初のガイダンスでの言葉が今では納得できる。これまでは、自分の生活している地域について何の知識もなかったし、今後に向けて解決していかなければならない課題がたくさんあることも知らなかった。誰かがやってくれるのではなく、自分がその一部分でもいいから携わりたいという気持ちが芽生えたと思う：農業】などという意見が見られ、本開発単位における活動が、「奉仕・貢献」の意識につながっていることが確認できる。

ii 資質②「興味・関心」

		2021年度	2020年度
昨年度と比較すると若干数値は下がっているものの、今年度も多くの生徒が資質の向上を実感した項目となっている。	興味・関心		
	向上した	90.3%	91.5%
	向上していない	2.9%	1.0%
	分からない	6.8%	7.5%

生徒のレポートからも、【私たちは今回和歌山市内の商店街について調べてみた。これまでシャッター通りとなっている姿しか見たことがなかったが、かつてはとてにぎわっていたことを初めて知った。今回の「リージョン探究」ではそこまで踏み込むことはできなかったが、なぜこのような状態になっているのか。今後どうしていくことがここに住む私たちにとって幸せなことなのかという

点にとっても興味を感じており、今後も取り組んでみたいと思うようになった：経済】、【私は「地域林業」を選択したが、今回の「リージョン探究」では最終発表会で全ての班の発表を見ることができたことがとてもよかったと思う。他の分野にも様々な課題があるということは、学年全体で取り組んだ6つの分野以外にもきっと課題はあるはずだ。これから「グローバル探究」に進み、世界の課題について学びを深めていくことになるが、自分が将来取り組みたいと思う「何か」に出会えるのではないかとわくわくしている：林業】など、本開発単位の学びを通して「(社会課題に対する) 興味・関心」が育成されたことが確認できる。

iii 資質③「確かな知識」

アンケートの結果からは90.9%の生徒が「確かな知識」の向上を実感しているという結果が見られた。ま

		2021年度	2020年度
確かな知識	向上した	90.9%	86.0%
	向上していない	0.0%	2.0%
	分からない	9.1%	12.0%

た、向上していないと答えた生徒が1名もいなかったことは大きな成果であると考えている。

生徒のレポートからも、【農業などの分野では後継者不足が問題になっているということは何となく知っていたが、今回梅産業の問題に取り組んだことで、それがいかに深刻なものかということを知ったように思う。また、収穫期が異なる他の作物の農家と連携して対応とする新たな試みなどについても知ることができた。やはり、様々な情報を受け身で何となく聞いているのではなく、「自ら探す」ということに価値があるということを実感できた：産業】、【これまでもインターネットで調べることが正しいとは限らないという話は聞いたことがあるが、正直そっちの方が便利だしと思っていた。しかし、今回の「リージョン探究」を通して自分たちで調べることの大切さを学んだ。ネット上のデータは少し古いものも多く、リアルな「今」とは異なっていることもあるということを実感できた：行政】などと、こちらの「確かな」という言葉の意味をしっかりと理解した上で探究活動を行っている姿を確認することができた。

iv 資質⑤「課題解決力」

「Key Girl」として育成を目指す8つの資質の中で比較的数値が伸び悩む項目の1つがこの「課題解決力」である。

		2021年度	2020年度
課題解決力	向上した	75.5%	77.5%
	向上していない	3.4%	3.5%
	分からない	21.1%	19.0%

今年度も昨年度と同様、数値には伸び悩みが見られた。

生徒のレポートからは、【自分たちなりに色々考えた上で発表した解決策が、講師の先生からも評価をしていただけたので、自分たちには向上したのではないかと感じている：経済】、【中間発表でもらったアドバイスを参考にして最終発表に臨んだことで自分たちなりに達成感を得ることができた：林業】と他者からの評価が向上の実感につながると同時に、【他の班の発表を見て、自分たちの班の解決策はまだ浅いものだと感じた：産業】、【自分たちなりに色々と考えて出した解決策だったが、すでに他の地域で実践されているものだった。なかなか新たな視点から解決策を考えるのは難しいと感じた：農業】などと、他との比較が向上の実感を阻害している例も見られた。また、【色々グループで議論して解決策を考えたので「向上した」と言いたいが、私たちのアイデアが実際に採用されているわけでもないのに、「向上した」と答えるのはちょっと違うと感じた：行政】と「謙虚

さ」のような感情が「向上した」と答えることへのためらいにつながっているのではないかという意見も散見されている。

v 資質⑥「表現・発信力」

昨年度と比較して、今年度一番の伸びが見られたのがこの項目である。

レポートからは、これまで通り【私は人前で自分の

意見を言ったり、発表したりすることが苦手なので、このような活動は苦しいものでした：産業】のように大人しい性格の生徒にとってはなかなか苦しいものであることがうかがい知れるが、【最終発表ではしっかり準備をしていたので、堂々と発表することができた。中間発表は動画だったので正直緊張したが、とてもよい経験になったと思う：医療】、【中間発表で他の班の発表を見たことを活かし、最終発表ではより見やすい資料を作成することができたと思う。話すことだけでなく、相手に伝えるためには資料作成も大切だということを強く感じた：農業】などという意見が見られた。

また、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から昨年度は質疑応答を行わなかったが、「表現・発信力」の向上には、瞬間的な対応も大切であろうと考え、最終発表会および最終成果発表会においては「ロイロノート・スクール」を用いた質疑応答を実践した。【最終発表会で質問を入力したら、自分の質問が選ばれた。「発表の質をより向上させるのはよい質問だ」と聞いたことがあるので、それは自分にとってとてもうれしい経験となった：医療】、【最終発表会では、質問に対して対応しなければならなかった。他の発表では難しい質問をされている班もあり、自分たちにも難しい質問が飛んできたらどうしようとても不安だった。しかし、たまたま私が調べていたことに対する質問で、自分が代表してしっかりと対応できたと思う。それは自信になった：経済】などという意見があり、やはり「質疑応答」が生徒たちの「表現・発信力」の向上の実感につながることも確認できている。

vi 資質⑦「主体性」

かつての本学における一番の課題がこの「主体性」であった。しかし、2015年から探究学習を導入したことによって、生徒たちの変容

を最も強く感じるのがこの「主体性」でもある。しかし、その反面、「主体性が向上した」と回答した生徒が、昨年度は 69.0%、今年度も 69.2%と、運営側の想定ほどには生徒たちの実感へにつながっていないようである。そのため、レポートを見てみると、次のような意見が散見された。【「リージョン探究」の活動を通して、同じグループの人が大きく変わったような気がする。最初は大人しそうな人だと思っていたのに、活動を通してとてもいきいきとした人というように印象が大きく変わった。グループでの議論、発表などすごいと感じることがたくさんあり、このような人が「主体性のある人」なのだなあと痛感した：医療】、【同じ学年なのに、積極的に行動したり、堂々と発表したりとすごい人がたくさんいて圧倒された1年だった。自分もそうなりたいという思いはあるが、なかなか行動に移すことができていない：行政】と、主体性に富んだ生徒と比較することが生徒の実感の

		2021年度	2020年度
表現・発信力	向上した	76.0%	71.5%
	向上していない	6.3%	8.0%
	分からない	17.7%	20.5%

		2021年度	2020年度
主体性	向上した	69.2%	69.0%
	向上していない	4.8%	8.0%
	分からない	26.0%	23.0%

ハードルも上げることにもつながっている現状を確認することができた。

なお同時に、【私たちの班は、農業の活性化のために、和歌山県の特産品の1つである「みかん」に着目した。みかんの販売だけでは冬場だけになってしまうため、通年で販売でき、目玉になるような商品を作りたいと「みかんジャム」を作ることにした。今振り返って自分たちの活動を評価できるのは、実際に「みかんジャム」を作成したことである。他の土地でも「みかんジャム」は販売されているかもしれないが、自分たちで試作したということには価値があると思う：農業】などという意見もあり、向上の実感には至らなくとも、「主体性」の伸びが感じられる意見は多数見られている。

vii 資質⑧「多様性受容力」

「リージョン探究」において比較的高い数値が出るのがこの項目である。本開発単位の活動の特徴の1つにコースやクラスの垣根を取

		2021年度	2020年度
多様性受容力	向上した	80.3%	82.0%
	向上していない	2.0%	2.0%
	分からない	17.7%	16.0%

り払った探究グループの編成があげられるが、これは、本学が「医進」「特進」「学際」という3コース制であること、中学校から進級する「内進生」、高等学校から入学する「高入生」、また、ソフトテニス、バスケットボールなど全国大会常連クラブの生徒が在籍するスポーツクラスと多様な生徒が在籍しているという環境を逆手にとったものである。そのため、【中学校からあまりクラス替えのない環境で過ごしてきた自分にとって、「リージョン探究」におけるグループ活動は非常に衝撃的だった。学校のなかにも様々な考え方があることを知ることはできたのはよかったと思う：経済】、【最初のガイダンスで「これからの私たちは国境を越えた人たちと協働していく可能性が高い」という話を聞いたが、この「リージョン探究」を通して、何となくその意味が分かったような気がしている。同じ学校という狭い範囲の中でもこれだけ個人の意見や考え方が異なるということは、今後より広い社会の中で生活いくことは難しいことなのだと思う：産業】などと、運営側の意図をしっかりと汲み取っていた生徒の姿を確認することができた。しかし、同時に【「リージョン探究」ではクラスを越えて勝手にグループが決められていた点に不満が残る。同じクラスであれば簡単に連絡も取りあえるが、違うクラスの生徒ばかりでグループを編成されると、特定の人ばかりに負担が偏ってしまう。クラブ活動で放課後や休日にも自由に使えない人もいて不平等だと感じたこともあった：林業】などという意見も見られたため、このあたりについては課題が残る。

viii その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで、『「リージョン探究」の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください』という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

- ・複数の視点から物事をみる力
- ・人の話を聞く力
- ・計画的に考える力
- ・資料を作成、編集する力
- ・難しいことに挑戦する力 など

ix 本開発単位における運営面の成果

①コロナ禍における口頭発表会の形式確立

昨年度、新型コロナウイルスによって最も大きな影響を受けたのが口頭発表である。飛沫や密による感染を恐れ、中止という判断をせざるを得なかった。その代替となったのが、事前に撮影、編集した動画である。これは個人で作成したものを持ち寄り、1つの動画にすることにでき、非常に効率的ではあるが、その反面、「人前ではないので緊張感を与えることができない」、「1度の機会ではいかに他者に伝えるかという力を養いたいのに、何度でも録り直しができる」などのデメリットも見られた。

また、同様の理由で質疑応答も中止することとなり、適切な質問を行う力とともに、瞬間的な対応力を養う機会も奪われることになってしまった。

そこで、今年度は、新型コロナウイルスのせいだとあきらめるのではなく、コロナ禍でもコロナ以前と同様の教育効果をもたらす口頭発表会の形式を考え、実践することを運営側の目標とした。そこで、これまでは体育館やホールなどを用い、発表者と聞き手とを同じ場所に集めていたがGsuite for Educationの「GoogleMeet」を用い、聞き手は各HR教室、発表者は別の特別教室と分離することで密になることを解消した。また、発表者は発表前には消毒を行い、マスクをつけたまま発表することで飛沫による感染も防ぎ、オンラインではあるがリアルタイムでの発表会を可能にした。

さらに、株式会社LoiLoの「ロイロノート・スクール」の提出箱機能を活用することで質問も可能にした。発表後に質問を記入し、提出する時間が必要なため、若干のタイムロスが生じてしまうものの、提出された質問の内容を教員が確認した上で質問者を指名できるというメリットも判明した。質問の質も保証できるというのは、従来の口頭発表会にもなかったメリットである。

②次年度以降の「総合的な探究の時間」の運営

本事業における3年間だけでなく、SGHアソシエイトとしての5年間の取り組みを通して、特定の教員だけが探究学習に関わるのではなく、当該学年の教員全員が創意工夫をもって探究学習の運営に携わるといった環境が成立した。依然として、その理解という部分においては、個人差は残るものの、「生徒の変容」および「探究学習を活用した進路確保」という2つの成果が次年度以降の「総合的な探究の時間」における本事業プログラムの継続という結論につながっている。

9 事後アンケートの集約

8でも述べた通り、本開発単位の終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

○質問項目

- ①「リージョン探究」の学びを通して、将来「(現在自らが生活する)地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	83.6%	86.5%
当てはまらない	16.4%	13.5%

- ②「リージョン探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「(現在自らが生活する) 地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	88.5%	85.0%
当てはまらない	11.5%	15.0%

- ③「リージョン探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	98.1%	98.0%
当てはまらない	1.9%	2.0%

- ④「リージョン探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	71.0%	66.0%
当てはまらない	29.0%	34.0%

- ⑤「リージョン探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	61.5%	70.0%
当てはまらない	38.5%	30.0%

- ⑥「リージョン探究」の学びに対する自らの姿勢に対して自己評価をしてください。

		2021年度	2020年度
S	楽しみながら積極的に取り組むことができた	20.3%	43.5%
A	積極的に取り組むことができた	57.5%	38.5%
B	あまり積極的に取り組むことができなかった	21.7%	15.5%
C	消極的にしか取り組むことができなかった	0.5%	2.5%

10 昨年度の課題とその対応

最終年度となる3年目の今年度は、コロナ禍への対応という部分で大きな成果をあげることができたと認識しているが、昨年度の本報告書で挙げた課題がいかに克服されたかについては検証しておきたい。

i 「探究の深み」と「発展的活動」の不足

各種の発表会などに参加し、本校の生徒の発表と他校の発表と比較すると本学生徒の「探究の深

み」の不足が気になった。そこで、今年度の運営を行うにあたり、生徒の探究活動をより深いものにしていくために、教員がどの程度関わるのかという議論を行った。その結果、やはり本学が探究学習を行うにあたって大切にしたいのは、「教員はあくまでも伴走者であるべき」ということだった。教員が関わりすぎるとそれは生徒の探究ではなくなってしまう。たとえ低学年段階で探究の質が浅くなり、各種の発表会で表彰されなくても、生徒が先輩や他校の生徒の発表を通して自分たちで気づき、深めていくことこそ本物の探究であると考え、手を出したくてもぐっと我慢するという指導を行った。今年度の締めくくりとして、3年間の成果を地域へと発信する最終成果発表会を行い、高校1年生から大学1回生までの代表生徒が登壇したが、明らかに学年による成長が見られたため、本指定の終了後も本学らしく、地道にコツコツと取り組んでいきたいと思っている。

また、「リージョン探究」では1月から3月を発展的活動の期間とし、「リージョン探究」の学びをアクションなどにつなげてほしいと考えていたが、こちらの方は昨年度と同様、新型コロナウイルスの影響があり、学外での積極的な活動をなかなか奨励することができず、今年度も低迷してしまったように思う。この問題の解決には「社会状況」も大きく関わってくるため、もう少し長い目で対応していきたいと思う。

ii 「表現・発信力」の育成

すでに述べた通り、昨年度は新型コロナウイルスに対する正しい知識にも乏しく活動が消極的になってしまった。そのために、口頭発表や質疑応答を行うことができず、録画形式の発表となったことで画像の後ろで原稿を見ながら読むことも可能となり、聞き手に対して思いや熱意を届けるという活動を行うことができず、本来想定していた形で「発信・表現力」の育成を行うことができなかつた。そのため、今年度の運営では、その改善を優先し、8-ixの②に報告した形で対応することができた。

iii 客観的かつ適切な評価活動の実施

本学では、7-ii表1にて紹介した「S」「A」「B」「C」の4段階からなるルーブリック評価表を用いて自己評価、グループメンバーおよび担当教員からの他者評価を実施している。しかし、他者評価において、今後の人間関係などへの配慮からどうしても無難な評価をせざるを得ないという意見が届いていた。

そこで、今年度はガイダンスや中間発表などの連絡や、最終発表後に実施したアンケートを通して、本当の意味で他者を育てる適切な評価の大切さを訴えかけた。どの程度の効果があったかは定かではないが、これも継続することで客観的かつ適切な評価活動につながっていくと考えている。

なお、以下に、最終発表後に実施したアンケートの結果を述べる。

	2021年度
相手のことを考え、客観的かつ適切な評価やアドバイスができた	72.5%
もう少し厳しい評価やアドバイスを行いたかったが、相手の感情が気になり、甘いものになってしまった	25.6%
評価をしなければならなかったため行っただけで、適切なものではない	1.9%

白崎海洋公園における 観光客減少問題

1班

川端佐保 西村真里奈 下地柚華
出口莉子 坂本桃々夏 南真由里



目次

① 解決策について

1. 白崎海洋公園を研究テーマに選んだ理由
2. 白崎海洋公園の問題点
3. 私たちの考えた解決策
4. 解決策の効果
5. コストについて

② 宣伝方法と資金源について

最後に…まとめ

①-1. 白崎海洋公園を 研究テーマに選んだ理由

- 海が綺麗 



- 美味しい食べ物がたくさんある

実際の観光客の人数

宿泊客				
	令和元年	令和2年	前年差	前年比
観光客計	121.734	96.507	25.227	79.28%
外国人	893	88	805	9.85%
日帰り客				
	令和元年	令和2年	前年差	前年比
観光客計	765.975	614.353	151.622	80.21%

https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/062400/doutai2_d/fil/R01_doutaityouusa.pdf

①-2. 白崎海洋公園の問題点について

- 交通の便が悪い
- 白浜に行く途中にあるので見過ごされがち
- 知名度が低い



①-3-1. 解決策

白崎海洋公園内の
キャンプ場を開発する

①-3-2. 解決策 理由

- 今すでにあるキャンプ場を活用できる
→ コスト削減

①-3-3. キャンプ場を発展させるためには

- ① しおりの作成
- ② レンタル用品の充実
- ③ コインシャワーの新設
- ④ コテージの新設



①-3-4. さらに…

③最大宿泊可能組数は約20組
→ 初期段階では半数の10室で充分

④現在コテージは2棟
→ コスト面を考慮すると2棟の新設が妥当

①-4-1. 解決策の結果：茨城県で行われた取り組み

キャンプの参加者へのその地域ならではの食材を使ったキャンプ飯やそのキャンプ飯の食材を買うことができるお店の紹介を載せたしおりの事前配布

→ 県内の食材の購入率UP↑



県内での食材購入率
43.3%→**96%**
(キャンプ場売店での購入含む)

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000096.000007764.html>

①-4-2 キャンプ飯

<金山寺みその肉キャベツ>

『材料』(2~3人)

- 豚小間切れ
 - キャベツ(芯は抜く)
 - オリーブオイル大さじ1
 - 金山寺みそ
 - 片栗粉
- 水150cc



『作り方』

- ①オリーブオイルを熱したフライパンに入れ、金山寺みそを投入し、混ぜ合わせる。
- ②①に豚小間切れを投入し、赤いところが消えるまで混ぜる。
- ③一度火を止めて、キャベツを適当な大きさにちぎり入れる。
- ④再び火を付けて③が炒まったら水150ccを混ぜて、水分を飛ばす
- ⑤水50ccで溶いた片栗粉を回し入れ、混ぜてとろみが出たら完成!

<https://cookpad.com/recipe/2304285>

<https://www.photolibary.jp/>

①-4-3 キャンプ飯の食材の購入場所

檜屋

住所：日高郡由良町門前554-3
電話番号：0738-65-3007
営業時間：10：00～19：00
定休日：水曜日 不定休
金山寺みその価格：600円(250g)



阪和自動車道湯浅御坊道路広川ICから20分



<https://wakayama-hidaka-history.jp/introduce/日高発祥ブランド%E3%80%80金山寺味噌>「金山寺味噌」(-2/

①-5-1.コストについて

* レンタル用品の充実	約15万×10円
* コインシャワーの新設	約30万×10円
* コテージの新設	約260万×2円
* 広告等の印刷費用	約1万円

合計額

約969万円

参考元[https://teddy boy8.com/](https://teddyboy8.com/)

①-5-2.一からキャンプ場を作る場合

- ① 土地費用が200万～3000万円必要
- ② コテージやコインシャワー等の建設費用に約1000万円程度必要

コストが2倍近くに！

参考元 https://taxtech.co.jp/starter/retire-camp_management/

②-1. 宣伝方法と資金源について

クラウドファンディングの利用

メリット

内容を重視した記事が書けるため、クラウドファンディング自体が宣伝として利用できる。

実際に、もしクラウドファンディングをしたら、という体で、記事を書いてみました！

「日本のエーゲ海」白崎海洋公園の魅力を伝えたい！ 公開前

Shinai K1 まちづくり・地域活性化 和歌山県



知る人ぞ知る名所、純白の石灰岩を誇る和歌山県由良町 白崎海洋公園のコテージで思い出に残ること間違いなしのグランピングを体験しませんか？

¥ 現在の支援総額

0円

0%

目標金額は10,000,000円

支援者数

0人

募集終了まで残り

93日

公開されたらメールでお知らせ

お気に入り 0

はじめに・ご挨拶

初めまして、和歌山信愛高等学校に通っている一年生6人です。

私たちの活動目的は、"日本のエーゲ海"とも呼ばれる絶景「白崎海洋公園」の魅力を県内に、そして県外の方にも知っていただくことです。

ここ数年、猛威を振るっている新型コロナウイルス。

そんな中で、なかなか今まで通りにショッピングモールや遊園地などには行きにくくなってしまったのではないのでしょうか。

そこで！和歌山の白崎海洋公園で、大自然に囲まれながらコテージでグランピングはいかがですか。



Shinai K1

📍 日本

🔒 認証していません

[特定商取引法に基づく表記](#)

📧 [メッセージで意見や質問を送る](#)

このプロジェクトで実現したいこと

和歌山県由良町にある白崎海洋公園。

純白の石灰岩が美しい、まるで異国のような絶景。

しかし、毎年観光客は減り続けています。

このプロジェクトは、All-or-Nothing方式です。
目標金額を達成した場合にのみ、2022/05/15 23:59:59までに集まった金額がファンディングされます。

FAQ

そこで私たちはこのように考えました。

白崎海洋公園には隣接するキャンプ場があります。

- ①新しくコテージを新設する。
- ②数年前の台風で破壊されてしまったコインシャワーを復活させる。

これらを通じて、より多くの人々に白崎海洋公園の魅力を知ってもらい、

「もう一度来たい！」

というお声をいただけるような変化を作り出すことが目的です。

Q. クレジットカードの決済はいつ行われますか？

Q. プロジェクトに関する質問はどうすればいいですか？

Q. 間違って支援した場合はどうなりますか？

プロジェクトを立ち上げた背景

きっかけは、学校の授業「リージョン探究」で地域の活性化について調べた時に、「日本のエーゲ海」という文字が目にとまったことです。

白崎海洋公園を調べていけばいくほど、多くの魅力とその問題点に気が付いていきました。

「どうしてこんなにきれいな場所なのに、観光客数がどんどん減ってるの？」

改めて考えてみると、私たちも白崎海洋公園に行ったことが少なく、行ったことがあっても数回、もしくは行ったことがありませんでした。

だからこそ、私たちはもっともっと白崎海洋公園の魅力を伝えたい！そういう思いをもって、このプロジェクトを企画しました。

資金の使い道・実施スケジュール

- ①レンタル用品 約15万円×10セット
- ②コインシャワーの新設 約30万円×10部屋
- ③コテージの新設 約260万円×2棟
- ④広告などの印刷費 約1万円
- ⑤ラジオ広告 約50万円

リターンのご紹介

- ①お礼の手紙 1000円
- ②コインシャワーやキャンプ用品の無料貸し出し 5000円
- ③新設されたコテージの1泊利用 7000円
- ④由良町特産物の密柑、金山寺味噌、クエ 8000円

<募集方式について>

本プロジェクトはAll-in方式で実施します。目標金額に満たない場合も、計画を実行し、リターンをお届けします。

②-2 宣伝方法と、資金源について

リターン

「体験」をテーマ

白崎海洋公園コテージ利用



体験が、愛着を持つ事に繋がるのでは。
それ以外にも、由良町の特産物である、みかん、金山寺味噌、クエなどを、投資額により変化させ、リターンとする

まとめ

白崎海洋公園を発展させるために…

- ① キャンプ場の再興
- ② クラウドファンディングを利用したコスト削減
- ③ クラウドファンディングを利用した宣伝

36班

「林業を活性化させるために」



どんなものに人は興味を寄せられるか？

温かみのある 柔らかいイメージのもの？



「木の家」

リラックス効果??



人それぞれの性格

※どんなものとは
決めれない

林業とコラボする企業側の目標

•紀州材で作られた新商品



•木の匂い、リラックス効果



•売り上げ増加

流行りに乗る



- インスタグラム
- TikTok



などの最近の流行りのアプリを

使って林業を広めていく 🌳

例えば木を切っている所など



企業とコラボすることによる．林業側のメリット

- 有名な企業とコラボすることで注目される
- コラボするとできることの幅が広がる
- 色々な年代のたくさんの人に知ってもらえる
- 様々な分野のことに挑戦できる

現在、実際に林業とコラボしている企画

1. サバイバルゲーム



2. 家具



トヨタと住友林業のコラボ

木製のコンセプトカー

国産材で作られている



考え

調べてみると案外コラボしているものが少なかった

→ コラボしやすいような企業と もっと
コラボすればいい！



コラボする企業

ニトリ



国産材の新ブランド



新しい家具などで話題につながる



林業の**活性化**

林業側の目標

企業との交流で安定した供給先を確保
→ 安定した**利益**につなげる

コラボで話題を呼び、林業を**活性化**させる
(働き手を増やす等)



企業とコラボすることの問題点

- 交渉や調整に時間がかかる
- コストがかかる



企業とのコラボ商品を通して、
紀州材というものを知ってもらう



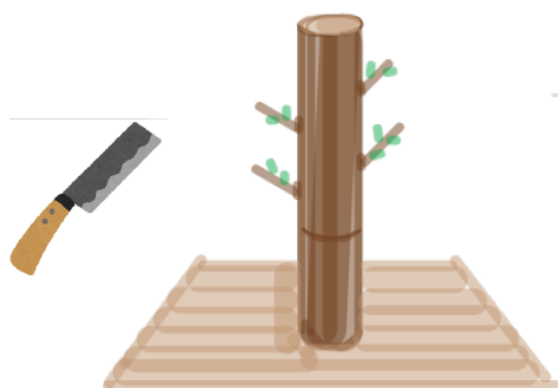
さらに紀州材や林業に触れる機会
を作って、興味を持ってもらう！



幅広い層を対象にした職業体験の機会を提供

未就学児対象(3歳程度～)

枝打ちや伐採など、林業に関わる作業をおもちゃなどを使用して遊び感覚で楽しみながら林業に興味をもってもらう。



軽い段ボールやプラスチックなどを用い、地面などの一部を木製にするなど安全に配慮したもの。接着面は面ファスナーを使用。

小学生対象(6歳程度～)

林業の現場に招いての見学や、端材、ノコギリを使用しての軽い実践的な体験などをして林業について学んでもらう。



中高生対象(13歳程度～)

小学生と同様に現場の見学、端材とチェーンソーを使用しての体験などをして林業について学んでもらう。



大学生以上対象(19歳程度から)

林業についての講習を行い知識を深め、実際に林業に従事する人を数人招いての質疑応答の時間を設けたり、伐採し、短くなった木の根本を使用しての伐採の体験などを行う。





チェーンソーを体験！



まとめ

- SNSを使っでの情報発信

流行のアプリを使って林業を宣伝。若者の目にも留めてもらう。



- 過去のコラボ内容

伐採予定地でのサバイバルゲームや森林でのフィットネス。
トヨタと住友林業との企業間コラボ。



- 企業とのコラボの提案

ニトリとのコラボで新ブランドを作る。



② 開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校2年生対象 ※ただし、昨年度高校1年生1月から実施)

1 目的

本学の目指す「Key Girl」の姿は、グローバルな視点を有しながらも地域の未来のために貢献できる人材である。「リージョン探究」では自らの住む地域にも多くの課題があることを知り、地域に対して「興味・関心」が育まれた。また、地域の方々との協働活動は「絆」となり、いつか地元に対して自らの持てる力を還元したいという郷土愛にも繋がっているはずである。しかし、自分さえよければいい、自分の身近なところだけがよければいいという考えのもとでは、一時的な解決はできても sustainable なものとは言えない。「世界」と「地域」とは相反するものではなく、世界に目を向け、世界の課題を学び、そこで獲得したグローバルな視点を、地域にフィードバックする力へと発展させることを目的とする。

2 内容

グローバルな視点を獲得するために、SDGsの中から4つの分野を選び、その範囲の中で探究活動を実施する。2015年9月の国連サミットで採択された国連加盟193カ国が2030年までに達成する目標であるSDGsは、17の目標と169のターゲットから構成され、持続可能な社会を実現するために、地球上の誰一人取り残さないことを誓ったものである。

本学の礎が明治初期に文明開化の陰で置き去りにされた人々に教育と福祉を提供した4人のフランス人シスターにあることから「教育(目標4:質の高い教育をみんなに)」、「福祉(目標1:貧困をなくそう、目標2:飢餓をゼロに、目標3:すべての人に健康と福祉を、目標6:安全な水とトイレを世界中に)」。また、本学がカトリックミッションの女子校であることから「女性(目標5:ジェンダー平等を実現しよう)」。さらに、SGHアソシエイト時代より実施してきたアンケートで環境問題をテーマに探究活動を行いたいという生徒からの要望が多かったことから「環境(目標7:エネルギーをみんなにそしてクリーンに、目標11:住み続けられるまちづくりを、目標12:つくる責任つかう責任、目標13:気候変動に具体的な対策を、目標14:海の豊かさを守ろう、目標15:陸の豊かさを守ろう)」。以上の4分野を「グローバル探究」のテーマとする。

なお、本開発単位においては、「リージョン探究」よりも難易度をあげるために、テーマは設定するものの、課題に関しては生徒が独自に設定することとする。また、原則グループでの探究活動を推奨するが、どうしてもこの課題でやりたいというものがある場合は、個人での探究活動も可能とした。

さらに、フィールドワークも「自分で創るフィールドワーク」と命名し、自分たちの設定した課題の解決のために必要なフィールドワーク先を自分たちで開拓し、交渉の上、インターンシップの形で受け入れを目指す(ただし、2020年度より新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点からオンラインによるインタビューを推奨)。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

4 新型コロナウイルスの影響

開発単位Ⅰの報告でも述べた通り、昨年度と比較するとスケジュール的な面での影響は非常に少なかった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を防止する観点から、各種の対面型の活動に関する制約からはどうしても逃れることができなかった。特に、次項で詳しく説明する「グローバル探究」の目玉となる活動である「自分で創るフィールドワーク」に対して自由に取り組むことができなかつ

たことは非常に残念なことであった。

5 「自分で創るフィールドワーク」

i 概要

「グローバル探究」における1つのチャレンジが「自分で創るフィールドワーク」である。東京、大阪、和歌山の3カ所を設定し、夏期休暇期間中の最低2日間インターンシップを実施し、その中で調査活動を行うこととする。なお、東京・大阪に関しては、生徒の安全を確保するため受け入れの日時など細かな条件を課す。

ii 新型コロナウイルスの影響

前項でも新型コロナウイルスに関しては述べたが、東京や大阪など、基本的に学外での活動が中心となる本プログラムは、新型コロナウイルスの影響を非常に大きく受けるものである。本フィールドワークは、自ら設定した課題の解決のために、生徒自身が直接企業や各種団体などと交渉し、フィールドワーク先を確保するというチャレンジ性の高いプログラムで、生徒の主体性育成にとって大きな役割を果たすものだと認識していたが、本フィールドワークを実施することは感染拡大を助長しかねず、保護者の理解も得にくいだろうという判断のもと、今年度も当初想定した形での実施は断念した。

iii 代替案

本学では、昨年度より生徒1人が1台のiPadを所有しており、現在「グローバル探究」に取り組んでいる高校2年生もiPadを所持している。そこで、「自分で創るフィールドワーク」の代替として、そのiPadを活用し、Zoomなどのオンライン会議アプリを用いて距離の壁を越えた「オンラインフィールドワーク」の実施を推奨した。もちろん、「自分で創る」の部分が大切であるため、自分たちの設定した課題の解決のために必要と考える調査を行うために、調査先の選定や交渉は全て生徒自身で行うという本開発単位のフィールドワークの中で最も重視した部分は継続した。なお、「自分で創るオンラインフィールドワーク」と名付け、期間も夏期休暇中にこだわらず、継続して実施してよいことにした。その結果、官公庁や企業、各種団体のHPの中の問い合わせ窓口や電話などを用いて積極的にコンタクトをとった生徒が多数いた。

iv 「自分で創るオンラインフィールドワーク」実績

生徒たちの交渉によって、計30の企業、団体、事業所などから協力をいただき、オンラインフィールドワークを実現することができた。以下に主なものを紹介する。

環境省、和歌山県庁、和歌山県福祉サービス運営適正化委員会、和歌山県教育委員会

和歌山信愛大学、和歌山県立医科大学、金沢大学、

Yahoo!、株式会社インテリックス、ヤクルト販売株式会社、イオンモール株式会社

Save the children、法テラス日本司法支援センター、日本ケアラー協会、男女共同参画センター

など

6 概要（実践）

i 昨年（2020年）度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
3	①	1月24日（月）	1	「グローバル探究」ガイダンス（オンライン） ・「リージョン探究」の振り返り ・「グローバル探究」の内容説明 ・「グローバル探究」ループリック評価表の配布	変更実施
	②	2月21日（月）	2	「グローバル探究」分野選択講義①（オンライン） ・「女性」「福祉」分野	変更実施
	③	3月16日（水）	2	「グローバル探究」分野選択講義②（オンライン） ・「環境」「教育」分野	変更実施

※「グローバル探究」は高校1年生の1月からスタートしている。

ii 今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
1	④	4月26日（月）	1	「グローバル探究」ガイダンス②（オンライン） ・年間スケジュールの連絡 ・「グローバル探究」ループリック評価表の配布	変更実施
	⑤	5月10日（月）	1	分野選択およびグループ編成 ※ただし、個人での活動もOKとする	通常実施
	⑥	5月31日（月）	2	グループワーク① ・探究課題の設定、フィールドワーク先の選定	通常実施
	⑦	6月14日（月）	2	グループワーク② ・調査活動の開始、フィールドワーク先へのアポ取り	通常実施
	⑧	7月12日（月）	2	進捗状況報告会（オンライン） ・分野ごとに講師に進捗状況の報告。アドバイスを受ける	変更実施
	⑨	7月13日（火）	2	グループワーク③ ・講師からのアドバイスを踏まえ、ブラッシュアップ活動	通常実施
夏期休暇	-	-	-	「自分で創るフィールドワーク」	中止
	-	-	-	「自分で創るオンラインフィールドワーク」 ※ただし、今年度は夏期休暇期間外の実施も推奨した	変更実施
2	⑩	9月6日（月）	2	グループワーク④ 中間発表のアウトラインの作成 ※昨年度同様、動画による発表とする	変更実施
	⑪	9月13日（月）	2	グループワーク⑤ 中間発表の資料作成	変更実施
	⑫	10月4日（月）	2	グループワーク⑥ 中間発表動画および発表原稿作成	変更実施

2	⑬	10月11日（月）	2	グループワーク⑦ 中間発表動画の撮影	変更実施
	⑭	10月中旬	2	ポスターセッション（体育館・口頭発表）	中止
		10月18日（月）	2	動画による中間発表（オンライン） ・ GoogleMeetを用いて分野ごとに実施 ・ 各分野講師も参加の上、アドバイスおよび評価の実施 ・ 本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・ 生徒も動画を視聴の上、評価活動の実施	変更実施
	⑮	10月25日（月）	2	グループワーク⑧ 中間発表からのブラッシュアップ活動	通常実施
	⑯	11月8日（月）	2	グループワーク⑨ 最終発表用資料および発表原稿の作成	通常実施
	⑰	12月16日（木）	3	最終発表会（対面/オンライン・口頭発表） ・ 各講師へはGoogleMeetを用いてオンライン配信 ・ 各講師による講評と評価の実施 ・ 体育館、ホールの2か所で3コマ×2日間で実施	変更実施
		12月17日（金）	3	・ 休み時間を利用して、会場間の移動は可能 ・ 本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価活動の実施 ※質疑応答の実施（質問用端末を使用）	
	⑱	12月18日（土）	1	「グローバル探究」の活動振り返り、評価活動	通常実施
—	—	—	「グローバル探究」レポート作成 ※12月23日（木）を締切とし、Classi上で提出	通常実施	

iii 担当講師

本開発単位は、本年度が本格実施初年度ということもあり、「教育」「福祉」「女性」「環境」のそれぞれの分野に担当講師を選定、依頼した。

教育： 和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科 辻伸幸先生

福祉： 日本赤十字社和歌山医療センター
外傷救急部/外科医/国際医療救援登録要員/国際人道法普及担当 益田充先生

女性： 一般社団法人「女性と地域活性推進機構（WAO）」代表理事 堀内智子先生

環境： 徳島大学 環境防災センター学術研究員 松重摩耶先生

7 グループの編成

本開発単位の2で述べた通り、本開発単位はグループ活動を推奨するものの、生徒たち自身で課題設定を行うことから、「主体性」を尊重するため、個人での探究活動も許可した。そのため、「教育」分野が12班、「福祉」分野が14班、「女性」分野が20班、「環境」分野が13班と、全4分野で59班のグループが編成され、6人の生徒が1人で探究活動を行うことになった。

8 評価

i 評価方法

各探究グループにおいて設定したグローバル課題に対して、「2030 年度を期限とし、持続可能な最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究活動に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の4段階ルーブリック評価表（表1）を用いて自己評価および相互評価、そして担当教員からの評価を行った。また、中間発表および最終発表会における発表および資料に関しては、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表2）を用いて、他者評価だけでなくアドバイスも行うこととした。

ii ルーブリック評価表

（表1）

2021年度和歌山信愛高等学校「グローバル探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究		コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	表現力・発信力 (他者へ)	多様性受容力 (他者から)
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、進んで他者や社会のために貢献しようとする意志が感じられた。	課題意識を持って活動をスタートし、強い好奇心とともに深い探究が行われたことで、関連する他の分野にも課題意識が広がった。	グローバル探究にふさわしい独自性に富んだ具体的な課題を設定することができた。	先行研究を踏まえ、十分な論拠とともに、独創的な考えを展開することができた。	他者に対してさまざまな手法を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人も自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来他者や社会のために貢献したいという思いを抱くに至った。	課題意識を持って活動をスタートし、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、さらに興味関心が広がった。	グローバル探究にふさわしい具体的な課題を設定することができた。	調べた資料やデータを解釈し、自らの考えを展開することができた。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、活動がより意義のあるものとなるように活動することができた。
B	与えられた自らの役割は果たすが主体的なものではなく、他者や社会のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	課題意識を持って活動をスタートしたにも関わらず、積極的な探究を行うことができず、興味関心を広げることができなかった。	グローバル探究にはふさわしいが、漠然とした課題設定となってしまった。	独自の考えを展開しているが、調べた資料やデータを活用できておらず論拠に乏しい。	他者に思いを伝えようとする気持ちはあるが、もどかしさから感情的になることが多かった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えにこだわるが多かった。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、他者や社会に貢献しようとする意志も見られなかった。	他者の課題意識に追従して活動をスタートさせたため、興味関心をもつ事柄を見出せず、積極的に探究を行うこともできなかった。	グローバル探究に関連していない課題設定となってしまった。	調べた資料やデータをただ列挙しただけにとどまっている。	他者に思いを伝えようとする気持ちは持っていない。もしくは、他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、周囲から促されて交流をするだけだった。

(表2)

2021年度「グローバル探究」最終発表会 ルーブリック評価および感想シート

【内容】

S	課題の設定および解決策に独創性や実現性があり、非常に興味深い内容だった。
A	課題の設定もしくは解決策の着眼点などに良さがあり、さらなる発展が期待できる内容だった。
B	課題の設定もしくは解決策が一般的なものであり、内容的にはもの足りなさを感じられた。
C	設定した課題について調べたことをただ発表しているだけであり、解決策については触れられないなど内容に乏しさを感じられた。

【発表】

S	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、聞き手のやる気や主体性まで引き出されるような発表だった。
A	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされた発表だった。
B	声量や話すスピードなどに物足りなさはあったが、聞き手に自らの成果を伝えようとする思いが感じられる発表だった。
C	聞き手に自らの成果を伝えようという意識や、ともによりよい探究活動を行おうとする意識に欠けた発表だった。

分野	班へ	組	より
----	----	---	----

評価	内容		発表	
----	----	--	----	--

発表を聞いての感想	

9 成果 ※文中の【 】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は初年度のプレ実施から数えて3度目の実施となり、例年改良を加えながら実践している。特に今年度は、昨年度とは異なり、開発単位I「リージョン探究」同様、新型コロナウイルスの影響を受け入れた上で、コロナ禍以前の教育効果を目指した点にある。特に、「自分で創るフィールドワーク」を2年連続で実施できなかった点は非常に残念であるが、昨年度の経験を踏まえ、スムーズな形で「自分で創るオンラインフィールドワーク」へと移行することができた。

また、本開発単位では、開発単位I「リージョン探究」で育まれた地域の未来に対して貢献したいという思いを、グローバルな視野と考え方を身につけることで、広い視野をもって地域に貢献できる力へと発展させることを意識するとともに「Key Girl」の8つの資質全てを育成することを目指している。

では以下に、本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

i 資質①「献身性」

本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「グローバル探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒が76.7%となっており、昨

		2021年度	2020年度
献身性	向上した	76.7%	60.5%
	向上していない	4.0%	3.2%
	分からない	19.3%	36.3%

年度よりも大幅な伸びを見せている。生徒のレポートからは、【今年度私はあえて1人で「グローバル探究」に取り組んだ。昨年度の「リージョン探究」はグループでの活動でメンバーに頼ってしまったところがあると感じたからだ。グローバルな社会課題を持続可能な方法で解決に導くという「グローバル探究」の活動は非常に大変だったが、その活動を通して誰かのために活動することの大切さを感じることができるようになったと思う：福祉】、【「グローバル探究」では、解決策を導くにあたって、色々な方の協力を得るために積極的にコンタクトをとるという活動があった。私は環境分野を選じたが、様々な人が、このままでは地球環境は破滅してしまうという思いのもと地道に活動していることを知った。その方々の思いを通して、自分自身も何らかの形で未来の人たちが不安なく生活できる環境を取り戻すために尽力したいと思うようになった：環境】などと、「グローバル探究」の学びや活動を通して、誰かのために行動することの尊さに気付いた様子が見られた。

ii 資質②「興味・関心」

昨年同様92.6%と非常に高い割合の生徒が「(グローバルな社会課題に対する)興味・関心」の向上の実感を述べており、成果の感じられる項目となった。

		2021年度	2020年度
興味・関心	向上した	92.6%	91.8%
	向上していない	1.3%	1.8%
	分からない	6.1%	6.4%

レポートからも【「グローバル探究」の良さは、自分で課題設定を行うことによって興味を感じている分野について取り組むことができる点だと思う。そのため、この1年間ほとんことん取り組むことができたと思う：教育】、【1年という長い期間取り組んだことは大変だったが、興味や関心があることについてより深く知る機会を持つことで、さらにその課題の奥深さに気付くことができた：教育】などと、課題提示型の「リージョン探究」を経て、課題設定型の「グローバル探究」を実施するという本プログラムの展開も興味・関心の向上に繋がっていることが確認できた。

iii 資質③「確かな知識」

本資質も昨年度より高い向上の実感を得ていたが、今年度は95.3%とさらに伸びが見られ、成果を感じることでできる項目となった。

		2021年度	2020年度
確かな知識	向上した	95.3%	83.2%
	向上していない	0.7%	0.9%
	分からない	4.0%	15.9%

生徒のレポートからも、【ネットの情報を信じるなどということはよく言われるが、それでもインタ

ーネットの手軽さは私たちにとって大きな魅力だと思う。しかし、今回学外の方々にインタビューするという少し面倒な形で調査を行う機会を持ったが、直接コンタクトをとって得た知識というものは貴重なものだと感じる事ができた：女性】、【自分たちも積極的に「グローバル探究」の活動に取り組んだが、今回多くの他の班の発表を聞くことができたことに価値があると感じている。学年の皆が同じような思いをして集めた様々な分野の知識を共有したことで、自分自身の教養みたいなものが豊かになったと思う：福祉】などと、「確かな知識」の「確かな」の部分をしっかり理解した上で、その力の向上を実感していることが確認できた。

iv 資質④「課題発見および設定力」

本開発単位において最も重視しているのがこの「課題発見および設定力」である。講師から課題を提示される「リージョン探究」とは

		2021年度	2020年度
課題発見 および設定力	向上した	82.0%	75.9%
	向上していない	4.0%	3.2%
	分からない	14.0%	20.9%

異なり、本開発単位では、「教育」「福祉」「女性」「環境」の4つのテーマの中から、グループおよび個人で課題を発見・設定した上で探究活動を行わなければならない、その難易度を一段階あげている。今年度は、ガイダンスの際に「設定した課題は自由に変更してもよいこと」、「グループ編成後も課題設定を行う期間をしっかり確保していること」の2点を意識して丁寧に行った。それが今回の結果に反映されているのかは定かではないが、昨年度よりも本項目の数値が向上しているのは成果の1つと言えるだろう。

なお、レポートからは、【テーマの選択のみで自由に課題を設定してもよいという「グローバル探究」の活動はとても難しいものだったのだと今なら分かる。世界中に解決しなければならない問題はたくさんあるが、今の私たちができることにも限界があると思うからだ。私は「リージョン探究」の反省から、「グローバル探究」ではアイデアだけでなく、そのアイデアを行動に移したいと考えていた。そういう点からも今回取り組んだ現地で手に入るもので作る水のろ過装置の活動を通して、「課題発見および設定力」の向上を実感できている：福祉】としっかり運営側の意図を汲み取って質の高い探究活動に取り組んだ生徒の姿を確認することができた。

また、【自分たちでは適切な課題設定ができているか自信はなかったが、発表のアドバイスシートで「斬新な発想でとても興味深い発表でした」というコメントをもらったことがとてもうれしく、自信になった：教育】と他者からの評価が成長の実感に繋がった例も確認することができた。生徒にとって課題設定を行うということは非常に難しいチャレンジであると同時に、難しいからこそ大きな自信へと繋がるものであるということが分かった。

v 資質⑤「課題解決力」

アンケートの結果からは、本項目においても昨年度と比較し、更なる成果の感じられる結果が出ている。

		2021年度	2020年度
課題解決力	向上した	80.5%	73.1%
	向上していない	5.4%	3.1%
	分からない	14.1%	23.8%

生徒のレポートからも【私たちは「性教育」をテーマに探究活動に取り組んだ、社会ではその問題

に触れることすら好意的に受け止められていないように感じていたが、「グローバル探究」では全く制約なく自由に取り組むことができたのがとてもうれしかった。自分たちなりにこれからの「性教育」の在り方について具体的にまとめることができたという実感があるので、それが社会的にどのように評価されるのかは別にして、難しいことにチャレンジし、具体的な提案へと繋げる力は確実に向上したと思う：教育】、【これまでは社会が大きく変化するなどと思ったことがなかったが、実際に社会が変化するのを目の当たりにした今「地域協働事業」のような活動はとても大切なものなのではないかと感じている。今の自分が社会に役に立つほどの「課題解決力」を有しているとまでは思わないが、この活動に取り組んでいなかった自分と比較すると、大きく「課題解決力」は向上したと思うし、何よりも将来に対する意識が変わったと思う：福祉】と現在の社会情勢に後押しされながら、本事業の意図をつかみ、探究学習に取り組んでいる生徒の姿は多く見られている。

反面、昨年度も存在していたが、【「リージョン探究」でも思ったが、今の私たちにできることなど何もないと思うのに、こんなことをやらされている意味が分からない。専門的な知識や技術がない私たちが取り組んでも無駄だと思ふし、自分たちの出した解決策もとりあえずまとめたというものに留まっている：環境】などと一部ではあるが、目に見える成果といった部分にこだわるネガティブな意見が見られた。「〇〇力」を伸ばすという目標はあくまでも形式的なものであり、本質的に大切にしたいのは、生徒たちの社会に対する意識の改革なのであるが、どうしても一部の生徒たちに伝わらないことは今後に向けての課題と言える。

vi 資質⑥「表現・発信力」

アンケートの結果としては昨年度と比較すると数値は向上しているものの、昨年度と同様に今年度も8つの資質の中で最も

		2021年度	2020年度
表現力・ 発信力	向上した	75.8%	64.1%
	向上していない	9.4%	7.3%
	分からない	14.8%	28.6%

生徒の成長実感の乏しい資質となっていた。これは、現状の形でアンケートを実施していない初年度からも継続している傾向であり、本学生徒の大きな特徴の一つかもしれない。

生徒のレポートからは、「緊張したが、しっかり発表できた」という意見も見られたが、【ロイロノートやパワーポイントなど発表用の資料については、メンバーで協力し、それなりのものができたと思うが、やはりカメラや人の前で話すということについては全然できていないと感じた。特に、中間発表の時には、カメラの前ということもあり、発表の原稿をただ読むだけだったように思う：女性】、【私は昨年他の学校の生徒の発表を聞く機会があり、その人たちが堂々と自信を持って自分たちの活動について話していたので、自分もそのようになりたいと思っていた。しかし、やはりいざ人の前で話すとなると緊張してしまい、覚えていた発表内容も真っ白になってしまい、結局原稿を読むだけになってしまった：福祉】と口頭での発表に対して苦手意識を持っている生徒が多いことに改めて気付かされた。コロナ禍において人前で発表する機会が少なくなっていることも影響しているとは思いますが、そもそも日常の学校生活の中で、自らの考えや思いを日常的に表現することが少ないため、口頭発表の場が非常に特別な場という形で認識されているのかもしれないと感じている。

vii 資質⑦「主体性」

探究学習を導入したことによって、教員にとって最も大きな生徒の変容として受け止められてい

るのがこの項目である。しかし、過去2年のアンケートでは思うような結果が出ていなかった。しかし、今年度については「向上してい

		2021年度	2020年度
主体性	向上した	80.7%	70.9%
	向上していない	6.7%	5.9%
	分からない	12.6%	23.2%

ない」という生徒も若干増えたものの、「向上した」と回答した生徒が昨年度と比較して10%近く増加するという結果が出ている。

生徒アンケートからは、【昨年度の「リージョン探究」は新型コロナウイルスの影響もあって活動の制約が多かったが、「グローバル探究」では、自分たちの工夫次第で色々な活動に取り組むことができた。ZOOMなどを用いてオンラインでインタビューさせていただけたことは、将来を意識するとても良い機会だったと思う：教育】、【以前カンボジア研修に参加した先輩方の報告会に参加し、同じ学校の先輩たちが積極的に活動している姿に憧れを持ち、高校2年生になったら自分もカンボジアに行きたいと思っていた。残念ながらこのようなことになってしまい、海外体験はできなくなってしまった。しかし、以前とは違い、今はオンラインで簡単に海外の人とも話をするができる。今回私は海外に住む日本の方にインタビューを行ったが、今までの自分だったら考えられないことだと思っている：福祉】などと、昨年と異なりオンラインが当たり前のものとなり、それを積極的に活用することでこれまで不可能だと思われていたことが可能になるなど様々な広がりを実感できたことが、結果的に自らの「主体性」の向上の実感にも繋がっているように感じられた。

viii 資質⑧「多様性受容力」

アンケートの結果を見ると、他の項目と同様に84.7%の生徒が「多様性受容力」の向上を実感しており、取り組みの成果が感じ

		2021年度	2020年度
多様性受容力	向上した	84.7%	80.0%
	向上していない	2.7%	2.7%
	分からない	12.6%	17.3%

られる結果となった。しかし、開発単位I「リージョン探究」においては、コースやクラスの枠組みを取り払ってグループ編成を行うことで、意識的に「多様性受容力」を育成しようとするアプローチを行ったが、高校2年生は医進、特進、学際とそれぞれコース毎に授業単位数が異なっていることもあり、昨年度と同じ形ではグループ編成を行うことができていないため、「グローバル探究」はクラス内での活動が中心となっている。そのため、他者との「違い」を感じる場面は少ないと想定している中で高い数値が出たことは興味深く、生徒のレポートからその理由を探ってみた。すると、【「グローバル探究」は4つの分野に分かれているが、同じ分野を選択しているのに、発表がこれほど多岐に渡るということに驚いた。グローバルな社会課題はたくさんあるとは思いますが、個人個人でこれほど興味や関心が異なるということを改めて強く感じた：教育】、【今回の「グローバル探究」を通して、現代の社会は徐々に多様性を許容できるようになってきているのだと感じることができた。「女性の働き方」や「夫婦別姓」、「LGBTQ」など、これまで一律にこうすべきであるとされてきたことに対して、少しずつではあるが社会が対応しようとしているということだと思う。だからこそ、私たちにも「多様性受容力」という力は必要なものだと感じた：女性】などとガイダンスや各種のアンケートなどの機会を用いて、育成したい8つの資質について繰り返し伝えていくからこそ「グローバル探究」における様々な学びの場面と育成したい力との連携ができるようになりつつあることは、本事業に

おける大きな成果の1つと言えるだろう。

ix その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで「『グローバル探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

- ・人の話を聞く力
- ・情報を収集、整理する力
- ・物事に対して、徹底的に取り組む力
- ・計画し、それを実行する力
- ・依頼メールを作成する力
- ・礼儀やマナー

10 事後アンケートの集約

9でも述べた通り、本開発単位終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

○質問項目

- ①「グローバル探究」の学びを通して、将来「(自らが生活する)地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	90.0%	86.8%
当てはまらない	10.0%	13.2%

- ②「グローバル探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「(現在自らが生活する)地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	89.3%	85.0%
当てはまらない	10.7%	15.0%

- ③「グローバル探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	97.3%	97.7%
当てはまらない	2.7%	2.3%

- ④「グローバル探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	87.3%	70.9%
当てはまらない	12.7%	29.1%

⑤「グローバル探究」の学びを通して、様々な課題に対して、複数の視点からアプローチができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	88.7%	75.0%
当てはまらない	11.3%	25.0%

⑥「グローバル探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	75.7%	58.2%
当てはまらない	24.3%	41.8%

⑦「グローバル探究」の学びに対する自らの姿勢を自己評価してください。

		2021年度	2020年度
S	楽しみながら積極的に取り組むことができた	35.3%	39.1%
A	積極的に取り組むことができた	56.7%	50.6%
B	あまり積極的に取り組むことができなかった	7.3%	10.0%
C	消極的にしか取り組むことができなかった	0.7%	0.3%

11 昨年度の課題とその対応

最終年度となる3年目の今年度は、新型コロナウイルスへの対応、「グローバル探究」に取り組んだ高校2年生における「Key Girl」の8つの資質の成長実感数値の向上といった部分で大きな成果をあげることができたと認識している。しかし、昨年度の本報告書で挙げた課題について、どのように対応したかについてはしっかりと検証しておきたい。

i 「探究活動の質」と「発展的活動の難しさ」

今年度「グローバル探究」に取り組んだ高校2年生は、昨年度の開発単位I「リージョン探究」における探究活動において調べ学習の延長線上にとどまったものが多数見られた学年であった。また、昨年度は各学年から選抜された優秀班が口頭発表を行う研究成果発表会も中止になってしまうなど、「探究活動の質」の目安となるような他者の発表を聞くにも恵まれない学年となってしまった。しかし、本事業が年を経るごとに学内において当たり前のもので認識されてきたこと、各分野の講師の先生方の生徒に対する関わり方が安定してきたことなどが要因となり、詳細は後述するが本事業の締めくくりにあたって実施した「最終成果発表会」に参加した生徒たちを中心として、かなり深く探究活動に取り組んだ様子を確認することができた。

また、1月から3月に設定された発展的活動については、一部の生徒が要請を受け、同じ和歌山県内にあり、SGH ネットワーク校の認定を受けた和歌山県立日高高等学校の第2学年探究成果発表会のポスター発表に参加するなどの活動は行ったものの、やはり新型コロナウイルスの感染拡大を予防する観点からも外部機関との連携を奨励することは難しいという結論となった。

ii 「表現・発信力」の育成

開発単位 I と同様、昨年度は新型コロナウイルスの影響を受け、ポスター発表などの対面型の発表形式を実施することができなかったことから生じた課題であると考えている。そのため、今年度は「グローバル探究」実施学年である高校 2 年生の担当教員と連携しながら、特に瞬間的な受け答え能力を磨くために、しっかりと感染対策を行った上で、発表後の質疑応答を行うことを目指した。その一つの完成の形としては本事業の 3 か年に渡る成果の報告を行った「最終成果発表会」であるが、オンラインの発表会でありながらも、ICT 機器を活用することで、良質な質問とはどのようなものかということを生徒に提示できるという点で口頭発表以上に「表現・発信力」の向上に役立つ手法を見つけることができた。詳しくは、「⑦最終成果発表会」の項目にて述べる。

iii 客観的かつ適切な評価活動の実施

本学では、8 - ii 表 1 および表 2 にて紹介したループリック評価表を用いて、自己評価や他者評価を実施している。しかし、昨年度は他者評価において、今後の人間関係などへの配慮からどうしても無難な評価をせざるを得ないという課題が残った。

そこで、今年度はガイダンスや各種の連絡の機会を通して、本当の意味で他者を育てる適切な評価の大切さを訴えかけた。今年度はその取り組みを始めたばかりであるため効果の程ははっきりとはしないが、これも継続していくことで客観的かつ適切な評価活動が当たり前のものとなると考えている。なお、以下に評価活動に対する今年度の意識変化についてのアンケートの結果を載せるが、評価に対して無関心だった層が減少していることを見とることができる。

	中間発表後	最終発表後
相手のことを考え、客観的かつ適切な評価やアドバイスができた	64.2%	64.7%
もう少し厳しい評価やアドバイスを行いたかったが、相手の感情が気になり、甘いものになってしまった	25.7%	32.7%
評価をしなければならなかったため行っただけで、適切なものではない	10.1%	2.6%

少数派をどこまで規制すべきか

【女性】 H2A 森本

「せいてきしこう」= ???

①性的指向

- どの性別が恋愛対象か
- 例：同性愛、異性愛
- 普通として認めてもらえない

②性的嗜好

- どんなものに性的魅力を感じるか
- 例：小児性愛、動物性愛
- 欲求を満たせば、誰かを傷つける

どこまで規制すべきなのか

①性的指向

- 規制は不要
- 権利を侵害しない慎重な議論

②性的嗜好

- 規制は必要
- 生きづらさを生まない規制の設計

「権利を侵害しない慎重な議論」

って？

× 特別扱い

○ 普通に接する

「生きづらさを出来るだけ生まない規制」

って？

「〇〇するかもしれないから～～を無くそう」

排除する
⇒その **行き先** は？

排除より共生を考える

- 当事者の生きづらさを取り除く
- 意見のすり合わせでどちらの自由も確保

ご静聴ありがとうございました

- ご協力:性障害専門医療センター 飯岡恵 様
保田静江 様
日本司法支援センター 鳴本翼 様

海洋ゴミのUP CYCLE

環境 E組 1班 植山 坂下 辻本 出口ひ

リサイクル♻️

➡️原料に戻したり、
素材を分解する際に
エネルギーが使用される。



アップサイクル♻️

➡️そのままの形を生かし、
別の製品を作ることで
エネルギーの使用を抑える。



<現状>

- プラスチックゴミ→**世界**に合計**1億5,000万トン**以上
- **海**に流れるプラスチックゴミの量…**年間800万トン**
→プラスチックゴミが大量に排出されている
- 海洋ゴミの7割～8割→街から発生
(雨が降る→路上のゴミが川や水路へ流出→海へ)
- 2050年…**魚より海洋ゴミの量が多くなる**

〈考察〉



価値のないもの ex 海洋ゴミ



価値のあるもの ex 靴



トレイ

● 海洋ゴミそのものの素材を生かす

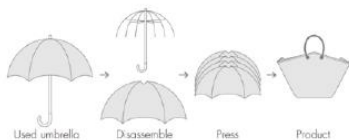


ゴミを処理する際のエネルギーを減らす

● アップサイクルを知ってもらう



PLASTICITY



ビニール傘



〈問題点〉

◆ アップサイクルを知っている人が少ない。

▶ リサイクルは知っているがアップサイクルを知らない🧐?

◆ 海洋ゴミが増えている。

▶ 人間が流出したゴミ 🗑️





(株) アップサイクルジャパン 様

<例えば木製パレットの場合>



輸送用木製パレット

リユース
繰り返し使う



使わなくなった
パレット



リサイクル

例：破碎されて
→ 合板になる
→ 燃料用チップになる



アップサイクル

例：異なる分野で
→ 家具になる
→ 雑貨になる

〈フィールドワーク〉

👉最も大切なことは…



継続すること



🌟アップサイクルを広めるために…

ブランドとのコラボ



ファッションショー



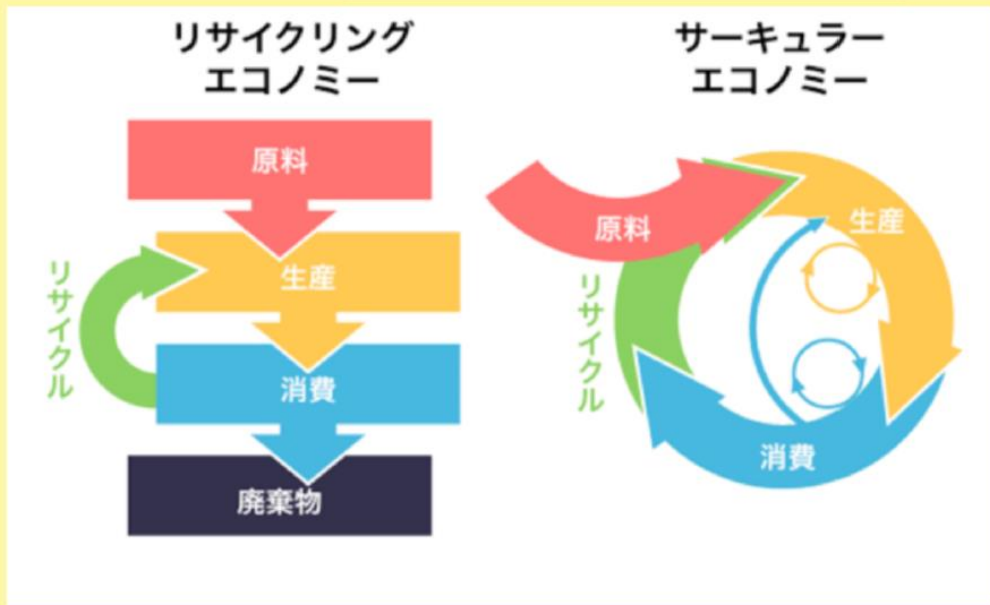
BEAMS COUTURE × kate spade



〈まとめ〉

🌐 サークュラーエコノミー

廃棄が前提とされていた製品や原材料などを、新たな「資源」として経済活動の生産・消費・廃棄といった複層的な段階で再活用させることで、廃棄物を出さずに資源を循環させる経済の仕組み。



ご静聴ありがとうございました
^_^



海を脅かすプラスチックごみの現実

③ 開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校3年生対象 ※ただし、2021年2月よりプレ活動として実施)

1 目的

「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今存在していない職業に就くだろう(キャシー・デビッドソン)」この言葉は、近年至るところで耳にする言葉となった。これは、科学技術等が急速に発展する現代社会の中で、今後10~20年の間で社会の構造が大きく変化することを予測した言葉である。この言葉が発表されたのが2011年の8月。そこからすでに10年が経過し、その子どもたちはすでに高校生となった。

また、近年日本でも「Society5.0」という言葉が聞かれるようになったが、これは「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、仮想と現実を高度に組み合わせたシステムを用い、経済発展と社会課題の解決を両立する人間中心の新しい社会のことを指している。このようにこれから社会に出ていく生徒たちは、変化を予測することが難しい時代を生きることになる。すでに、新型コロナウイルスの感染拡大によって社会が短時間で大きく姿を変えるということを実感している生徒たちには、このような社会の変化に受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながらその解決を図り、未来を切り拓いていく姿勢が切に求められると感じている。

そこで、本開発単位では、本学のカトリックの理念による教育によって生まれた「奉仕・貢献の心」と開発単位Ⅰ、開発単位Ⅱの学びを掛け合わせながら、自らの生涯に渡って取り組みたい「ミッション(使命)」を見つけ、既存の職業観にとらわれない具体的なキャリアプランニングを行い、不透明な未来や将来に対して「不安」を抱くのではなく、「ワクワク」を胸にチャレンジできる人材へと成長することを目的とする。

2 内容

「奉仕・貢献の心」「リージョン」「グローバル」の3要素を意識しながら、人生を賭して取り組みたい「ミッション」を見つけるという探究活動を通して、既存の職業観にとらわれないキャリアプランニングを行う。ワークシート作成、ジェネリックスキル測定テスト、自らのキャリアプランを発表することだけでなく、他者のキャリアプランを聞くことなどの活動を通して、自らのプランをさらに深化させていく。なお、本開発単位は個人による探究活動とする。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

4 新型コロナウイルスの影響

本開発単位は、前年度の2021年1月よりスタートしている。次項で詳細を述べるが2020年度に関しては、新型コロナウイルスの感染に関して不透明な部分も多く、またワクチン接種も行われていなかったため、本来実施したかった内容を一部変更および中止したものがあ

る。2021年度に入ってから、基本的に感染の拡大に注意しながら、当初の予定通りの活動を行うことができた。ただし、9月6日(月)に実施した最終発表会に関しては、当初学内での対面形式にて実施することを考えていたが、8月下旬からの新型コロナウイルスの第5波の影響を受け和歌山県においても多数の感染者報告がなされていたこともあり、急遽動画による視聴形式に変更して対応した。

5 概要（実践）

i 前年度（2020年度）実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
冬休み	-	-	-	冬休みの課題として「一般社団法人ナレッジキャピタル主催『未来の“私の”仕事を考える』」への応募	通常実施
3	①	2月8日（月）	1	「キャリア探究」ガイダンス動画の配信 ・内容説明およびループリック評価表の配布	変更実施
	②	3月8日（月）	2	リクルート進学辞典付録「適性診断」の実施	通常実施
	③	2月中旬	1	地域協働事業（グローバル型）特別講演 ・運営指導委員の先生による講演	中止
		3月15日（月）	1	動画による講演（運営指導委員 平山様、渡邊様）	変更実施
	-	3月中旬	2	地域協働事業（グローバル型）コンソーシアム特別講演 ・主催国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様	開催辞退

ii 実施状況

2020年度の開発単位Ⅱ「グローバル探究」に1か月の遅れが生じていたため、当初2021年1月中旬に実施予定であった「キャリア探究ガイダンス」からスタートする予定であったが、2月8日（月）からのスタートとなった。また、先輩女性のキャリアを学ぶという観点から、運営指導委員の先生2名、コンソーシアム構成団体の一つである国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様の主催による3つの講演を実施予定であったが、運営指導委員の先生方が関東圏在住であったことにより、動画による講演に変更となり、国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様に関しては、オンラインでの講演開催を模索したものの、高齢の方が多く所属していることもあり、ICT機器の使用に自信が持てないとの理由で開催辞退の連絡を受け、中止することとなった。

iii 2021 年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
1	①	4月19日（月）	2	「自分自身を理解する」実施	通常実施
	②	4月26日（月）	2	「学び未来PASS（ジェネリックスキル測定テスト）」受験	通常実施
	③	6月21日（月）	2	「社会との関わりを知る」実施 「ミッションを見つける」実施	通常実施
	④	6月28日（月）	2	キャリアプランニングシートの作成 シャッフル発表会におけるプレゼンテーション資料作成	通常実施
	⑤	7月19日（月）	2	シャッフル発表会の実施 ・学年でキャリアの近い生徒同士でグループを編成し、発表 ・相互アドバイスや評価活動の実施	通常実施
	⑥	7月21日（水）～ 7月29日（木）	4	クラス内発表会 ・各クラスで発表会を実施し、クラス代表を選出	通常実施
夏期補習期間	—	—	—	ブラッシュアップ ※クラス代表選出者のみ	通常実施
2	—	8月下旬	—	新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、発表動画作成に変更	変更実施
	⑦	9月6日（月）	2	動画配信形式の最終発表会 ・発表者（22名）がホールに集合し、学年の各HR教室に配信	変更実施
	⑧	9月13日（月）	1	「キャリア探究」リフレクション ・自己評価および担任からの評価活動を実施	通常実施
	—	—	—	「キャリア探究」レポートの作成 ※9月20日（月）を期限とし、Classi上に提出	変更実施

iv 担当講師

本開発単位は個人による探究活動であり、担当講師は設定しない。高校3年生に所属する教育改革推進事業運営チームの3名の教員を中心として、学年に所属する全ての教員が運営、指導にあたる。

v 実施状況

昨年度実施した本事業のプレ学年（現大学1回生）に対しては、新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置の影響を受け、4月からの個人ワークはオンライン形式での実施となり悔いの残る部分もあったが、今年度は本来想定していた形で実施することができた。

ただし、8月下旬より全国的に新型コロナウイルス感染者が急増し、和歌山県内においても一定量の感染者が出たこともあり、生徒の安全を第一に考え、当初は発表者も代表者のみと人数が少ないこともあり、対面型で最終発表会を実施する予定であったが、急遽動画を作成し、各HR教室に配信するというオンライン形式への変更を余儀なくされた。

6 評価

i 評価方法

カトリックの理念に基づく「奉仕・貢献の心」と開発単位IおよびIIの学びという3つの要素を意識した上で設定した「ミッション（使命）」を含むキャリアプランニングを提案に向けて、主体的な探究活動の経緯とキャリアプランの具体性、そして、本開発単位に関しては、本事業のまとめに当た

るものと位置付けて「継続・発展性」という項目を加味して、プログラム終了後に本学独自のルーブリック評価表（表1）を用いて評価を行った。なお、本ルーブリック評価表は、開発単位Ⅰ・Ⅱと同様に「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の4段階から構成され、本開発単位のスタート段階で生徒に配布し、評価基準を明確にするとともに、目指すべき目標とした。

ただし、実施初年度となる昨年度は、担任教諭を含むクラスメートとの相互評価を実施したが、本開発単位が個人による探究活動であることから、その取り組みの過程を他者と共有することに限界があった。そこで、2年目となる今年度は自己評価にとどめることとした。

しかし、他者からの視点というものは非常に貴重なものであるため、シャッフル、クラス内、最終の各発表の際には、ルーブリック評価表の付随したアドバイスシート（表2）を改良し、より充実したフィードバックを得られるようにした。

ii ルーブリック評価表
（表1）

2021年度和歌山信愛高等学校「キャリア探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究			コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	継続・発展性	表現力・発信力 (他者へ)	多様性受容力 (他者から)
S	自らの未来と他者や社会への奉仕・貢献という2つの視点が高いレベルで融合した活動を行うことができている。	自らだけでなく他者も大切な存在であると捉えた上で、これからの社会の中でどのようなキャリアを構築するかという点において強い興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマの本質を理解した上で、独自の課題を発見、設定することができている。	丁寧な調査によって社会構造の変化などを予測した上で、論理的で興味深い「最善の解」を提示し、その実現に向けて行動を始めている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識し、強い向上心とともに「キャリア探究」における実践に反映することができている。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることができるだけでなく、その情熱で他者の主体性も引き出すことができている。	自らと興味関心や考え方の異なる他者に強い関心を持ち、その考え方や経験を積極的に取り入れ、より質の高い成果につなげようとしている。
A	自らの未来という視点だけでなく、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点も意識しながら活動することができている。	自らを大切な存在であると捉えた上で、今後の自己キャリアの構築に対して興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマを踏まえ、適切な課題を発見、設定することができている。	社会構造の変化などを自分なりに予測した上で「最善の解」を提示することができている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識しながら、「キャリア探究」での実践に取り組むことができている。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることで、他者の心にも刺激を与えることができている。	自らと興味関心や考え方の異なる他者にも関心を持ち、その考え方や経験を自らにも活かそうとする態度をとることができている。
B	自らの未来という視点を中心となり、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に乏しい活動となっている。	自らを大切な存在であると捉えながらも、今後の自己キャリアの構築について受動的で興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマを踏まえた上で、課題を発見、設定しているが、その課題設定に物足りなさを感じられる。	「最善の解」を提示することはできたが、それは現状から考えたものに留まってしまっている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを「キャリア探究」における実践に活かしたいと考えているようだが、行動には移しきれていない。	他者に対して自分の思いを伝えようとする気持ちはあるが、他者を巻き込むには至っていない。	自らと興味関心や考え方の異なる他者の存在に気付いたが、自分とは違うという思いから何かを得ようとする態度をとることができていない。
C	自らの未来という視点しか含まれておらず、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に欠けた活動となっている。	自らを大切な存在であると捉えることができず、今後の自己キャリアの構築という重要な課題に興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマの本質や全体を踏まえることができず、適切な課題の発見、設定を行うことができていない。	しっかりと思いを持って取り組み、考えた上での「最善の解」を提示することができていない。	これまでのプログラムにおける学びを「キャリア探究」における実践に全く反映させることができていない。	他者に対して自分の思いを伝えたいという気持ちはあるが、他者を巻き込むことができていない。	自らの興味関心や考え方以外に関心がなく、他者の考え方や経験を自らに活用させることの意義も理解することができていない。

(表 2)

発表会用ルーブリック評価表		さんへ	より
【内容】		評価	発表
S	社会に貢献するミッションと自己実現とが高いレベルで融合した、独自性のあるキャリアを構築することができた。		
A	社会に貢献するミッションを設定し、社会構造の変化などを予測したキャリアを構築することができた。		
B	ミッションを設定し、自らのキャリアについて考えることができているが、自己実現の度合いが強く、貢献の意識には物足りなさが感じられた。		
C	キャリア探究に取り組む意識が低く、ミッションの設定や自己のキャリアについて深く考えることができていなかった。		
【発表】		発表のよかった点	
S	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、情熱や創意工夫に富み、聞き手のやる気や主体性も引き出されるような発表だった。	内容をより良くするためのアドバイス	
A	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、聞き手にも刺激を与えるような発表だった。		
B	声量や話すスピードなどに物足りなさはあったが、聞き手に自らの探究成果を伝えようとする思いが感じられる発表だった。		
C	聞き手に自らの成果を伝えようという意識や、聞き手とともによりよいものを作っていこうとする意識に乏しい発表だった。		

7 成果 ※本文中の【 】は本開発単位終了後の生徒レポートやアンケートから引用

本開発単位は、昨年度のプレ実施を経て、本事業1期生のために実施したものである。本来であれば、申請書段階で考えていた内容をプレ実施で確認・改良をし、今年度の実施に繋げる予定であったが、昨年度の新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため、本来想定していた知見を得ることはできなかった。しかし、そのような中でも振り返ってみると「Key Girl」育成の最終段階としてふさわしいプログラムであったという成果をあげることができたと認識している。本開発単位では、「Key Girl」の8つの資質を全て育成したいと考えているが、その中でも、自らの人生と真摯に向き合い、「ミッション」を見つけるといった観点から「主体性」「課題発見および設定力」、その「ミッション」にいかにして取り組むことができる環境を獲得することができるかという観点から「課題解決力」、そして、「Key Girl」として、その中に「社会課題の解決」を盛り込むという観点から「献身性」の育成を重視した。

では、以下に本開発単位で期待される成果と対比させながら、その詳細を述べていきたいと思う。なお、昨年度のプレ実施における成果とも対比させながら述べていきたいと考えるが、今年度は「Key Girl」を構成する8つの資質それぞれについて、「向上した」「向上していない」「分からない」という3択でアンケートを取ったのに対し、昨年度は「『Key Girl』を構成する8つの資質の中で向上したと感じる資質を全て選びなさい」という異なった質問形式でアンケートを実施している。

i 資質①「献身性」

上記の表の通り、「献身性」の向上を実感した生徒は69.9%となり、8つの資質の中で3番目に実感値の低い項目となった。昨年度と比較す

		2021年度	2020年度
献身性	向上した	69.9%	58.6%
	向上していない	3.7%	
	分からない	26.4%	

ると数値としては向上しているものの、昨年度は実感値の高い項目であったため、意外な印象を受けている。生徒のレポートには、【社会や他者のためにという「献身性」の大切さは分かるが、やはり自分の人生だと思うので、正直自分のやりたいことを第1に置いて探究活動を行った。そのため、「向上し

ていない」と自己評価した】という意見があった。しかし、その生徒も音響工学に関心を持ち、「音」の力で現代の人々に癒しを届けるというミッションを提示しており、十分に「献身性」の向上を確認することができた。また、【「リージョン探究」に取り組んだ段階で地域や社会に貢献したいという思いが生じ、将来のキャリアを考えており、「キャリア探究」の活動では向上しなかったと思う】といった意見も散見され、「向上していない」と答えた生徒が本事業の活動を通して「向上していない」という判断をしていないことは確認できた。ただし、「Key Girl」の8つの資質のいくつかで「分からない」と答える生徒が4分の1程度見られたことは気になるポイントと言える。【「向上している」と評価をしたかったが、正直自信がない。最終発表で堂々と自分の探究の成果を発表している人と比較すると、自分は「向上している」とは思えないので、「分からない」とした】という意見も見られ、自己評価を行うにあたって、他者との比較が大きなウエイトを占めている生徒が一定数いるように感じられた。

ii 資質②「興味・関心」

本資質は、アンケートにおいて90.0%もの生徒が向上を実感したと答える項目となった。これは最も実感値の高い項目である。生徒

		2021年度	2020年度
興味・関心	向上した	90.0%	85.6%
	向上していない	2.3%	
	分からない	7.7%	

のレポートからも【「キャリア探究」のよい所は、複数回の発表を通して、結構深く他の人と意見交流ができる点だと思う。特に、自分とキャリアの方向性が似ている人とのシャッフル発表会は刺激も受けたし、そこで初めて話した人とも情報交換ができる仲になった】、【これまでの「リージョン探究」や「グローバル探究」は与えられた課題という印象があったが、これから自分がどう生きていくかということについては絶対に向き合わないといけないことなので、これまでの中で一番興味や関心を持って取り組むことができた】、【クラス内発表や最終発表会で同じ学年やクラスなのに、これほど様々なキャリアがあることに驚いた。実際私たちは社会が変わる瞬間に立ち会っていることもあり、社会の変化に興味や関心を持たざるをえないと痛感した】などと多くの生徒が、本開発単位の取り組みによって、「(物事に対する) 興味・や関心を持つこと」の大切さに気付いたことを読み取ることができた。

iii 資質③「確かな知識」

昨年度と今年度で実感値に最も大きな差が見られたのがこの項目である。【探究学習を通して、実は一番成長したと思うのは、インター

		2021年度	2020年度
確かな知識	向上した	82.6%	47.7%
	向上していない	2.7%	
	分からない	14.7%	

ネット調べたことをそのまま発表用のパワーポイント資料に添付しなくなったということだと思う。「リージョン探究」は今思うと、「探究」ではなく、ただの調べたことの羅列だった。インターネットの情報をもとにインタビューやアンケートなどの調査を行うことで、より深く考えるという活動を通して、自らが得た知識が深いものになっていると実感できる】、【今回の「キャリア探究」では、自らの思い描くキャリアはやはり実現させたいと思うので、ただ大学の学部を調べるだけでなく、大学進学後もどのように行動していくことが必要なのかなどを実際にその職業に就いている人

にインタビューしてみた。やはり、その職業に就いている方のお話はインターネットに書かれていたものとは異なっており、こういうものが「確かな知識」と言えるのかなと感じた】などと、より深く学ぼうとする姿勢が「確かな知識」の獲得に繋がっているという認識を持っている生徒が多いことが確認できた。

iv 資質④「課題発見および設定力」

こちらとも昨年度と比較するとかなり大きな伸びを感じることのできる項目となった。生徒たちからも【当たり前のことだが、「キャリア

		2021年度	2020年度
課題発見 および設定力	向上した	71.7%	43.7%
	向上していない	4.1%	
	分からない	24.2%	

探究」は自分のことなので、自分で考えなければならなかった。これまではグループのメンバーに頼って課題設定を行ってきたが、今回は自分でしっかり考えたので、この力が向上したと感じている】、【最初の自分の取り組みはとても浅いものだったと思う。ただの進路選択に過ぎなかった。しかし、シャッフル発表会で他の人の発表を聞いて大きな刺激を受けた。進路の選択だけでなく、そこからどのように自分のキャリアを切り拓いていこうとしているかというまで明確に述べられており、そこで初めて自分で自分のキャリアをいかに充実したものにしていくかということと真剣に向き合うことができた。最終的には、自らの実現したいキャリアのためには、どのような部分に課題があるのかということまでしっかり考えることができたので、「キャリア探究」を通して「課題発見および設定力」は向上したと思う】などという意見が見られた。段階を踏んで難易度を向上させていく本学のプログラムがしっかりと機能していることが確認できたように思う。

v 資質⑤「課題解決力」

前年度と比較するとある程度の伸びは見られたものの、今年度の成果として最も低い値にとどまったのが本項目である。レポートか

		2021年度	2020年度
課題解決力	向上した	65.8%	47.3%
	向上していない	5.9%	
	分からない	28.3%	

らは【これまでに取り組んだ探究活動で自分なりに解決策を考え、提案してきた。しかし、実際に行動を起こしたわけではないので、この力が伸びたかどうかには自信がない。ただ、今後の人生の中で行動に移していきたいとは考えている】などとアクションの欠如を述べているものや、【解決策については色々と考えたつもりだが、ありきたりなものであったり、実現不可能なものであったりと自分なりに向上したという実感はあまりない】と適切さを基準に厳しく判断している姿がうかがえた。

【答えのない課題に対する解決策を見つけ出すのはとても難しい。特に、自分の今後の人生となると夢や希望はあっても果たしてそれが正解なのだろうか。自分にはもっと他の道もあるのではないかとぐるぐるぐるぐる考えることになった。しかし、この自分なりに考えたという経験こそが「課題解決力」の向上に繋がっているのだと思う】、【「キャリア探究」は3つ目のプログラムだったので、答えのない課題にチャレンジするということに対して、多少はコツがつかめてきているように思う。今回は、自分のキャリアを考えるに当たって、コロナ禍における社会の変化を目の当たりにしたという経験から今後の社会構造の変化も意識しながら考えることができた。「Society5.0」の社会についても

調べてみて、その社会の中で、自分のキャリアはどうなるのだろうかなどとかなり深く考えることができたと感じている】などとポジティブな意見が昨年度よりも多い印象を受けた。昨年度のような『課題解決力』はそんなに簡単に伸びるものではない」という「謙虚な視点」も大切ではあるが、3年間の活動を通して、「成功体験」や「満足感」を提供していくことも大切なのではないかと感じさせられた。

vi 資質⑥「表現・発信力」

本資質についても昨年度と比較するとあまり伸びの見られないものとなっている。ただし、「向上した」と述べている生徒の多くは、

		2021年度	2020年度
表現力・ 発信力	向上した	67.1%	53.6%
	向上していない	10.5%	
	分からない	22.4%	

【自分の中では、他の人と比較してもそれほど発信力はないと思っていたが、発表の際の他者評価で高く評価してもらえたことが自信となった。】と述べており、他者からの好意的な評価が自信に繋がっている事例が多く見られている。

一方、「向上していない」と答えた生徒の多くは、【「キャリア探究」では多くの発表を聞く機会があったが、発表の上手い人と比較すると自分はまだまだだと思ふ】というような意見を述べており、他者との比較が低い自己評価にも繋がっていることが確認できた。ただし、レポートの中からは【探究学習を通して、「自分の思いを伝えることの大切さ」を学んだように思う。自分はまだまだ「伝える力」は弱いと思うが、今後の人生の中で必要な力だと思うので、向上させていきたい】という前向きな意見も見られている。

なお、この資質については、新型コロナウイルスの影響について触れている意見も見られた。【最初は人前で発表するのは嫌だと思っていたが、高校2年生、3年生では新型コロナウイルスの影響で対面での発表機会が少なくなってしまったのは残念なことだと思う。代わりに動画を撮影して発表することになったが、いくらでも撮り直しができるので、ドキドキ感はあまりなかった。また、質疑応答の機会も少なくなってしまったので、「表現・発信力」の向上の機会はかなり失われてしまっていると思う】と本事業において、新型コロナウイルスが与えた影響がいかに大きいかを感じさせられる意見も見られた。

vii 資質⑦「主体性」

昨年度はレポートでは比較的ポジティブな意見が見られたにも関わらず、アンケートにおける成長の実感が低いという資質であった

		2021年度	2020年度
主体性	向上した	72.1%	44.1%
	向上していない	3.7%	
	分からない	24.2%	

が、今年度は、昨年度と比較すると大きな伸びが見られた項目となった。レポートからも【「キャリア探究」は自らの人生そのものについて考える機会なので、必然的に主体的に取り組むことができたと思う。また、「キャリア探究」に取り組んで、これまでの2つのプログラムにもっと主体的に取り組んでおくことで、より幅広くそして深く考えることができたのではないかと感じておりその点は反省している】や【「キャリア探究」では他の人たちの発表を聞く機会がたくさんあった。自分と

同じような夢を持っている人の中にとっても深く考えている人がいたことで大きな刺激も受けた。それによって自分自身もどんどん主体的に取り組むことができたように思う】などと、本事業の学びが生徒の「主体性」の向上に大きな役割を果たしていることがうかがい知れる。

viii 資質⑧「多様性受容力」

生徒アンケートからは83.9%の生徒が向上を実感しており、昨年度と比較しても一定の成果を感じることでできる項目となっている

		2021年度	2020年度
多様性受容力	向上した	83.9%	58.6%
	向上していない	2.3%	
	分からない	13.8%	

また、「分からない」と答えた比率も「興味・関心」に次いで少なく、向上の実感を持ちやすい資質となっていることが確認できた。レポートからも【「キャリア探究」では、色んな人の色んな将来像や生き方を聞くことができた。全く同じ人は一人としておらず、きっとそれは当たり前のことなのだろうが、それでもとても印象に残った。地域協働事業に取り組むことで、これからのことについて考える機会が増えたように感じているが、一人ひとりがこんなに違うということを知れたことは貴重な体験だと思う】、【人類と新型コロナウイルスとの関係が今後どうなっていくのかという社会に遭遇した私たちにとって、この探究学習は意義のあるものだと今は強く感じている。「キャリア探究」でみんなの「キャリア」がそれぞれ違ったように、新型コロナウイルスに対する対応も国や人によってそれぞれである。何が正解なのかは、もっと長い時間が経過しないと分からないことではあるが、だからといって今何もしない訳にもいかない。きっと世の中の全てのことが同じことなのだろうと思う。だからこそ、常に自分が正しいと考えるのではなく、色々な人の立場や意見を尊重しながら生きていくことが大切なのだと感じた】、【現在の社会においては「多様性」を認めていくことはとても大切なことだと思う。まだまだ日本では自分たちと違うという理由で他者を攻撃するような事件も数多く見られるが、少しずつ多様な生き方を認められる社会にもなりつつあるように思う。今回の「キャリア探究」では最初一人で取り組めるというのがとてもうれしかった。これまでの「リージョン探究」や「グローバル探究」ではグループで取り組んだことで意見の集約が難しかったからだ。しかし、今はその考え方は、自分と違うという理由で他者を攻撃する人と同じだったのではないかと反省している。みんなが思い描くキャリアが異なるのと同じで、考え方や価値観もそれぞれ違うからである。これからの人生においてとても大切なことを学び、気づけたように感じている】などと、「キャリア探究」の持つ「多様性」が「多様性受容力」の向上に繋がっていることを確認することができた。

ix その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで『「キャリア探究」の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください』という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

- ・情報収集力
- ・自分自身を理解する力
- ・前向きに考えることのできる力
- ・深く考察する力

- ・未来を想像する力
- ・一つのことに粘り強く取り組む力

8 事後アンケートの集約

本開発単位の終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

i 質問項目

- ① 3年間における全ての探究活動を通して、将来「(自らが生活する) 地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	81.7%	49.1%
ある程度当てはまる		42.5%
あまり当てはまらない		8.0%
当てはまらない	18.3%	0.5%

- ② 3年間における全ての探究活動を通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	95.9%	84.0%
ある程度当てはまる		15.6%
あまり当てはまらない		0%
当てはまらない	4.1%	0.5%

- ③ 3年間における全ての探究活動を通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	86.3%	59.0%
ある程度当てはまる		29.7%
あまり当てはまらない		9.9%
当てはまらない	13.7%	1.4%

- ④ 課題の解決に向けて複数の視点からアプローチできるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	80.4%	38.9%
ある程度当てはまる		29.7%
あまり当てはまらない		18.2%
当てはまらない	19.6%	13.2%

⑤ 3年間における全ての探究活動を通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。

	2021年度	2020年度
当てはまる	72.6%	26.4%
ある程度当てはまる		49.5%
あまり当てはまらない		17.5%
当てはまらない	27.4%	6.6%

⑥ 「キャリア探究」の活動を通して、今後自らの可能性を主体的に発揮して、よりよい社会の構築とともに、幸福な人生の創り手となっていきたいという意識が育まれた。

	2021年度	2020年度
当てはまる	72.6%	47.6%
ある程度当てはまる		42.9%
どちらとも言えない		5.2%
あまり当てはまらない		0%
当てはまらない	27.4%	4.3%

⑦ 「キャリア探究」を通して、様々な立場の人の、様々なキャリアに関する話を聞いた経験は、今後の自らのキャリアを考えていく上で参考になった。

	2021年度	2020年度
参考になった	94.5%	70.7%
ある程度参考になった		28.3%
あまり参考にならなかった		0.5%
参考にならなかった	5.5%	0.5%

ii アンケート結果からの考察

今年度は生徒たちにより明確に意志を表明させたいという意図があり、昨年度よりも回答選択肢の数を絞り2択とした。その結果としては、ほぼ全ての項目において、選択肢の数が少なくなることでポジティブな回答を選択する生徒の数が減少し、ネガティブな回答を選択する生徒の数が増加するという傾向が見られた。

これは、本事業の初年度に実施された「高校魅力化アンケート」において、自らに関係する項目でプラスに評価することを顕著に避けるという本学生徒の傾向とも共通するものである。これを良く表現すれば「謙虚」ということになるのだろうが、客観的に言えば、「自らを適切に評価する能力に欠ける」ということである。本事業では、この点も改善していきたいという思いも持っていたが、まだまだ改善できていないようである。

9 提出レポートからの気付き ※3年間の活動を振り返った視点も含まれている

i 本事業が生徒に与えたプラスの効果について

生徒のレポートからは、本事業を通して、様々な学びを得たということを実感していることがうかがいしれる。

【「地域協働事業」の活動は私にとってかけがいのないものとなりました。高校に入学した最初の頃は、自己主張もできず、自分に自信がありませんでした。そんな中でも、試行錯誤しながら、仲間と助け合い、一つのゴールを目指すというこの取り組みを通して、私自身も別人のように変わることができたと思います。このような体験はなかなか普通の授業では得ることができないものだと思います。私はもうすぐ卒業しますが、ぜひ今後も後輩たちがすばらしい体験ができるようにこの活動を続けてほしいと思います】と自らの成長を実感し、この学びの継続を願う意見が見られた。

また、【「地域協働事業」に取り組むことで、学校の授業だけでは学べない、自分たちの生活する和歌山県や SDGs などについて深く学ぶことができた。このような学びを通して、自分自身が社会の一員であるという意識を持つことができるようになったと思う】、【この3年間正解のない課題について他者と協力しながら考え続けた経験は自分にとって大切なものであったと感じている。この経験を通して、将来は社会や地元和歌山のために活躍できるような人材になりたいと思う】などと本事業が社会の一員としての自覚や地域の未来に対する責任を育むものであったことが分かる。

さらに、【私がこの活動で一番心に残っているのは、学校生活だけでは接することのできない人たちの話をたくさん聞くことができたことである。高校1年生の「リージョン探究」におけるフィールドワーク、高校2年生の「オンラインフィールドワーク」の体験は忘れることのできないものとなっている。特に、「オンラインフィールドワーク」では自分たちである企業にメールで問い合わせ、実際に Zoom でインタビューをさせていただくことができた。インタビューの前日からとても緊張したが、当日は反対に自分たちの積極性を誉めていただき、とてもうれしく思ったことはきっと一生忘れることはないと思う】などとチャレンジすることの大切さや【「地域協働事業」では、「他者と協力することの大切さ」が繰り返し言われていたが、私は少し違う意味で協力の大切さを学んだように思う。このような活動では、どうしてもグループ活動においてリーダーシップが重要視されると思うが、私はどちらかと言えば、人に助けってもらうことの大切さを学んだ。私は今まで人の助けを借りることが下手というか、人の力を借りることが嫌いだったのだと思う。しかし、自分の役割だからといって一人で抱え込んでしまうと、グループ全体に迷惑をかけてしまうことに気づいた。きっとこれから先、社会人になってもグループで何かをすることがあると思うが、頼られることばかりを考えるのではなく、良い意味で人を頼れる人になりたいと思った】と新たな観点から意見を述べる生徒も見られた。

そして、【最初は色々な課題に取り組み、自分たちなりに解決策を提案してみても、実際に社会に反映されるわけではないので、無駄なことをやらされていると感じたときもあった。しかし、全てのプログラムが終了した今、少し考え方が変わっている。この活動はすばらしい解決策を考えることが最終目標なのではなく、自らの人生をより豊かなものにしていくための基本的な姿勢を学んでいたのだと思う。目の前にある課題の存在に気づき、その課題を解決するために、他者と協力しながら粘り強く取り組む姿勢は、人生のどんな場面でも必要で、それが他者からの信頼にも繋がっていくものなのだということを教わった】という感想を述べる生徒がおり、この活動を通して、このような理解に至った生徒を輩出できたことは、本事業における大きな成果であると感じている。

ii 本事業に対する生徒の批判的な意見について

もちろん、全ての生徒が本事業に対して肯定的なわけではなく、批判的な意見も寄せられている。以下に、主なものを4点挙げたが、これは昨年度のプレ活動の際に出た意見とほぼ同様であり、次年度以降も課題となっていくと考える。

a 本事業の負担の大きさ

- ・ 【頭のどこかでは大切なことというのは分かっているが、私たち生徒にとってはとにかく負担が大きい。普段の学習の負担が変わらないので、結局しんどいだけだと思う】
- ・ 【とにかく面倒くさい】

b 時間数の不足

- ・ 【プログラムの意図は分からない訳ではないが、設定されている時間が短いというのは常に感じていた。グループでの活動はそれぞれクラブなども異なり、放課後には時間を確保することが難しい。もっとこの活動に取り組む時間を確保してほしいと思った】
- ・ 【新型コロナウイルスによる休校などもあってとにかく時間がなかった。常に発表会の期日に追い立てられていたように思う。もう少し余裕がほしい】

c 内向的な生徒における心理的な負担

- ・ 【コツコツと考えることは嫌ではなかったが、とにかくグループで活動したり、人前で発表したりしなければならぬことが辛くて仕方なかった】
- ・ 【人にはそれぞれ向き不向きがあると思う。学年の全員で取り組む必要性はどこにあるのだろうか。得意な人がやったらいいと思う】

d 評価について

- ・ 【この活動では何度も評価する機会があったが、それにはあまり意味が感じられなかった。自分自身や他者からの評価で成長させるべきポイントを見つけるという理想は分かるが、実際は無難な評価をしないと相手に悪いので意味がない】
- ・ 【ループリック評価表が具体的、細かすぎて判断がしにくかった。もう少し一般化してほしい】

10 昨年度の課題への対応

「キャリア探究」は現大学1回生に対してプレ実施を行い、それを踏まえて本年度の1期生へ本格実施した。そのために、前年度の課題に対してどのように対応したのかを以下に記す。

i キャリアプランニングにおける客観的測定テストの反映不足

キャリアプランニングを行うにあたって、「自分を知る」という活動の一環として、高校2年生2月段階でリクルートの「適性診断」（結果は高校3年生4月に返却）、高校3年生5月段階で河合塾「学びみらいPASS」を実施（結果は6月に返却）し、客観的に自己理解を行った。プレ実施の際には、その結果が意外なものであったため注目度は高かったものの、自らのキャリアプランニングの設定にはあまり反映されなかった。そこで、本年度は本開発単位のガイダンス動画の中で、客観的な自己理解を実施することをしっかりと告知し、以下に添付する2種類のワークシートを作成し取り組むことで、キャリアプランニングへと反映するように誘導した。

キャリア探究「自分自身を理解する」ワークシート1

組 番 名前 _____

リクルート「適性診断」を採る

①性格タイプや強みの納得度（あてはまるものの数字に○をつけてください）
 1 全く納得できない 2 あまり納得できない 3 わからない 4 やや納得できる 5 とても納得できる

上記を選んだ理由と、結果から感じたこと

②学問分野、適性の納得度（あてはまるものの数字に○をつけてください）
 1 全く納得できない 2 あまり納得できない 3 わからない 4 やや納得できる 5 とても納得できる

上記を選んだ理由と、結果から感じたこと


③仕事分野、適性の納得度（あてはまるものの数字に○をつけてください）
 1 全く納得できない 2 あまり納得できない 3 わからない 4 やや納得できる 5 とても納得できる

上記を選んだ理由と、結果から感じたこと

④社会で求められる力
 結果から感じたこと

高めるために具体的にチャレンジしてみたいこと

⑤今回の結果と現時点で思い描いているキャリアデザインとの関係性についてまとめよう（適性との親和性、表現するためのポイント、新たな視点の提供など）
 ※キャリアデザイン・・・将来のやりたい業ややりたい自分を表現するために、自分の職業や人生を主体的に設計し、実現していこうとすること



キャリア探究「自分自身を理解する」ワークシート2

組 番 名前 _____

④「自分」を知る

A：自分の性格・タイプ・長所・短所など【主観】

B：自分の性格・タイプ・長所・短所など【客観】
 ※「適性診断」や「学び未来PASS」を参考

C：自分の価値観を整理する（重要だと感じたものを3つ選んで理由を書いてください）

- a 「自分らしさ」 …… いつも自分らしくいられる生活
- b 「自由に使える時間」 …… 自由に使える時間
- c 「人間関係」 …… 友達や周囲の人々との関係を大切にしたい
- d 「お金」 …… 自分の心に余裕がもてる経済的な安定
- e 「地位」 …… 自分の可能性や実力を自由に発揮できる権限
- f 「ビジョン」 …… 自分の将来像や未来のイメージ
- g 「安定」 …… 大きな変化はないが、安定した穏やかな生活
- h 「家族」 …… 両親や兄弟、親戚などを大切にしたい
- i 「他者への奉仕貢献」 …… 困っている人や悩んでいる人を助ける
- j 「創造性」 …… 新しいものを創り上げる
- k 「その他」 …… この項目にはない、自分が大切にしたい価値観

理由

D：「ジョハリの窓」にチャレンジ（別紙参照）
 「ジョハリの窓」を行って感じたことをまとめよう

まとめ：AからDの活動を通して、自らのキャリアデザインとの関係性についてまとめよう



しかし、結果としてはあまり成功したとは言えない。【将来のビジョンが全くなかった私にとってはとてもおもしろい経験だった。これが少しきっかけになって、気になった職業が出てきた】と述べる生徒もいたものの、【2種類の自己診断を実施し、結果そのものは意外なものも含まれていておもしろかった。しかし、すでに自分なりの思い描いている未来を持っている私にとっては、新たなものを提示されて混乱する部分もあった】、【「適性診断」の結果で私の性格は希望する職業に向いていないのかもという思いになってしまった】などの意見が見られ、生徒の状況によってはマイナスに働く場合も見られることが判明した。

ii 人生を見通したキャリアプランニングの実施への告知不足

昨年度のプレ実施における「キャリア探究」では、社会の変容の予測などには触れられていたが、「将来の仕事」のみを扱ったものが目立った。生徒たちは開発単位II「グローバル探究」における「女性」分野の成果を通して、現代社会の中で女性が自由に生きていくことの難しさについて学んでいたにも関わらず、その課題を人生の中でいかにクリアしていくかという視点を盛り込ませたいという意図があったが、その部分については課題が残った。

そこで、今年度は本開発単位のガイダンス動画で触れるとともに、以下に添付したキャリアプランニングシートを作成し、人生を見通すことを意識させるようにした。

高校3年生【キャリア探究】 キャリアプランニングシート

①ライフプランシート

あなた自身の将来について、どんな人生を歩みたいか計画を立ててみましょう。実現可能かどうかは考える必要ありません。また、仕事や家庭、趣味など、さまざまな軸でそれぞれの関連性も考えながらライフプランを描いてみましょう。

分野	年齢	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳	80歳
仕事							
家庭							
社会活動 (趣味・ボランティア)							
資格							



【記入例】

分野	年齢	20歳	30歳	40歳	50歳	60歳	80歳
仕事			▲22歳入社 ▲26歳自分ライフプランニング を参考に自ら会社に転職			▲60歳退職 ▲80歳介護福祉士として再就職	
家庭			▲28歳結婚 ▲30歳第1子出産 ▲32歳第2子出産	▲40歳マイホーム購入			
社会活動 (趣味・ボランティア)			▲25歳料理教室に通う				
資格					▲45歳介護福祉士の 資格取得		

②将来デザインシート

①で考えたライフプランを実現していくために、「〇年後の自分」のことを書き出してみましょう。どんなことでもかまわないので思いをつくまざまに書いてみましょう。

		あななは何をしている？	【考えるヒント】
2021年	高校3年生	受験まっ最中	・勉強は？ ・仕事は？ ・家族は？
2025年	22歳の頃	就職活動開始	・趣味は？ ・結婚は？
2030年	27歳の頃	就職して5年目	・子どもは？
2035年	32歳の頃	就職して10年目	・どこに住んでいる？ ・誰と住んでいる？
2043年	40歳の頃		・仕事における目標は？ ・平日の夜は何をしている？ ・休みの日は何をしている？
2053年	50歳の頃		
2063年	60歳の頃		
2073年	70歳の頃		
2083年	80歳の頃		

しかし、結果としてはこれも成功したとは言えない。今年度の発表を見ても、社会の変容を踏まえた新たな職業などを提示するものは見られたが、人生を見通したキャリアを提示できたものは皆無であった。

iii 発表会の形式について

昨年度のプレ実施では、他者の発表から新たな視点を獲得し、内容を深めさせたいという意図があり、シャッフル発表会、クラス内発表会、代表者による最終発表会という3段階の発表を行ったが、それはこちらの意図通りに働いた。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、最終発表会を対面型の口頭発表形式で実施することができず、Zoomを用いて各HR教室に配信し、質疑応答も中止という形式にせざるを得なかった。そのため、今年度は最終発表会を対面型で実施したいという思いを持っていた。

しかし、これも8月下旬に予定していた最終発表会が新型コロナウイルスの感染第5波の時期と重なってしまい、今年度は昨年度よりも後退し、事前に発表の様子を撮影した動画による配信型の最終発表会にせざるを得なかった。生徒の安全や感染予防を考えると妥当な判断ではあったと思うが、最終年度の取り組みとしては悔いが残るものとなった。

iv 客観的かつ適切な評価活動の実施

これは、開発単位IからIIIの全てで共通する課題であった。人間関係もある程度成立している高校

3年生ではあるが、前項9-ii-cにも述べたように「他者への配慮」からルーブリック評価表を用いて「客観的かつ適切な」評価ができたとは言いがたい。

現高校1年生の開発単位Iでは振り返りのアンケートの中に「評価」についての項目を設定することで適切な評価を行いやすい環境を提示したが、本開発単位においては具体的な対応を行うことはできなかった。

11 次年度（自走期間）への対応

本開発単位は、講師を設定せずその活動は学内のみに限定しているため、予算的な面を含んでも次年度以降の実施については大きな影響はないと考えられる。ただし、河合塾「学びみらい PASS」に関しては、大きな効果が見込めないこともあり、次年度以降は受験しないことが決定している。

12 「キャリア探究」プレゼンテーション資料（一部）

将来取り組みたいミッション

H3E 林 香里

ミッション

和歌山県紀美野町を地域活性化させること
(過疎化・高齢化をくい止めること)

紀美野町ってどこ？



紀美野町の魅力



キミノーカ



ドーシェル



生石高原



みさと天文台



くらとくり

紀美野町の中学校



野上中学校



美里中学校



長谷毛原中学校（休校）

紀美野町役場（産業課）を取材して



紀美野町の問題

交通面



せっかく行きたい
店があったのに
車でないといけないの？



Q：交通機関の便数を増やすには
どうすればいいのか？

A：利用客が増えるとよい！

利用客が少ないのに便数を増やすことは難しい



まず人を紀美野町に呼び込まなければ！！

具体的な対策

古民家民泊を開く

↳ 郷土料理を作る ・ 農家体験をする

トレッキングマップを作る

↳ トレッキングに訪れた人により紀美野町の
自然を感じてもらう
(国内外の人を対象に)

[紀美野町観光PRムービー／紀美野町
\(town.kimino.wakayama.jp\)](http://town.kimino.wakayama.jp)

トレッキングとは？

山歩き・登山のこと

私の将来設計

H3C 17 丸佐有里

自分の将来したい事とは...

- 小さい頃から自然に興味がある

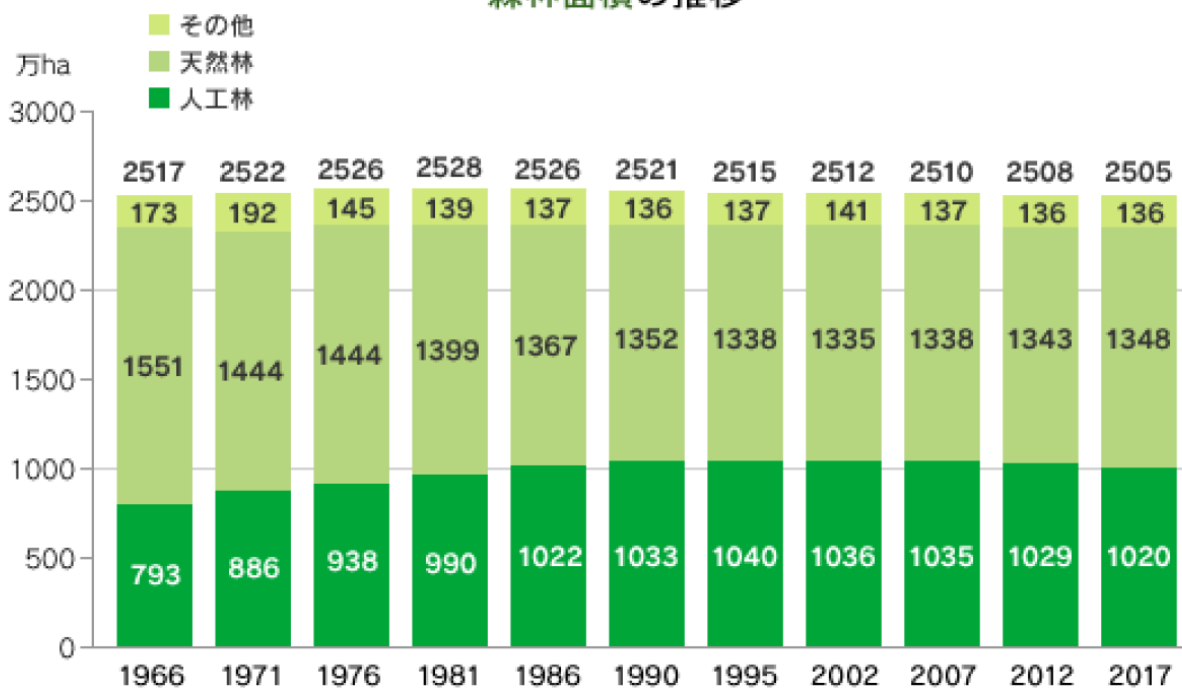


- 最近では、山の斜面の補強やショッピングモールなどの大型施設の建設によって、緑が減少している。



- 自分が好きな自然を守る仕事に就きたい。

森林面積の推移



出典：森林資源の現況（平成29年3月31日現在）

しかし、身近な緑は減少してる。

- 都市部では街中で見られる緑が減少している。



- 街並みの中の緑地を増やしたい！！

環境デザイナー

環境デザイナーとは...

環境に配慮して設計を行う技師。

- ・ 都市計画プランナー
- ・ 建築技術士
- ・ 造園士

造園士：個人宅から都市公園や緑地公園など、幅広い注文主の要望に合わせた庭園づくりを行う。
規模が大きくなれば、新しい施設の造園設計も行う。



自然を守るために...

1. 大学に進学し、自然について学ぶ。
2. 造園施工管理技士の資格をとる。
3. 造園士になり、都市緑化を推進していく。

ご清聴ありがとうございました

④ 開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校1年生対象)

1 目的

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』1目的」と同じ。

2 内容

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』2内容」と同じ。

3 期待される成果

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』3期待される成果」と同じ。

4 概要(実践)

i 今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
3	①	1月24日(月)	1	「グローバル探究」ガイダンス(オンライン) ・「リージョン探究」の振り返り ・「グローバル探究」の内容説明 ・「グローバル探究」ループリック評価表の配布	変更実施
	②	2月21日(月)	2	「グローバル探究」分野選択講義①(オンライン) ・「女性」「福祉」分野	変更実施
	③	3月16日(水)	2	「グローバル探究」分野選択講義②(オンライン) ・「環境」「教育」分野	変更実施

ii 担当講師

教育 : 和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科 辻伸幸先生

福祉 : 日本赤十字社和歌山医療センター

外傷救急部/外科医/国際医療救援登録要員/国際人道法普及担当 益田充先生

女性 : 一般社団法人「女性と地域活性推進機構(WAO)」代表理事 堀内智子先生

環境 : 徳島大学 環境防災センター学術研究員 松重摩耶先生

5 新型コロナウイルスの影響

今年度は前年度の反省もあり、新型コロナウイルス感染拡大を恐れ、とりあえず中止にするということは避け、創意工夫をもってできることは行うという姿勢で年度前半を運営し、本事業を原因とするクラスターなどは一切起こらなかった。そのため、年度の終盤となる本開発単位もその姿勢を継続することとした。

しかし、あえて「密」をつくることのないように、「グローバル探究」のガイダンスは、GoogleMeetを用い、各HR教室への配信形式にした。また、「グローバル探究」の4名の講師のうち2名が他府県在住ということもあり、分野選択講義も昨年度同様の配信形式とした。

6 評価

i 評価方法

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』8評価、i評価方法」と同じとするが、今後変更することも考えられる。

ii ルーブリック評価表

昨年度に使用した「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』8評価、iiルーブリック評価表」の(表1)および(表2)を用いるが、(表1)については、今年度「グローバル探究」を終了した2期生のアンケートによる意見を参考に、一部簡潔な表現に変更した。以下に添付する。

(表1) 2022年度版「グローバル探究」ルーブリック評価表

2022年度和歌山信愛高等学校「グローバル探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究		コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	表現力・発信力 (他者へ)	多様性受容力 (他者から)
S	他者や社会に貢献することの価値に気づき、積極的に活動した。	活動以前に強い興味関心があり、それが深い探究につながった。	グローバル探究にふさわしく、独自性に富んだ課題を見つけ、設定することができた。	先行研究を踏まえ、独創的なアイデアで解決策を提示することができた。	他者の理解や共感を得るために工夫しながら思いを伝えることで、大きなサポートを得ることに成功した。	自分と考え方が異なる人の意見も積極的に受け入れ、柔軟な思考や態度を身につけた。
A	この活動を通して、他者や社会に貢献することの価値に気づいた。	活動を進めていくことによって、興味関心が大きく広がった。	グローバル探究にふさわしい具体的な課題を見つけ、設定することができた。	調べた資料やデータを解釈し、妥当な解決策を提示することができた。	他者に自分の思いを受け入れてもらうことを意識しながら伝えることができた。	自分と考え方の異なる人の意見も尊重することができた。
B	他者や社会に貢献することの大切さに気づきながらも活動に反映できなかった。	活動を通して、あまり興味関心を抱くことができなかった。	グローバル探究にはふさわしいが、目新しさのない課題設定となってしまった。	独自の解決策を提示しているが、データ等の根拠がなく、実現性に欠けたものとなった。	他者に自分の思いを伝えようとする気持ちはあったが、上手く伝えることができなかった。	自分と考え方の異なる人の存在に気付きながらも、自分の考えにこだわるが多かった。
C	消極的な活動に留まり、他者や社会に貢献することの価値を理解できなかった。	興味関心を広げ、深めようという姿勢で取り組むことができなかった。	グローバル探究に関連していない課題設定となってしまった。	調べた資料やデータを提示しているだけで具体的な解決策が提示できなかった。	他者に自分の思いを伝えようとする意志を表すことができなかった、	自分と考え方の異なる人の意見は受け入れたくないと交流することを拒絶してしまった。

7 現状報告

本開発単位は、「リージョン探究」を終了した本事業3期生となる高校1年生が行っているプログラムである。各分野の担当講師は、本事業開始当初から変更せず、今回で3度目となる。開始段階では生徒の理解や、どの程度の難易度を設定すべきかなどと手探りで進めてきたが、回を重ねるにつれ、本学生徒の特性などについても理解が進み、生徒たちにとっては良い意味でどの分野を選択し、どの分野の講師の指導を受けたいかを悩むような環境ができつつある。本格開始となる次年度より自走による活動となるが、このような環境は継続して提供すべきであると感じている。

⑤ 開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校2年生対象)

1 目的

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』1目的」と同じ。

2 内容

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』2内容」と同じ。

3 期待される成果

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』3期待される成果」と同じ。

4 概要(実践)

i 今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
冬休み	-	-	-	冬休みの課題として「一般社団法人ナレッジキャピタル主催『未来の“私の”仕事を考える』」への応募	通常実施
3	①	2月7日(月)	1	「キャリア探究」ガイダンス(オンライン) ・内容説明およびブルーブリック評価表の配布	変更実施
	②	3月15日(火)	2	地域協働事業コンソーシアム主催「キャリア探究」特別講演 ・国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川主催 ・講師:株式会社ポーラ代表取締役社長 及川美紀様 ・演題:「可能性は広がる」	変更実施
	③	~3月18日(金)	-	株式会社リクルートスタディアプリ「適性診断」の実施 ・ガイダンスを踏まえ、各自がオンライン上で実施	通常実施

ii 担当講師

本開発単位は各個人による探究活動のため、講師は設定しない。高校3年生に所属する教育改革推進事業運営チームの3名の教員を中心として、学年に所属する全ての教員が運営、指導にあたる。

5 新型コロナウイルスの影響

前項の「グローバル探究」と同様に、年度前半の運営においてクラスターなどが起こらなかったため、創意工夫をもって行うべきことは行うという姿勢で取り組んでいる。「キャリア探究」のガイダンスを含め、コンソーシアム主催の特別講演も講師の及川美紀様が東京在住ということもあり、Google Meet を用いてオンラインで実施している。

6 評価

i 評価方法

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』6 i 評価方法」に準じ、個人による自己評価のみを行う。なお、シャッフル発表会・クラス内発表会・最終発表会という3度の発表の機会を通して、他者からの評価やアドバイスを得ることができるようにする。と

ii ルーブリック評価表

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』6 iiルーブリック評価表」に準じるが、(表1)のみ、1期生となる高校3年生のアンケートを参考に、一部改良した。

2022年度和歌山信愛高等学校「キャリア探究」ルーブリック評価表

	姿勢		探究			コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力・課題設定力	課題解決力	継続・発展性	表現力・発信力(他者へ)	多様性受容力(他者から)
S	自らの未来と他者や社会への奉仕・貢献という2つの視点が高いレベルで融合した活動を行うことができている。	自らのキャリアだけでなく、これからの社会にも強い興味関心を持って探究活動に取り組んでいる。	自らの適性や社会変化の予測を踏まえ、人生全体を見通した上で、独自の課題を発見・設定することができる。	人生全体を見通し、独創的で興味深い自己キャリアを提示し、その実現に向けてすでに行動を始めている。	これまでのプログラムの成果を活用しながら「キャリア探究」に取り組むことで、さらにその学びを発展させることができる。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることができるだけでなく、その情熱で他者の主体性まで引き出ししている。	自らと考え方の異なる他者にも強い関心を持ち、その考え方や成果を積極的に取り入れ、より質の高い成果につなげようとしている。
A	自らの未来という視点だけでなく、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点も意識しながら活動することができる。	自らのキャリアについて興味関心を持って探究活動に取り組むことができる。	自らの適性や社会変化の予測などを意識しながら、適切な課題を発見・設定することができる。	自らの適性や社会変化などを踏まえた自己キャリアを提示することができる。	これまでのプログラムの成果を活用しながら、「キャリア探究」に取り組むことができる。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることで、他者の心にも刺激を与えている。	自らと考え方の異なる他者にも関心を持ち、その考え方や成果を自らにも活かそうとする態度をとることができる。
B	自らの未来という視点を中心となり、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に乏しい活動となっている。	自らのキャリアについて興味関心はありながらも、消極的な探究活動にとどまっている。	課題を発見・設定することはできているが、自らの適性や社会変化の予測、人生全体などの関連性には乏しい。	自己キャリアを提示することはできているが、自らの適性や社会変化との関連性には乏しい。	これまでのプログラムの成果を活用して「キャリア探究」に取り組もうとしているが、現時点では上手くない。	他者に対して自分の思いを伝えようとする気持ちはあるが、他者を巻き込むには至っていない。	自らと考え方の異なる他者の存在には気付いているが、何かを得ようとする態度はとることができていない。
C	自らの未来という視点しか含まれておらず、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に欠けてしまっている。	自らのキャリアという重要な事柄に興味関心を持つことができているが、中途半端な探究活動にとどまっている。	「キャリア探究」の内容を理解しておらず、適切な課題の発見・設定を行うことができない。	「キャリア探究」の内容を理解しておらず、将来の目標を述べただけにとどまっている。	これまでのプログラムの成果を意識せずに「キャリア探究」に取り組んでいる。	他者に対して自分の思いを伝えたいという気持ちに欠け、他者を巻き込むこともできていない。	自らの考え方以外に関心や成果を自らに活用させることの意義も理解できていない。

7 現状報告

本開発単位は、「グローバル探究」を終了した本事業2期生となる高校2年生が行っているプログラムである。プレ学年である大学1回生、1期生である現高校3年生が、「リージョン探究」「グローバル探究」という負担の大きなプログラムに取り組んだ経験を自らの興味・関心や進路と結びつけることにより、より具体的で、実現したいというモチベーションが伴った進路選択につながったという実績があることから、「キャリア探究」のもつメリットも学内で共有することができつつあり、現段階ではかなり順調に進んでいるという印象を受ける。

また、コンソーシアム主催の「キャリア探究」特別講演で、株式会社ポーラの代表取締役社長である及川美紀様に登壇いただいたことも生徒たちのモチベーションの向上につながっている。同じ女子校出身で多くの困難を乗り越え社長に就任した及川様のお話は生徒たちの心に深く刺さるものとなった。公演後に実施したアンケートでは、98.6%もの生徒が「感銘や刺激を受けた講演だった」と回答している。また、この講演を経て、今後「キャリア探究」に取り組む気持ちを尋ねたところ、15.8%の生徒が「講演前から積極的に取り組むつもりだった」、81.3%の生徒が「講演を通して、より積極的に取り組みたいと思うようになった」と回答しており、今後の活動に向けて大きな弾みがついている。自走期間となる次年度ではあるが、様々なワークシートや適性診断の結果を参考にしながら、高いモチベーションを継続させながらより具体的なキャリアプランニングに向けて探究活動を継続させていきたいと考えている。

⑥ 開発単位Ⅳ 各教科による「ミニ探究」授業開発

1 目的

開発単位ⅠからⅢが本事業の「主」の活動であるならば、本開発単位は、生徒たちにとってその主を補い、さらに発展させるための「副」の活動となる。開発単位ⅠからⅢにおける学びと「ミニ探究」の学びを相互に連携させながら、生徒たちを「生涯に渡って探究を深めていく未来の創り手」へと成長させることを目的とする。

また、本事業の3年間の指定が終了した翌年の2022年度は新学習指導要領が高等学校において年次進行で実施される初年度となる。この段階においてカリキュラムマネジメントおよび探究学習において地域の学校を牽引できるような存在となることを目指す。

なお、社会が変化することによって、社会から求められる能力も変化している現状において、生徒にチャレンジを求めながら、教員は何もしないという状況では生徒たちにとって説得力がない。教員も新たな学びに向けてチャレンジしているという姿を生徒たちに見せることで、生徒たちの本事業に取り組むモチベーションも向上すると考えている。

2 内容

本学に勤務する全ての専任教諭が、本事業との関わりを考慮した上で、創意工夫のもと探究の要素を含んだ授業を年間に1つ開発・実践する。なお、その授業は公開形式とし、校務支援システム上で全教職員に告知し、指導案・資料等を共有する。さらに、授業の実施後は、教科会議において評価・改善を行い教材化する。

また、これらの成果を教科主任で構成されるカリキュラム検討会議において、「Key Girl」として育成したい生徒の資質・能力を踏まえた上で、いつどの段階でどの「ミニ探究」授業を実施するのが効果的かという観点をもって、本学独自の年間カリキュラム作成へと繋げていく。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ②・③・④・⑤・⑥・⑦

4 今年度実施状況

今年度も昨年度と同様、新型コロナウイルスの影響を受け、本開発単位に取り組むことができなかった。その最大の理由は「休校にならなかったこと」である。昨年度に一気に導入された「Classi」や「ロイノート」は年間使用料を払っていることもあり、通常の授業で積極的に使用することが求められ、各教員は授業への落とし込みに追われることになった。また、いつ休校となっても学びをとめることなく、スムーズにオンライン授業へと移行できるように教材作成にも力を注ぐ必要があった。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大を生じさせることなく、本事業をより充実したものにするために、常に創意工夫が求められ、本学のように全教員が本事業に関わるような学校においては、教員の負担が非常に大きくなっていった。そこで、新型コロナウイルスへの対応というこれまでに体験したことのない「未知のものへの対応」ということも、教員が「チャレンジ」している姿であると考え、今年度も本開発単位に関しては凍結せざるを得ないと判断した。

5 カリキュラム作成

当初想定していたほど、「総合的な探究の時間」と各教科との連携はとれていないが、カリキュラム検

討会議において、2022年度からの新しいカリキュラムは無事に作成されている。

6 成果

今年度は、本開発単位を凍結させたため、特筆すべき成果はない。

7 次年度への課題

次年度からは、新しい学習指導要領に対応した新しいカリキュラムのもとでの学びがスタートする。本事業に取り組んだことで、地域の学校と比較すると、受験に対応するための学力だけでなく、予測の難しい社会に対応するための能力を育成すべきであるという意識は教員のなかで周知、理解されるようになっているが、それが教科の学びにおいては実践できていないというのが大きな課題である。なお、本事業における1つの影響として、次年度より中学3年生で探究学習により重点を置いた「i（アイ）コース」が編成されることになっている。このコースでは、各教科と探究学習を有機的に結びつけることを目標にしており、このコースにおけるチャレンジと成果を学校全体へと広げていきたいと考えている。

⑦ 2021 年度最終成果発表会

1 目的

本学が、本事業への申請を行ったのは、本学の生徒にこれからの社会で必要な能力をいかにして身につけるかという問いに対するチャレンジの延長線上から生じたものであるが、それと同時に「地域の未来」に対する貢献という思いも存在している。近年和歌山県の県庁所在地である和歌山市には複数の大学が開学し、状況は明らかに変化しつつあるものの、和歌山県の大学進学者の 9 割が他府県に流出するという現象が 30 年も続いたという厳しい現実、地域の未来を明るく照らすものとなるはずがない。そこで、本学の取り組みを少しでも早く地域の学校、地域の方々に見ていただき、地域の未来のために協働できないかと考え、当初は最終年度となる 2021 年度に最終成果発表会を開催予定であったが、それを 2 年前倒しし、2019 年度から実施することにした（ただし、2020 年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止した）。

また、本学生徒に対しては、外部の方々の前で発表するという貴重な機会を提供するとともに、学年を越えた発表の機会を持つことで、高校 1 年生、2 年生がともに刺激を受ける機会となることも期待した。

2 内容

今年度 9 月に実施した「キャリア探究」、12 月に実施した「リージョン探究」および「グローバル探究」の最終発表会の中で、評価の高かった優秀班を選び、運営指導委員の先生方だけでなく、公開形式として、他のグローバル校、地域の学校、地域の方々へ参加を呼びかけた上で実施する。また、最後に運営指導委員の先生方より講評をいただく。

3 新型コロナウイルスの影響

当初より本事業の最終年度となる 2021 年度は、2 月 14 日（月）に外部のホールを借り、その成果を多くの方々に見ていただきたいと考え、広く参加を募っていた。しかし、年明けより全国的にも新型コロナウイルスオミクロン株の感染が急拡大することとなってしまった。そこで、マイクの消毒、発表者と座席との距離の確保、観覧者も間隔をとって座席に座るなどの感染対策を徹底して実施しようと考えていた。しかし、最終成果発表会の直前である 2 月 5 日（土）より和歌山県にまん延防止等重点措置が適用されることとなり、最終成果発表会の実施について根本からの考え直しを迫られることとなった。中止という判断をすることは簡単ではあったが、ここまで、「できることは工夫をして行う」というスタンスで本事業を運営してきたこともあり、急遽オンラインを用いて最終成果発表会を実施すべく様々な方法を模索することとした。YouTube や Google Meet なども検討したが、個人情報などのプライバシー保護の観点から、最終的に Zoom のウェビナー機能を用いて配信するという方式を用いることにした。

4 当日（2 月 14 日）のスケジュール

12:30	第 4 時限終了
12:30 ~ 13:00	昼食
13:00	配信開始。各クラスおよび参加者の接続開始
13:20	開会、校長挨拶
13:30	高校 1 年生「リージョン探究」プログラム紹介

13:32	高校1年生「リージョン探究」優秀班発表 「地域医療」「地域経済」「地域農業」「地域林業」「地域産業」「地域行政」の 6分野から優秀班1班ずつが発表
14:20	運営指導委員および「地域経済」分野担当講師 足立基浩先生による講評
14:30	トークセッション「探究学習と大学の学び」 卒業生と本事業運営委員長とのクロストーク
14:45 ~ 14:55	休憩
14:55	高校2年生「グローバル探究」プログラム紹介
14:58	高校2年生「グローバル探究」優秀班発表 「福祉」「教育」「女性」「環境」の4分野から優秀班1班ずつが発表
15:30	運営指導委員 大山輝光先生による講評
15:40	高校3年生「キャリア探究」プログラム紹介 代表1名が発表 ※高校3年生は国公立大学2次試験を控えていたため、す でに進路が決定している生徒の中から選抜した
15:50	「地域協働事業3年間の総括」(本事業運営委員長)
15:55	運営指導委員 平山恭子先生による総括
16:15	校長挨拶
16:20	閉会

5 成果

i 発表生徒

高校1年生の代表班は、相手の見えないオンラインという形式による緊張と最終変更前の発表用資料が誤って投影されるというミスも重なり、悔いの残る形で発表を終えることとなったが、高校2年生、3年生と年次が上がっていくにつれ、発表に安定感が生まれ、2年半に及ぶ本事業のプログラムにおいて「表現・発信力」がしっかりと強化されていることが確認できた。

また、生徒だけでなく参加して下さった地域の方々も含めて質疑応答を実施したことで、瞬間的な受け答えの力も強化することができたように感じている。

ii 参加生徒

優秀班という評価を受けた班の発表を通して、次年度以降どのように探究学習を進めていくかという指針を得るとともに、次年度以降に自分たちが取り組むテーマについての良質な発表を事前に聞くことができるのは、参加生徒にとって大きな学びとなった。

また、質疑応答の際には、最終発表会同様一旦ロイロノートに質問を集約し、その中から教員が選択し、司会生徒より指名するという形式をとったことで、とりあえず疑問に感じたことを表現するという点においては心理的なハードルを下げることもできた。また同時に、どのような質問が発表班の学びをさらに深めることにつながる良質な質問であるのかということも徐々に浸透してきた。

iii 地域の方々および他のグローバル型指定校などへの普及

対面型で実施するという段階からコンソーシアム構成団体の関係者、地域の学校、他のグローバル型指定校へ案内状を送付していた。コロナ禍ということもあり、他地域からの参加希望は乏しかったものの、初年度に実施した成果発表会の時よりは反応も大きなものとなった。しかし、急遽オンライ

ン開催となったことで連絡がギリギリとなり、学校HPも活用しながら告知に努めたが、当初の予定よりは参加者が少なくなってしまったことが残念ではあった。しかし、学外から50近くのアカウントが接続してくださり、一定の成果をあげることができたと感じている。

6 次年度以降への課題

指定終了後の次年度からは、年間の成果を発表する成果発表会を開催するか否かということから検討することになると考えている。これについては現時点で結論は出ておらず、今後も学内で検討することとなっている。ただし、SGHアソシエイトから本事業という足掛け8年にも及ぶ日々によって、探究型学習の意義は学内に浸透しており、可能な限り現状と近いものを実施すると同時に、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえながらではあるが、対面型の発表を再開できるようにしていきたいとも考えている。

⑧ その他の取り組み

A 2021 年度全国高校生フォーラム

1 目的

WWL および SGH ネットワークを広く普及し、より一層の推進を図るため。

2 日時

2021 年 12 月 19 日（日）13:00 ～ 17:30

3 主催

文部科学省、国立大学法人筑波大学

4 プログラム

- 13:00 ～ 13:07 開会式・全体説明
- 13:08 ～ 15:04 プレゼンテーション
- 15:05 ～ 15:15 休憩
- 15:15 ～ 16:35 生徒交流会（テーマ別分科会）
- 16:36 ～ 16:41 文部科学省施策説明
- 16:42 ～ 16:50 休憩
- 16:50 ～ 17:30 講評・受賞校コメント・閉会式

5 本学参加生徒

高校 2 年生 3 名

6 本学の提出プレゼンテーション動画へのコメント

What a fantastic suggestion. Stopping mosquitos and as a result malaria, through a natural and cheap method is great. I hope your idea spreads and that you can help people in need with your idea. Great work.

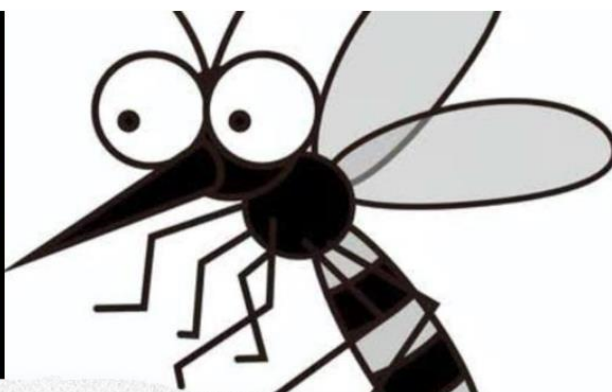
7 成果

これまで過去に参加した対面型の高校生フォーラムとは異なり、オンラインということで他校の生徒との交流や学びといった部分においては過去の学びには及ばない部分はあったと思う。

しかし、英語を学ぶという部分においては、これまで同様参加生徒にとって大きな刺激になったように思う。自分たちの考えたことや感じたことをいかにストレスなく表現できるかという点で本学生徒はまだまだ及ばなかった。新型コロナウイルスの影響で海外研修にも参加できず、かつてと比較すると実践的英語運用能力に陰りが見られる。そのため、このような機会は非常に貴重なものであり、次年度以降の生徒にもこの貴重な学びを届けていきたいと思っている。

8 発表概要

学校番号【WWL 拠点校番号・SGH ネットワーク参加校番号】 G1915
学校名（日本語）※正式名称を記載 和歌山信愛高等学校
学校名（英語）※正式名称を記載 Name of School Wakayama shin-ai High School
日本語テーマ（40 字以内） レモングラス vs 蚊
日本語要約（200 字以内） 5歳未満で亡くなる中央アフリカの子供の数を減らすために死亡原因として多いマラリアの感染を防ぐために蚊を減らさなければならぬと考えた。中央アフリカの人々が自分たちで蚊の対策ができるように植物を使用すれば良いと考えた。そこで、中央アフリカで育てやすいレモングラスに目をつけた。レモングラスは苗のままではその場でしか虫よけができないので、石鹼に練りこめば手洗いの習慣もつき、蚊の対策もできると思った。
英語テーマ Title (20 words) Lemongrass vs Mosquito
英語要約 Outline (100 words) To reduce the number of children who die under the age of 5 in Central African Republic, we think to use lemongrass,which is suit for mosquito repellent,and reduce the number of mosquitoes which cause malaria. Because lemongrass is tough enough to survive in marine transit,and it does'n need much water after roots come up,so we think to grow it from seeds to seedlings in Japan and send the seedlings to Central Africa,then we are planning to process the lemongrass to soaps made from materials we can get there easily.



Lemongrass vs Mosquito

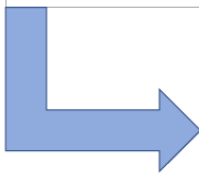
Wakayama Shin-ai High School

★ Let's reduce the
number of children who
die under the age of 5!

5.2 million children die under the age of 5 every year.

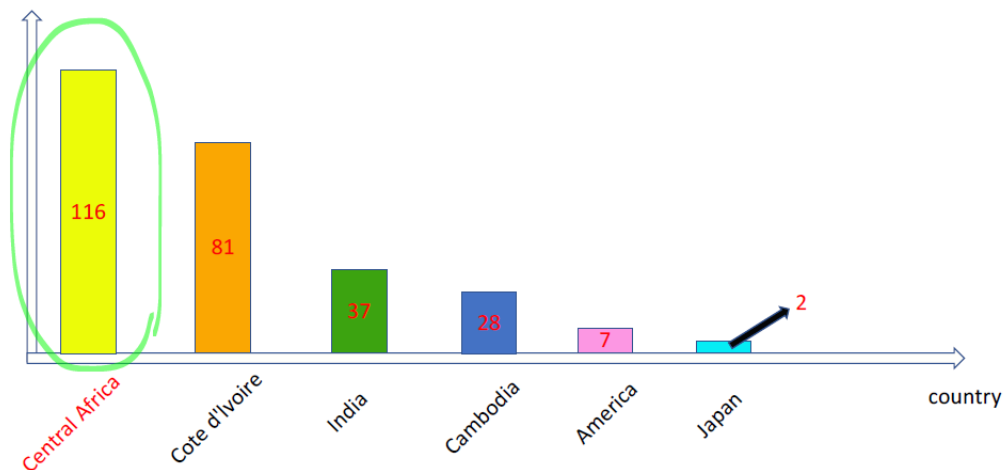


Most Japanese children don't die under the age of 5 .



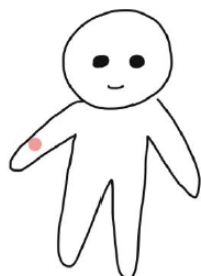
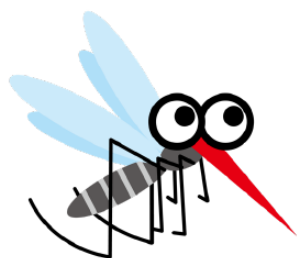
Why does this happen?

The number of children who die under the age of 5 years old

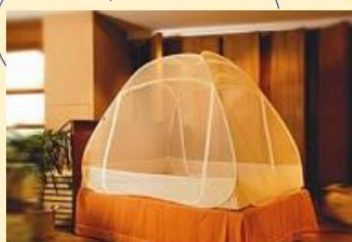


< the number of children who die under the age of 5 years old per 1000 children in a year >

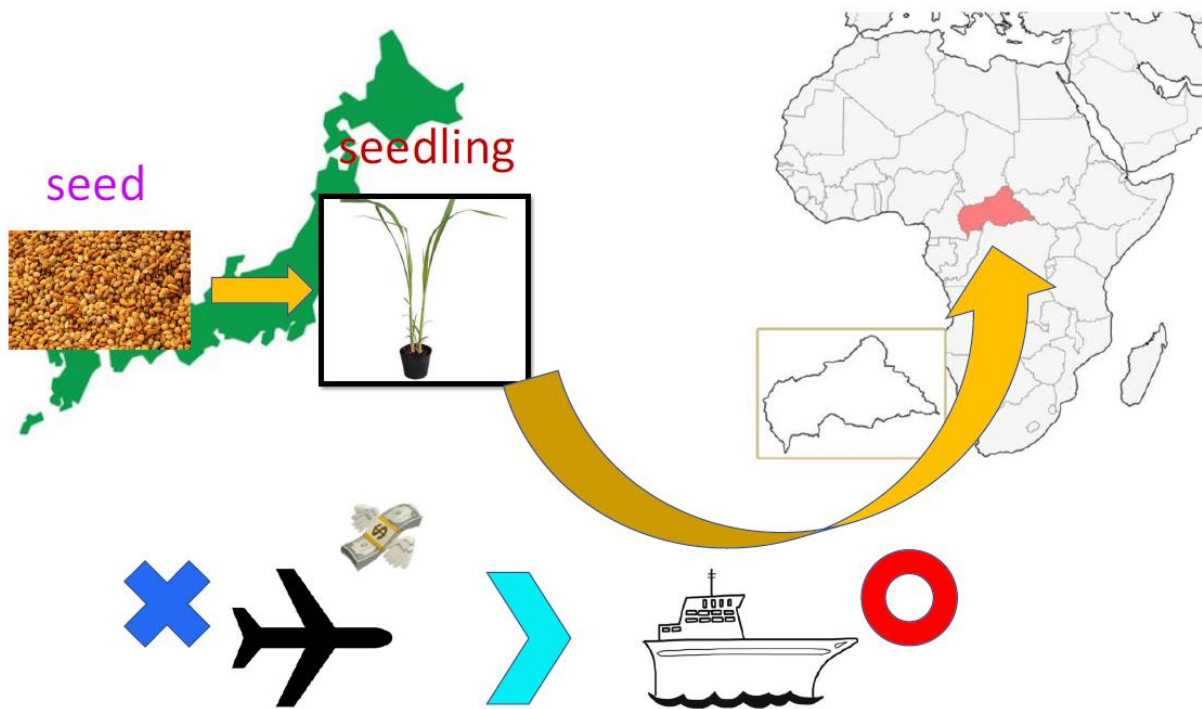
MALARIA



mosquito

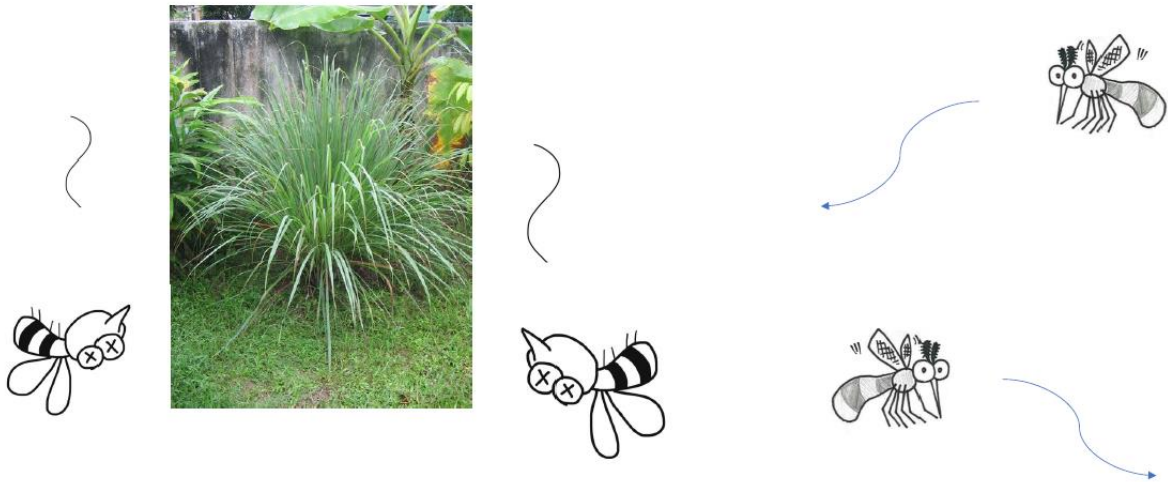


Water Shortage



FUND RAISING





clean water



lemongrass



spray



"Jotyugiku" is toxic to people in Central African Republic.



vegetable oil



lemongrass



sodium hydroxide

soap



baking soda egg shells

B 海外研修（カンボジア）

1 目的

本事業におけるリーダー養成研修的な位置づけとして実施する。カンボジアの地方都市カンポットでの教育支援活動のお手伝いや、カンボジアで活動する日本の方々からのインタビューを中心とし、日本では味わうことのできない非日常の体験が詰まった本研修を通して、「Key Girl」の資質のみならず、1人の人間として大きく成長するような機会を提供することを目的とする。

2 研修概要

- i 日程 : 冬期休暇（12月下旬）の6泊7日（機内泊1日を含む）
- ii 研修場所 : カンボジア（プノンペン・カンポット・シェムリアップ）
- iii 研修参加者 : 高校2年生10名
- iv 引率 : 教諭 2名

3 研修参加者選抜方法

- i 公募 : 1学期末試験後に海外研修説明会を実施。
- ii 提出書類 : 参加申込書、同意書、志望理由書（800字以上）、英語力を証明する書類（写し）。
- iii 選考方法 : 「総合的な探究の時間」における活動実績、志望理由書、英語力を総合して、校長・副校長・教頭を含む教育改革推進事業運営委員会にて選考。

4 事前研修

i 調べ学習

研修参加者で相談のもと、カンボジアに関しての調べ学習を実施する。保護者同伴のもとで実施する海外研修説明会で発表・共有を行う。

なお、これまで「クメール語」、「カンボジアの歴史」、「カンボジアと日本との関係」、「カンボジアの教育環境」、「カンボジアの農業」、「カンボジアの産業」「アンコールワットについて」などのテーマで調べ学習を実施している。

ii 現地高校生との事前交流

2019年度の海外研修より、本学の海外交流アドバイザーである現地のシスターの紹介により、現地カトリック校である聖フランシスコ高等学校の生徒とFacebookに付随する「Messenger」アプリを用いて、オンラインによる事前交流を、英語を使用言語にして2週間に1回行った。これにより現地校を訪問した際にスムーズな交流が可能となり、非常によい方法であったと感じている。

iii 現地小学校における特別授業の準備

海外交流アドバイザーである現地のシスターは、本学の経営母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のカンポット共同体に所属しており、周辺の村々にも幼稚園や小学校を建設、運営して

いる。そこで、研修訪問時にはカンボジアの学校では実施することが難しい授業を 50 分×2 コマ実施してほしいとの依頼を受けている。そのため、参加生徒たちは事前に現地の教育環境を調査し、現地で実施することが難しい実験等の授業や日本の文化を伝えるような授業を実践している。

iv 募金活動の実施

現地では、子どもたちの教育環境をよりよいものにしたいと切望しながらも、金銭面の不足で実現できていないという現状がある。そのため、体育祭等の機会を利用し、保護者などを対象に募金活動を実施している。

v 未使用文具の回収・配布活動

前項と同様、現地で学ぶ子どもたちには、鉛筆やノート、消しゴムといった当たり前の文具が不足している。そのため、各家庭で使われないまま眠っている未使用文具を回収する活動を行い、現地に届けるといった活動を行っている。子供たちとの交流の最後にそれらの文具を子供たちに配布しているが、目を輝かせながら我先にと文具を求める子供たちの姿から生徒たちは多くのことを感じ取り、考える機会となっている。

5 今年度の実施について（新型コロナウイルスの影響を含む）

i カンボジア研修に向けての考え方

本事業においてカンボジアへの渡航が可能だったのは初年度となる 2019 年度のみである。昨年度に引き続き、今年度も多くの生徒がカンボジアへの渡航を希望していたが、新型コロナウイルスの状況を鑑みると、仮に実施をしたとしても、保護者のみならず、学校内外の理解を得ることはできないであろうと判断し、年度早々の段階で中止を決断せざるを得なかった。

しかし、2021 年度は、簡単に中止で終了するのではなく、創意工夫のもとできることを行うというスタンスで本事業を運営していたため、実際にカンボジアを訪問することによって得られる学びに少しでも近づけることができないかということを探した。

ii ハイブリッド型（動画×オンライン）カンボジア研修の実施に向けて

本学の海外交流アドバイザーの 1 人である Happy Smile Tour の伊東邦将氏との綿密な打ち合わせを重ねることによって、年末の段階で、日本出国前の PCR 検査で陰性であること、カンボジア入国前の PCR 検査で陰性であれば、カンボジアに隔離なしで入国できること、また、カンボジアの新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていることから、研修当日にファシリテートを行う教員が、実際にカンボジアを訪問し、そこで様々な取材を行った上で動画教材を作成することによって、ただ「動画を見る」やただ「現地とオンラインで接続する」とは異なる「熱さ」がこめられた研修となり、参加生徒の心に与える衝撃も大きくなるのではないかという結論に達し、教員 2 名（実際は、家庭の都合により 1 名は直前でキャンセル）が年末に現地を訪問し、作成した動画を用いて 3 月に「ハイブリッド型カンボジア研修」を実施することにした。

iii 教員（1名）によるカンボジア渡航（行程）

月日	時間	内容	訪問地
12月23日（木）	12:20	関西空港発、仁川空港へ	関西空港 仁川
	14:25	仁川空港着	
	18:30	仁川空港発、プノンペン空港へ	プノンペン
	22:25	プノンペン空港着 PCR検査後入国	
12月24日（金）	0:30	プノンペン空港よりホテルへ	プノンペン
	9:30	ホテル発	
	10:00	「Rice Ball PhnomPenh」見学	
	10:30	「うどんハウスNGO」楠川富子さん訪問	
	11:30	「SANCHA」奥田真理子さん訪問	
	13:30	「Cheers」前園瑞貴さん訪問	
	15:00	「NyoNyum」山崎幸恵さん訪問 ※動画撮影	
	16:30	チョロイチャンバー地区見学	
19:00	イオンモール1号店見学		
12月25日（土）	9:00	「Sunrise Japan Hospital」中山美穂子さん訪問 ※動画撮影	プノンペン
	12:30	「Le Point」重富祐佳さん訪問	
	15:30	トゥールスレン虐殺博物館見学 ※動画撮影	
	19:30	ナイトマーケット見学	
12月26日（日）	8:30	車にてシェムリアップへ移動	プノンペン
	14:30	シェムリアップ着	
	15:00	「RAY'S Mrech Kampot Café」訪問	シェムリアップ
	16:30	プサールー（マーケット）見学	
18:00	シェムリアップ再開発地区見学		
12月27日（月）	8:30	アンコールワット遺跡修復現場見学 ※動画撮影	シェムリアップ
		上智大学特任助教 三輪悟先生訪問	
	11:00	アンソルビー村バナナペーパー工房見学 Kumae代表 山勢拓弥さん訪問 ※動画撮影	
	14:00	Candy Angkor 飴職人関屋やよいさん訪問 ※動画撮影	
19:00	山勢さん、関屋さんとの会食		
12月28日（火）	9:00	スバイチェイクオーガニックファーム見学 アンコールクッキー創業 小島幸子さん訪問 ※動画撮影	シェムリアップ
	14:00	アンコールワット遺跡、アンコールトム遺跡見学	
	19:00	小島幸子さんとの会食	

月日	時間	内容	訪問地
12月29日（水）	8:30	出発前PCR検査	シェムリアップ
	9:30	むつみ日本語学校見学 ※動画撮影	
	13:00	トンレサップ湖および水上生活者見学	
	17:00	Angkor Eye見学	
12月30日（木）	8:30	PCR検査結果受け取り	シェムリアップ
	9:30	RAYS SHOP訪問	
	11:00	次年度以降に向けての打ち合わせ	
	13:00	車にてプノンペンへ移動	プノンペン
	19:00	プノンペン着、プノンペン空港へ	
	23:45	プノンペン空港発、仁川空港へ	
12月31日（金）	8:45	仁川空港発、関西空港へ	仁川
	10:30	関西空港着 PCR検査の実施、陰性確認の上入国手続き	関西空港
	13:00	関西空港より和歌山へ	

※1月1日（土）～1月14日（金）自主隔離

iv ハイブリッド型カンボジア研修

① 実施日 3月13日（日）

② 当日のスケジュール

- 9:30 集合（本学1号館3FホールA）
- 9:35 開会・アイスブレイク
- 10:00 作成動画①視聴（アンコールクッキー創業者：小島幸子さん）
- 10:20 ディスカッション①
- 10:50 作成動画②視聴（むつみ日本語学校）
- 11:10 ディスカッション②
- 11:40 休憩
- 11:50 作成動画③視聴（Sunrise Japan Hospital 事務長：中山美穂子さん）
- 12:10 ディスカッション③
- 12:40 昼食
 - ※午後のディスカッションに参加して下さる木下レイナさんが出演したテレビ番組（録画）の一部を視聴
- 13:00 オンラインディスカッション①
 - RAY'S Mrech Kampot Cafe 経営：木下レイナさん
 - Happy Smile Tour CEO：伊東邦将さん（※本学海外交流アドバイザー）
- 14:30 休憩
- 14:40 オンラインディスカッション②

Sunrise Japan Hospital 事務長：中山美穂子さん

15:20 リフレクション

15:30 閉会、下校

③ 参加生徒 高校2年生 10名

19名の生徒が参加を希望し、その中から参加を希望する理由、英語外部検定におけるCEFR等を基準に10名を選抜。

④ 当日の様子

当初は午前中に4本の動画を視聴する予定であったが、動画を視聴した後、テーマを設定せずに、動画を通して感じたことを自由に述べるという形式で実施したディスカッションが非常に盛り上がった。そのため、結果的に動画視聴が1本少なくなってしまったが、「何をもって成功とするか」「他者からの目」など参加生徒が胸襟を開いた内容となったことには大きな成果を感じている。

また、これまで初対面の方に対して、緊張からかあまり積極的に話すことができなかった本学の生徒たちがオンラインという相手の方と対面していない状況にも関わらず、多くのことを学び、考えようと積極的に話していく姿には、大きな成長を感じることができた。

6 本年度の実施を振り返って

本来ならば、実際に現地を訪問し、自らの五感で様々な学びを得るということを意図した「カンボジア研修」であったが、多くの生徒が実際にカンボジアへ渡航したいという希望はもっていたものの、新型コロナウイルスの影響によって、昨年度に引き続き、生徒を現地に連れて行くという願いは叶わなかった。

しかし、そのような状況下でも、現地を訪問して得る学びに少しでも近づきたいという思いからスタートさせたのが今回の「ハイブリッド型カンボジア研修」である。今回の研修を終え、正直に言えば、実際に現地を訪問して得る学びとは比較にならないと感じているが、中止し、何もしないということと比較すれば雲泥の差はあったと思う。動画やオンラインの最大の弱点は、受け手が得る情報を画面によって強制的に制限している点にあるということを改めて痛感した。それはこちらが見せたいと考えている情報だけを届けているに過ぎず、こちらが意図していなかったような偶然の学びといったものが生じる余地は非常に小さいと感じざるを得なかった。

ただし、その一方で現地を訪問することによる様々なデメリットを解消できた点も見逃してはならない。今回意図したことを現地で実施しようとする移動という膨大な時間が必要となる。これをたったの1日で実施できるということは大きなメリットである。また、実際生徒を連れてカンボジアを訪問すると安全の確保や体調管理などで多くの労力が割かれることとなるが、この方式を用いることでそのような手間からも解放されている。

また、最後にではあるが、本学は本事業の運営に際し、「生徒たちが新たな時代を生きていくためにも新しい学びにチャレンジしていくのならば、それを運営する学校、教員側もチャレンジするべきである」、また、「生徒にアクティブラーナーであることを望むのならば、まず教員がアクティブラーナーであれ」という思いを有していた。3年間の運営においては制約が大きく、やりたくてもできないことが数多くあったが、この海外研修においては、本学の気概を体現することができたように感じて

いる。

7 次年度以降の実施について

次年度以降は、自校予算による運営となるだけでなく、いまだ海外への渡航が周囲からの理解を得られるかという点においても不透明な状況が続いている。しかし、海外体験が参加生徒に与える衝撃の大きさはこれまでのカンボジア研修における実績が証明するところである。そのため、カンボジアへの渡航再開を目標に取り組んでいきたいと考えている。

C 合同カンボジア研修研究会（オンライン）

1 目的

同じカンボジアをフィールドに海外研修を実施している高等学校が一堂に会し、それぞれの学校のカンボジアにおける学びを共有し新たな気づきを得たり、学校を越えたネットワークを構築したりするきっかけの場とするとともに、今後の探究学習に対する意欲の向上や深化を目指す。

2 幹事校

和歌山信愛中学校高等学校（本学）

3 参加校

昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校（地域協働事業グローバル型）

啓明学園中学校・高等学校（旧SGHアソシエイト校）

岡山学芸館高等学校（地域協働事業グローバル型事業特例校、旧SGHII期校）

広島女学院中学高等学校（WWLコンソーシアム構築支援事業 事業連携校、旧SGHI期校）

4 新型コロナウイルスの影響

昨年度のみならず、今年度も本学を含む全ての参加校が海外研修を中止しており、本研究会に参加した全ての生徒が実際にカンボジアに渡航することができていない。

また、例年であれば幹事校の所在地にある研修施設において、1泊2日の日程で本研究会を実施していたが、昨年度に続き、今年度も新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、生徒の県をまたいでの移動を避けるべきであると判断し、本研究会をオンラインで実施した。

5 日程

2022年1月8日（土）

第1部 全体会 14:00 ～ 16:30

第2部 生徒交流会 17:00 ～ 17:30

6 各校参加者数

- ・本学 高校2年生10名、教職員5名
 - ・昭和女子 高校2年生4名、高校1年生3名、教職員4名
 - ・啓明学園 高校2年生5名、高校1年生7名、教職員2名
 - ・岡山学芸館 高校3年生2名、高校2年生1名、教職員2名
 - ・広島女学院 高校3年生3名、教職員1名
- 【合計49名】

7 オンライントークセッション登壇者およびモデレーター

登壇者	山勢 拓弥	さん	（一般社団法人 Kumae 代表理事）
	内田 隆太	さん	（任意団体 Share the Wind 代表）
	木下 レイナ	さん	（RAY'S Mrech Kampot Cafe 経営）
	関屋 やよい	さん	（Candy Angkor 勤務、館職人）
モデレーター	伊東 邦将	さん	（Happy Smile Tour CEO、本学海外交流アドバイザー）

8 内容

月 日	時刻	内 容
2022年1月8日（土）	13:55	接続開始
	14:00	全体会開会、幹事校校長挨拶、諸連絡
	14:15	自校紹介、参加理由（各校1名ずつ）
	14:45	オンライントークセッション ディスカッションテーマ提示後切断
	15:30	自校内ディスカッション
	15:55	再接続
	16:00	ディスカッション内容の発表・共有 登壇者講評
	16:45	全体会閉会、幹事校運営委員長挨拶、諸連絡
	16:55	接続開始
	17:00	生徒交流会開会、幹事校生徒挨拶
	17:05	交流開始 6つのトークルームを設定し、自由に交流
	17:30	閉会

9 成果

本学も含め、各校ともに実際にカンボジアに渡航できないという状況がつづいており、本合同カンボジア研修会において、初めて参加した生徒の全員がカンボジアに渡航することができていないという環境下での実施となった。これまでは、各校が現地で行った異なった学びを参加した生徒たちで共有するという形式の学びであったが、それを実現できない中でも、全国5校による横の繋がりを活用した貴重な学びの機会を継続させたいという思いのもと、オンライン形式ではあるが、昨年度に引き続き本年度も本学が幹事校として本研修会を開催した。

例年のように、各校の特徴を活かして実施した異なる学びやそれぞれの生徒の受けた心の衝撃などを本研修会で共有することは叶わなかったが、現地で活躍する様々な年代の日本の方々との交流は参加生徒たちにとって、貴重なものとなったと思う。また、直前に本学の教員がカンボジアに渡航し、自宅での自主隔離期間中ではあったが、本研修会に参加できたことで、最新の現地の状況を教員独自の目線で伝えることができたことも、多少なりとも生徒たちの学びをふくらませることができたと感じている。

さらに第2部となる生徒交流会も、発表や質疑応答といった格式張ったものとなりがちなコロナ禍における生徒交流において、自由かつ気軽に話ができる場を提示できたと考えている。

10 次年度以降に向けて

本学としては、他校の生徒との交流という機会を貴重なものと捉え、今後も継続していきたいと考えている。しかし、本学を含め、いくつかの学校において予算的な支援がなくなることもあり、今年度よりもより継続に向けた環境は厳しくなると考えられる。また、新型コロナウイルスの影響によって海外への渡航が難しい環境が継続している状況では、当初想定していた各校のカンボジアにおける

学びを共有するという目的も薄れつつある。現時点では、今後どのようなようになっていくかという予測は難しいが、各校の担当者と引き続き関係を取り、協議を重ねていきたいと考えている。

D 「Glocal High School Meetings 2022（全国高等学校グローバル探究オンライン発表会）」へ協力校としての参加

1 目的

地域協働事業（グローバル型）指定校の高校生が日頃取り組んでいる「グローバルな視点をもって地域課題の解決に挑む提言や実践」を日本語や英語で発表することにより、研究成果を発信・共有する場を設け、ふだん直接交流する機会が少ない全国の高校生が一堂に会して新たな気づきを得たり、ネットワークを構築したりして、今後のグローバル探究の深化や意欲の向上を図る。

2 主催 文部科学省指定グローバル型地域協働推進校探究成果発表委員会

3 共催 文部科学省

4 幹事校 名古屋石田学園星城中学校・高等学校

3 協力校 九里学園高等学校、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校、本学

4 参加校 全国の地域協働事業（グローバル型）指定校・事業特例校・アソシエイト校

5 日程および内容 オンライン発表会 2022年1月29日（土）

9:45 接続開始

10:00 開会、大会委員長による開会挨拶

10:03 文部科学省代表挨拶

10:08 司会より本日の確認

10:10 ブレイクアウトセッション①自校取組紹介

10:22 日本語部門金賞受賞校の紹介

10:25 ブレイクアウトセッション②日本語部門金賞校発表と質疑応答

11:48 英語部門金賞受賞校の紹介

10:51 ブレイクアウトセッション③英語部門金賞校発表と質疑応答

11:10 日本語部門文部科学省初等中等教育局長賞受賞校による発表

11:25 英語部門文部科学省初等中等教育局長賞受賞校による発表

11:40 審査委員長総評（一般社団法人 Glocal Academy 代表理事 岡本尚也様）

11:50 大会委員長による閉会挨拶

6 本学参加生徒

高校1年生 8名（日本語部門発表6名、Cグループ日本語部門司会2名）

高校2年生 5名（英語部門発表3名、Cグループ英語部門司会2名）

活気を取り戻せ！

～ぶらくり丁の未来のために～

和歌山信愛高等学校

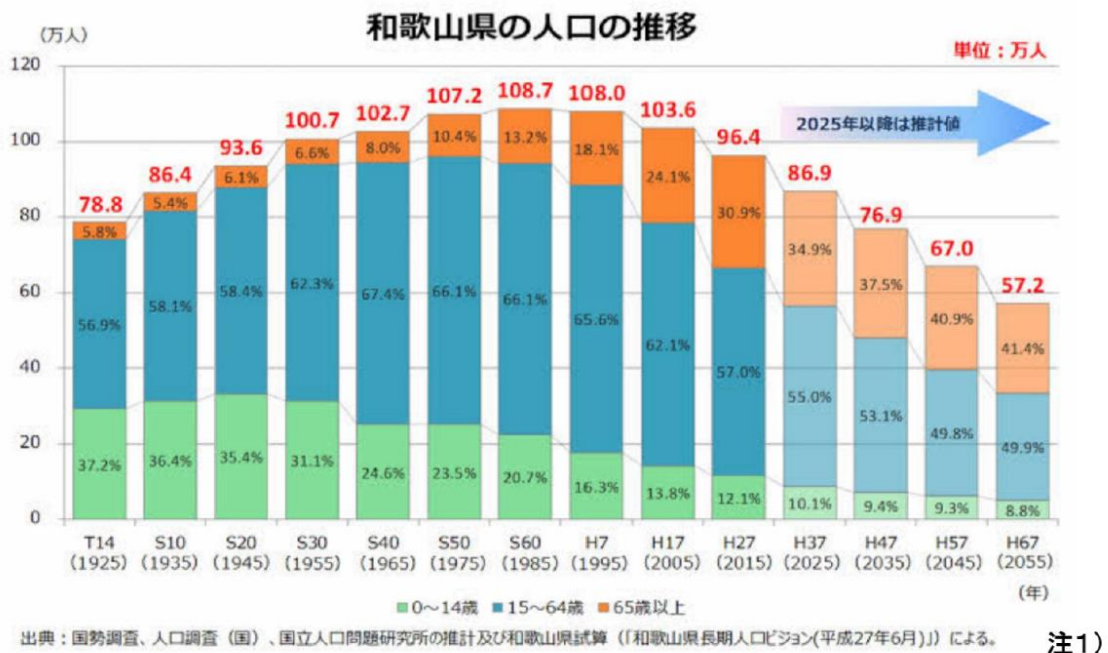
岩木美有羽 上林光 岩永いろは

北崎琴音 道屋心 田邊愛果



1. 和歌山市の問題
2. ぶらくり丁の問題
3. 解決策
4. SDGs

1. 和歌山市の問題



1. 和歌山市の問題

- ・少子高齢化
- ・若者の県外流出が **増加**
 県内の若者が **減少**



都市空洞化と商業の衰退



1. 和歌山市の問題

2. ぶらくり丁の問題

3. 解決策

4. SDGs

2. ぶらくり丁の問題

・高齢者 増 ⇒ 後継者 減

・コロナ影響 ⇒ 店 減



1. 和歌山市の問題
2. ぶらくり丁の問題
3. 解決策
4. SDGs

3. 解決策

ぶらくり丁を活性化するために

① 習い事通りをつくる！

(塾、料理教室、習字など)



3. 解決策

小学生の割合が**多い**



送り迎えする親も**多い**



習い事通り

- ・移動が楽(**子どもたちも親も**)
- ・火災による延焼のリスク **減**
- ・大人も多く集まる(料理教室)



〈結果〉 **さまざまな年代の人が集まる** ☆

3. 解決策

②コミュニティの場

和歌山の**フルーツ**を使った
スイーツカフェをぶらくり丁につくる(パフェなど)

☆ただのカフェでなく、

『**規格外**』かつ『**旬の果物**』を使い

安価で提供



3. 解決策

規格とは？

大きさ・重さ・色・形・熟度などを
等級付けしたもの。^{注2)}

規格外のフルーツ



ジュースや肥料、家畜のえさ

3. 解決策



1. 出荷時に規格外で廃棄される果物を活用してデザートをつくる
2. 普通は廃棄物になる皮なども積極的に利用する



果物の廃棄を減らす！



和歌山の果物の生産量は
『全国トップクラス』
ex.) みかん・桃・柿・いちじく



その分廃棄物もたくさん出ている

カフェで色々な世代の人が楽しめる
『ワークショップ』を開催！

1. アロマオイル
2. フレーバーティー
3. ジャム
4. 石鹸



みかんの皮など普段捨ててしまうものを活用！

3. 解決策

みかん狩りに行ってきました！



3. 解決策

実際に作ってみました！

参考レシピ 注3)





宣伝方法

①和歌山市内の小学校へのチラシの配布

②SNSを使った情報発信

ex.) Twitter Instagram など



1. 和歌山市の問題
2. ぶらくり丁の問題
3. 解決策
4. SDGs

〈貢献するSDGs〉

注4)

11. 住み続けられるまちづくりを

12. つくる責任 つかう責任



SDGsへの取り組み

11. 住み続けられるまちづくりを

〈現在〉

放置状態の店が増えている

・私たちの取り組み

習い事通りをつくり、人の集まる場所にする



12, つくる責任 つかう責任

〈現在〉
世界の食品ロスが増えている

・私たちの取り組み

変色、変形して店に売れ残った果物を積極的に受け入れて加工し、販売する

12 つくる責任
つかう責任



ぶらくり丁の活性化のために

1. **ぶらくり丁の空きテナントを利用して、
習い事通りをつくる**
(地域の人たちを巻き込んで)
2. **コミュニティの場をつくる**
(和歌山のフルーツを使ったパフェなどを提供するカフェ)

☆アロマオイル・フレーバーティー・ジャム・石鹼作りのワークショップ

それらの活動によって

- ・ぶらくり丁が明るくなり、活性化につながる
- ・和歌山の果物の廃棄物が減る
- ・SDGsへの取り組みができる

■参考

注1) <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/020300/kids/wakadata/jinko.html>

「和歌山県の人口 | 和歌山県」

注2) <https://furifuru.com/post-3043/>

「食品ロスを考える | フリフル」

注3) <https://macaro-ni.jp/51108>

「皮ごと使うみかんジャムのレシピ | macaroni」

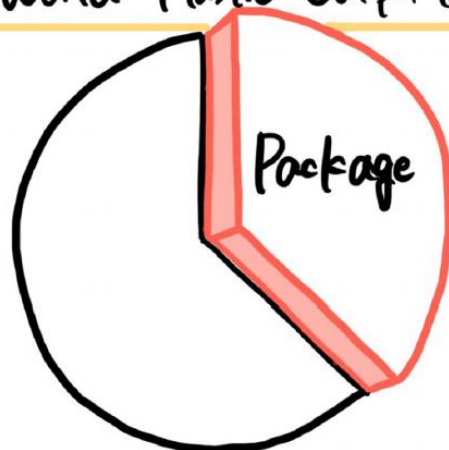
注4) <https://sdgs.edutown.jp/>

「私たちがつくる未来 | Edu Town SDGs」

ご清聴ありがとうございました。



World Plastic Output (2015)



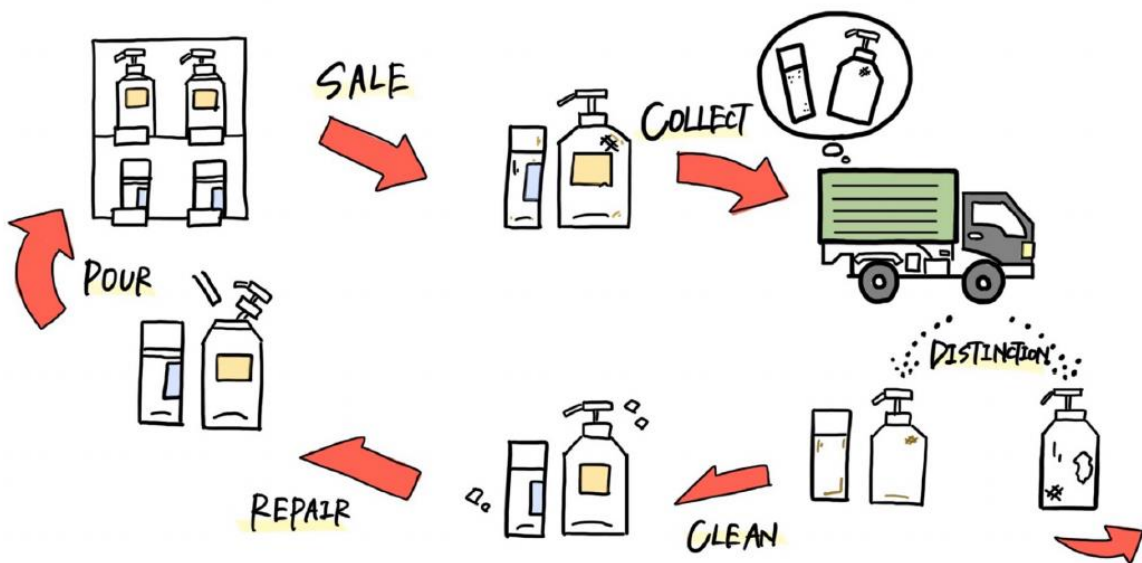
Source: UNEP (2018)
SINGLE-USE PLASTICS

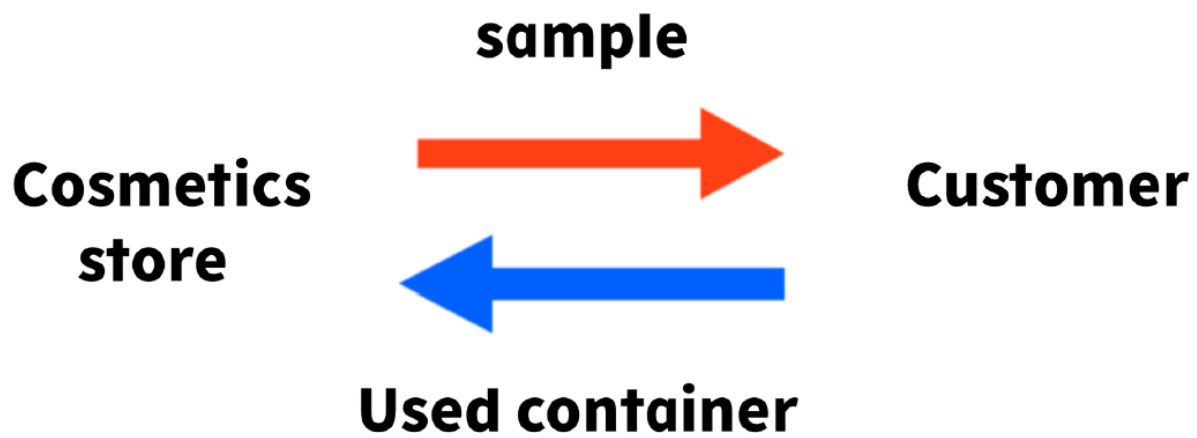
► Merit

- 1 Garbage Reduction
- 2 Decrease in global plastic production
- 3 Sustaining design diversity

► Demerit

- 1 Difficult to work on





A plan to quickly collect used case

- ✓ **Decide where to collect**
- ✓ **Attach a specific mark**



✗barcode...hard to recognize



thank you for listening

8 成果

本学は英語部門において銀賞、日本語部門において銅賞と、残念ながら金賞を受賞することはできなかった。しかし、昨年度同様協力校として高校1年生2名、高校2年生2名がグループ内の司会を担当したこともあり、参加生徒たちにとって有意義な時間となった。事後に実施したアンケートでは参加した13名の生徒のうち12名が「とても良い経験、学びとなった」と回答している。また、英語部門への参加を通して、日本語部門に参加した高校1年生8名の全てが「英語を学ぶモチベーションが上がった」と回答しており、自校の先輩や他校生の英語による発表が英語を学ぶことに対するモチベーションの向上に繋がっていることが確認できた。

また、今年度は審査委員長である一般社団法人 Glocal Academy 代表理事岡本尚也様の講評が本学の生徒たちに与えた影響の大きさを感ずることができた。【何事においても、どうして自分がそれをやりたいのかを考えることが大切だということを痛感しました】、【少し厳しいお話だと感じた部分もあったが、お話をうかがって、自分も自分自身が解決に携わりたいと思う社会課題を見つけ、それに組み込んでいきたいという思いを抱くことができました】などと、昨年度よりも参加生徒の今後の探究活動に向けてのモチベーションの向上の機会となったことが確認できた。

Ⅲ コンソーシアム運営会議報告

① 第1回コンソーシアム運営会議

1 日時

2021年4月16日(金) 17:30 ~

2 形式

ビデオ通話アプリ「Google Meet」を用いたオンライン会議

3 コンソーシアム構成団体出席者

和歌山県 文化学術課 主幹 長峯 宏明 様

和歌山市 和歌山市教育委員会 学校教育課 副課長 前田いさ 様

みなべ町 うめ課主幹 中野愛理 様

国立大学法人和歌山大学経済学部 副学長・経済学部教授 足立基浩 様

公立大学法人和歌山県立医科大学 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 監事 牛窪篤子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 会長 宮本安津子 様

株式会社マイナビ 進路サポート 森田えり 様

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 出席者紹介および新規参入団体紹介

※なお、株式会社マイナビ様は、新たに2021年度より本事業コンソーシアムに参入

iv 協議

・「リージョン探究」実施についての協議

今年度の課題の決定

課題提示、フィールドワークの日程決定

以降のプログラムの予定確認

・「グローバル探究」実施についての協議

「自分で創るフィールドワーク」をオンライン形式へ変更することの承認

今年度の予定確認

・「キャリア探究」実施についての確認

今年度の予定確認

・その他

SGH ネットワーク指定の報告

海外研修の実施の有無について

今年度の会議形式の確認 ※原則オンライン開催

次回の会議日程の確認

- v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智
- vi 閉会

② 第2回コンソーシアム運営会議

1 日時

2021年10月18日(金) 17:30 ~

※ ただし、第1回運営指導委員会と合同開催

2 形式

ビデオ通話アプリ「Google Meet」を用いたオンライン会議

※ コンソーシアム構成団体代表と運営指導委員とが重複している場合は、代表で1名が参加

3 内容

IV-①「第1回運営指導委員会」の項目にて詳細を報告する

③ 第3回コンソーシアム運営会議

1 日時

2021年12月17日(金) 17:30 ~

2 形式

ビデオ通話アプリ「Google Meet」を用いたオンライン会議

3 コンソーシアム構成団体出席者

和歌山県 文化学術課 主幹 長峯 宏明 様

和歌山市 和歌山市教育委員会 学校教育課 副課長 前田いさ 様

みなべ町 うめ課主幹 中野愛理 様

国立大学法人和歌山大学経済学部 副学長・経済学部教授 足立基浩 様

公立大学法人和歌山県立医科大学 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 監事 牛窪篤子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 会長 宮本安津子 様

株式会社マイナビ 進路サポート 森田えり 様

4 内容

i 開会

- ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

- iii 出席者紹介
- iv 進捗状況報告および協議
 - ・高校1年生「リージョン探究」の報告
 - 経過報告
 - 最終発表会について
 - 事後学習について
 - 発展的な活動への協力依頼
 - ・高校2年生「グローバル探究」の報告
 - 経過報告
 - 最終発表会について
 - 事後学習について
 - 発展的な活動への協力依頼
 - ・協議
 - 今年度の各プログラムの改善すべき点について
 - コロナ禍における発表および質疑応答の方法について
 - ・その他
 - 全国高校生フォーラムへの参加について
 - Glocal High School Meetings 2022 への参加について
 - ※HPより発表動画の視聴を依頼
 - 合同カンボジア研修会（オンライン）の開催について
 - 最終成果発表会の実施について
 - 次回の会議日程の確認
 - ・協議
 - 指定終了後の取り組みについて
- v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智
- vi 閉会

④ 第4回コンソーシアム運営会議

- 1 日時
2022年3月16日（水） 17:30 ～
- 2 形式
ビデオ通話アプリ「Google Meet」を用いたオンライン会議
- 3 コンソーシアム構成団体出席者
和歌山県 文化学術課 主幹 長峯 宏明 様
和歌山市 和歌山市教育委員会 学校教育課 副課長 前田いさ 様

みなべ町 うめ課主幹 中野愛理 様
国立大学法人和歌山大学経済学部 副学長・経済学部教授 足立基浩 様
公立大学法人和歌山県立医科大学 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様
一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 代表理事 堀内智子 様
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 会長 玉置登世子 様
株式会社マイナビ 進路サポート 森田えり 様

4 内容

i 開会

- ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長
和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 出席者紹介

iv 進捗状況報告および協議

・各プログラムの進捗状況報告

高校1年生「グローバル探究」の進捗状況について

オンラインガイダンス、分野選択講義の実施

高校2年生「キャリア探究」の進捗状況について

オンラインガイダンスの実施

「未来の“私の”仕事を考える」(ナレッジキャピタル主催)への応募

「適性診断」(株式会社リクルート)の実施

オンライン特別講演の実施(講師:株式会社ポーラ代表取締役社長 及川美紀 様)

・その他

全国高校生フォーラムの報告

Glocal High School Meetings 2022 の報告

最終成果発表会(オンライン・本校主催)の報告

教員によるカンボジア渡航の報告

合同カンボジア研修会(オンライン・本校主催)の報告

ハイブリッド型(動画×オンライン)カンボジア研修会の報告

・協議

コロナ禍において実施した最終成果発表会について

ハイブリッド型カンボジア研修会におけるディスカッションの中で参加生徒が述べた

「他者の目を恐れ、チャレンジすることを躊躇する」という現状について

・指定終了後の活動について

三菱みらい育成財団への応募を通して予算確保を目指す

本事業の経験を踏まえ、新コース「iコース」の立ち上げ

・協議

- v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

vi 閉会

IV 運営指導委員会報告

① 第1回運営指導委員会

1 日時

2021年10月18日(月) 17:30～

※第2回コンソーシアム運営会議と合同開催

2 形式

ビデオ通話アプリ Zoom を用いたオンライン会議

3 参加者

和歌山県知事 仁坂吉伸 様(代理出席)

和歌山市教育委員会 教育長 富松淳 様(代理出席)

国立大学法人和歌山大学経済学部 学部長 藤永博 様(代理出席)

公立大学法人和歌山県立医科大学 理事長・学長 宮下和久 様(代理出席)

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般財団法人 Future Skills Project 研究会 事務局長 平山恭子 様

学校法人産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊道子 様

みなべ町 うめ課主幹 中野愛理 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 代表理事 堀内智子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 会長 玉置登世子 様

(推進校) 学校法人和歌山信愛女学院 理事長・和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員の教諭 17名

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 各プログラムの進捗状況報告 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

iv 指導および助言

a 高校1年生対象「リージョン探究」について

※本運営指導委員会は、「リージョン探究」中間発表終了後に開催されている

(委員より)

コロナ禍での2年目の取り組みということで、オンライン環境を昨年度よりも上手く活用できているという印象を受けた。生徒たちも自由に学外で活動できないという制約のある環境下で、コロナ以前の取り組みに近づいてきた印象を受けている。現状を把握する力、課題の解決にむけて「人・もの・金・情報発信」といった要素をしっかり押さえることができていたと感じている

(委員より)

オンラインでの発表会の運営は難しいものがあると思うが、質疑応答のぎこちなさが目立った。こ

こについては改善を目指してほしい。

(推進校より)

中間発表ということもあり、正直課題の認識、基本的な調査などにはまだまだ不満は残った。しかし、これらを踏まえブラッシュアップした上で最終発表に臨んでいくことになるため、生徒たちの伸びしろを十分発揮できるように、担当教員が一丸となってサポートしていきたい。

また、オンラインにおける発表形式については、私たちも改善の余地があると感じている。鋭意改善を加えていきたいので、またご指導をいただきたい。

b 高校2年生対象「グローバル探究」について

(委員より)

当初、高校1年生は課題提示型の「リージョン探究」、高校2年生は分野のみを提示する、課題設定型の「グローバル探究」と段階的にプログラムの難易度をあげていくというプログラム設定が非常におもしろいと感じていたが、高校2年生における変化や成長は感じることができているか。

(推進校より)

「グローバル」という名称もあり、世界の課題に目を向けている生徒が多いなかで、高校1年の経験を踏まえ、地域課題(和歌山における動物殺処分をゼロにするには、など)を選んでいる生徒も存在している。他地域と比較しながら探究を進めるなどしており、グローバルとローカルを行き来するような探究活動に取り組んでいる生徒の姿も確認できている。

(委員より)

昨年度の「グローバル探究」で、課題設定の範囲という課題がでたことを記憶している。そこで、SDGsをテーマとしていることもあり、「2030年に実現可能であること」「持続可能な解決策であること」という2つの条件を加えることになったが、その辺りは今年度どのような影響が見られているか。

(推進校より)

この辺りが生徒の中にどの程度落とし込むことができているかは現時点ではまだ確認できていない。しかし、この2つの条件を足したことで、生徒たちの探究活動が昨年度よりも具体的になっている印象を受けている。地域を限定したり、水のろ過装置を実際に制作しようとしてみたりなどの点がこれにあたりと感じている。

(委員より)

私に関わっている大学2年生に対して「自分が関われる解決策であること」という条件をつけてみたが、これによって、学生は自分事と捉えるようになったと思う。そのようなことも考えてみてよいのではないか。

(推進校より)

今後の運営の参考にさせていただきたい。

c 高校3年生対象「キャリア探究」について

1名の生徒の発表動画の視聴

プログラム終了後のアンケート内容の報告

(推進校より)

すでに9月の上旬で活動は終了している。「キャリア探究」のスタートであるナレッジイノベーション主催「未来の“私”の仕事を考える」コンテストにおいて、最終選考100名の中の一人に本学生徒が選ばれた。残念ながら表彰者16名の中には選ばれなかったが、3年目にして少しずつこのプログラムが浸透してきたことを感じる事ができた。

また、9月の最終発表が東京オリンピックの余波とも言えるコロナウイルス感染第5波の影響を受け、事前撮影の動画発表となってしまったことは、1期生の最後の活動ただけに心残りだった。

さらに、終了後のアンケートは配布した資料にまとめている。「Key Girl」の8つの資質に対しては全体的に成長の実感を持たせることに成功しているように感じている。

(委員より)

「探究活動は～」、「課題設定とは～、」という話をする機会は多いが、アンケートの中の感想にあるように「すばらしい解決策を考えるのではなく、自分事として関心を持って動いてみる事が大切なので、生徒がそれを感じ取れるようなプログラムとなっていることは評価できる」

(委員より)

「キャリア探究」ではジェネリックスキルの測定を行っているはずだが、その状況と活用についておしえてほしい。

(推進校より)

ジェネリックスキルについては5月に模擬試験のような形で受験した。客観的な形で自分でも気づいていないような個人の特性を明らかにしてくれるというのはとてもおもしろいツールであるが、生徒たちからは、受験生としてある程度志望が固まった段階でこのようなことを言われても困るという意見も届いている。しかし、プログラムの展開を考えるとこのタイミングでの実施が最適かと思われるため、なかなか対応が難しい。

(委員より)

高校3年生の「キャリア探究」の発表動画は興味深く見させていただいた。「ミッション」を設定し、そのミッションを実現するためのキャリアを探究するという活動だったと理解しているが、「街なかに緑を増やす」ことをミッションとし、そのために環境デザイナーとして活動したいという流れの中で、大学時代の過ごし方や卒業後に造園士として修業する期間を設けるなど個性的な発表だったと思う。ただし、なぜ「街なかに緑を増やしたいのか」「増やす必要があるのか」については語られていなかったため、その辺りの改善が必要であると感じたし、人生を見通すという視点にも欠けていたように思う。

(推進校より)

「キャリア探究」の指導にあたる各クラス担任の中に、どうしても進学意欲に繋がたいという思い

があり、職業がゴールになってしまうケースが目立った。なお、興味・関心の動機付けをしっかりと説明することは大切であると思うため、その辺りは改善していきたい。

(委員より)

アンケートの結果は興味深く見させていただいた。生徒たちは高い割合で成長を実感できており、ここまでの努力が成果として実を結んでいることが伺える。なお、このアンケート結果は生徒と共有しているのか。

(推進校より)

生徒とは共有していない。これまで生徒と共有するという事を考えていなかった。ただし、学校のHPには公開している。

(委員より)

私の経験ではアンケートの内容を公開することで、他の生徒はこのようなことを書いているとか、こんなに多くのことを書いているという「気づき」につながるように思う。また、それがさらに活発に意見を出すきっかけになると思う。

(推進校より)

高校3年生ではなく、高校2年生以下には、ループリック評価表を用いて他者を適切に評価したかというアンケートを実施している。これなどは公開することで、より適切な評価を行うことが当たり前という風潮につなげることができるのではないかと思う。意図的なアンケートの公開については前向きに考えてみたい。

d With コロナの時代における口頭発表について

(推進校より)

昨年度は新型コロナウイルスの感染拡大を避けるために、口頭発表を中止するという形での対応しかできなかったことを反省しており、何とかして口頭発表、そして質疑応答ができないかを考えている。次回の運営指導委員会が行われる2月14日には和歌山城ホールという和歌山市に新しくできた施設で最終成果発表会の実施を計画している。発表者と聴衆の間には距離を確保することができると考えているので、ぜひ楽しみにしていただきたい。

また、全員参加の各プログラムの最終発表会は学内で実施するが、オンラインを用いた口頭発表を考えている。

(委員より)

ぜひ、工夫をしながら取り組んでほしい。期待している。

v 次回会議の予定

vi 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡 智

vii 閉会

② 第2回運営指導委員会

1 日時

2022年2月14日(月) 17:30 ~

2 形式

ビデオ通話アプリ Google Meet を用いたオンライン会議

※ なお、当初は最終成果発表会後に対面型で実施予定であったが、オミクロン株の感染拡大によるまん延防止等重点措置によりオンライン発表会に変更することとなったため、こちらもオンライン会議に変更することとなった

3 参加者

和歌山県知事 仁坂吉伸 様(代理出席)

和歌山市教育委員会 教育長 富松淳 様(代理出席)

国立大学法人和歌山大学経済学部 学部長 藤永博 様(代理出席)

公立大学法人和歌山県立医科大学 理事長・学長 宮下和久 様(代理出席)

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般財団法人 Future Skills Project 研究会 事務局長 平山恭子 様

学校法人産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊道子 様

みなべ町 うめ課主幹 中野愛理 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 代表理事 堀内智子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 会長 玉置登世子 様

(推進校) 学校法人和歌山信愛女学院 理事長・和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員の教諭 17名

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 進捗状況報告 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

iv 指導および助言

a 最終成果発表会について

(委員より)

・ 本来であれば、和歌山城ホールで市民の皆様も含め、多くの方に直接見ていただきたいと思う内容だった。GIGA スクール構想で和歌山市内の各学校が ICT 環境を有効に活用できていない中、信愛はうまく活用することができていたと思う。

また、私自身は3学年の発表を初めて見させてもらったが、地域の課題に取り組んだ高校1年生の視点が、2年生の「グローバル探究」で大きく広がり、高校3年生の「キャリア探究」で再び自分のところへ深いレベルで戻ってきていることが確認できた。ストーリー性のある取り組みだと思

う。市内に大学が増えたとはいえ、それでも県外進学者は多い。行政に関わるものとしては、和歌山の各校でこのような地元への愛着を育む教育を実践してほしいと感じた。

- ・ 地域のために生徒がいるのではなく、生徒の学びのために地域がある。こういう活動を今後も地域に広げていくことが大切だと感じた。
- ・ 今回はオンライン開催となってしまったので仕方ない部分も大きいですが、地域に暮らす人たちにも非常によい勉強になると思う。もっと地域の人たちにこの活動を知ってもらいたい。これを続けることで、必ず地域は良くなっていくと確信した。
- ・ 課題をあげるならば、基本的に「提言」で終わっていることだと思う。今や高校生でもどんどん起業するような時代。法人や団体を作り、地域とのパイプとなって活動することで、生徒たちの学びはどんどん加速すると感じた。

(推進校より)

多くの好意的なご意見に感謝したい。皆様にそのように思っただけで、今後もこの活動が続けていかなければならないと感じた。なお、「アクション」の重要性は課題として捉えている。しかし、日常の学校生活を考えた時、生徒たちに許された時間はわずかしかない。スーパー高校生を育成するためにこの取り組みがあるとは考えていないため、「アクション」については、今後も課題として改善していきたい。

b 今後の運営について

(委員より)

- ・ 生徒が情熱を注ぎ、先生方がそれを支えるというこの3年間のダイナミックな教育には感動している。ただし、中心となる先生方の負担については気になる場所である。多くの先生が携われるようにマニュアル化することや、取り組む意欲を高めてもらうためにもインセンティブなどを上手く活用してほしい。
- ・ 私も同様のことを考えていた。このような会議一つとっても、オンライン会議の設定、参加者への連絡、資料の作成などただ会議を開くだけという訳にはいかず、それは教員としての本来の業務からははみ出したものである。個人の奉仕の精神によって成立しているという状況は危ういのではないか。

(推進校より)

現時点ではあまり制度化されていないため、そのようなことも考えていく必要はあると思う。ただし、システム化が進むときれいに運営はされていても「熱」が入らないのではないかという部分を危惧してしまう。インセンティブなどはないが、「自分で自分を育てる」という観点からも生徒に伝わる部分があるのではないかと感じている。ただし、それに頼りすぎるのが危険であるという意見も十分に理解できる。

c 今後の運営について

(委員より)

以下の4つのことをお伝えしておくので、今後の運営に役立ててもらいたい

①「いい発表には必ずどこかに『リアル』が含まれる」

なお、これを目指すことで生徒が自分たちで動けるようになるため、先生方のお膳立ての必要性がなくなる。

②「関わった大人を、生徒自身が成果発表会に招待する」

生徒たちが地域を巻き込んでいるという実感を持ちやすく、先生方の負担も減らすことができる。

③「『SNS で解決』を越えたところからのスタートを」

高校生の探究では必ずと言っていいほど見かける SNS を用いた解決策。しかし、Facebook や instagram でそんなに簡単に認知度はあがらない。最初の段階でそれはダメだと言ってもいいかもしれない。

④「先輩を上手く活用する」

最終成果発表会では効果的な卒業生の使い方ができていたが、このような仕掛けをもっと使っていくとよい。1つ上の学年の生徒に指導させてみるのも一つの方法。先生方の負担減にもつながっていく。

今後の先生方の奮闘を期待している。

(推進校より)

- ・ 本日の最終成果発表会で卒業生のお話を届けてみたため、先輩の影響の大きさというものは実感している。先輩が指導するというのは、その先輩自身も探究活動を行っているため、なかなか難しいかもしれないが、上手に活用してみたいと思う。
- ・ 今年度で本事業は終了となる。次年度からは全国の高等学校で「総合的な探究の時間」の授業が開講されることになる。そのため、文部科学省は次のステージとして高等学校の普通科改革を考えている。その一環として、新学科の設置を考えている学校に対して補助金を出すという事業の公募がかかっているため、その申請も視野に含んで活動していきたいと考えている。運営指導委員の先生方には今後もしもご支援、ご協力をいただきたく思っている。
- ・ 私たちの活動は、このように先生方にも評価していただけるものにも関わらず、世間にはその良さが伝わっていない。私たちの学校は私立学校なので、経営や生徒募集の問題がある。良いことをやっているのに、現時点では生徒募集にはつながっていない。成績や偏差値の向上、進路実績などとは異なり、数値化されない探究活動の良さを外部に伝えるという探究を我々教員が今後も行っていかなければならないと考えている。

v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

vi 閉会

V 次年度以降の活動について

① 各プログラムについて

本事業を通して「リージョン探究」を3回、「グローバル探究」をプレ実施も含めて3回、「キャリア探究」をプレ実施も含めて2回、それぞれ運営してきた。「リージョン探究」と「グローバル探究」の活動を通して、自ら調べ考えるだけでなく、他者の探究成果を聞くことで多くの内容をインプットし、「キャリア探究」を通して自らの「ミッション（使命）」を設定し、主体的な進路選択へとつながるプログラムはストーリー性があると学内でも評価されており、次年度以降大きく変更する予定はない。

② 継続することのメリット

i 生徒

すでに各開発単位の項目でも報告した通り、本事業に取り組み、様々な経験を積むことによって、生徒たちの「Key Girl」を構成する8つの資質に対する成長実感値はかなり高い。

また、あくまでも主観的な視点ではあるが、かつては大人しく言われたことに対して黙々と取り組む雰囲気の子が多かった本学が、探究学習に取り組むようになったことで、積極的、主体的に行動することができるようになり、「自ら考え、行動する」という空気が生まれつつあるのを感じる。

新たな社会として提示されている「Society5.0」で求められる能力を考えても、この学びを継続する意味はあると考える。

ii 地域

本事業申請前から地域の課題に取り組むという活動は行っていたが、本学が地道に課題探究型学習を続けたことで、地域の学校から最終成果発表会への参加申し込みが届くなどわずかではあるが地域の空気が変わっているのを感じている。

しかし、次年度から新しい学習指導要領の中で各校が工夫を凝らしながら実践する「総合的な探究の時間」の運営については、まだまだ各校及び腰な状況であるようだ。県南部の公立高校に探究型学習を導入した新学科を設立する動きはあるが、それは少子化、過疎化によって県立高等学校の全日制が0.89倍、定時制に至っては0.36倍という出願倍率を何とかしたいと全国から生徒を募集する試みの一環であり、現時点では何の実績もない。

そのため、今年度で9年という長きに渡って探究学習の導入に向けて試行錯誤してきた本学の歩みおよび生徒の成長、そして、地域の未来を視野に含んだ主体的進路選択という成果を今後も地域に発信していく価値は十二分にあると考える。

③ 直面する課題

3年におよぶ本事業を総括するにあたって、最も課題として受け止められたのが生徒および教員の負担である。これについては以下にその状況を述べるとともに、今後の運営において何らかの対策をしなければならないと考えている。

i 生徒

日々の学習を通して大きく成長する生徒、クラブ活動を通して大きく成長する生徒がいるように探究学習を通して大きく成長する生徒がいることは確認できた。しかし、生徒たちが興味をもって

探究活動に取り組もうとするほど、「スーパー高校生」といった優秀な生徒でない限り、何かを犠牲にしないと成立しないという状況が起こってしまう。社会で直面する答えが一つとは限らない課題に取り組む探究学習は、大学や社会との接続を考えた時に高校の中に存在すべき学びであると感じているが、日常の学習、クラブ活動と並行して行うにはあまりにも負担が多すぎる。本事業においては「総合的な探究の時間」を1単位増やし週2単位で実施をしたが、情熱をもって取り組んだ生徒たちにとって、週2単位相応の負担を大きく越えたものとなった。グループのメンバーが集まる時間の確保だけでなく、地域の方など学外との交渉も必要となるため、必然的に正課以外の時間を使うこととなり、生徒たちの負担は非常に大きい。大学入試においては、特に難関国公立大学になるほど、いわゆる5教科の学力が必要となる。現状の5教科の能力を維持しつつ、その上に探究活動も行わなければならないという現状では、「探究」が持続可能なものとはならず、スーパー高校生のような余裕のある生徒のみが学習とクラブ活動と探究活動を両立でき、まずは高学力の生徒は学習中心、中下位層の生徒は探究学習やクラブ活動を行うといった生徒のキャパシティーに応じた分断が起こっていくのではないかと危惧する。そして、それは高大接続にとってもマイナスなのではないかと考える。

ii 教員

生徒同様、各教員も自らの担当教科の授業、校務分掌、クラブ顧問などの業務に加え、探究学習が新たな業務として加わった。そのため、個々の教員によってはキャパシティーの限界を迎える可能性を秘めている。本学は高校に在籍する全ての教員が探究学習の運営に関わることで各教員の負担をなるべく少なくするように配慮したが、その反面、本事業の適切な運営を考えると、多くの教員で平等に分担するというわけにはいかず、中心となる特定の教員に膨大な負荷がかかるということは避けることができなかった。今年度から全国の高等学校で、それぞれの学校独自のプログラムが実施されなければならない訳だが、そこに温度差が生じているのはこのような持続可能な運営体制をとることができないことも一つの要因であると考え。生徒同様、「スーパー教員」に頼らなければならないようであれば、「総合的な探究の時間」が高等学校のなかで本当の意味で根付くことはないであろうと考える。

④ 予算の確保について

i 学内の状況

指定3か年のうち、2年は新型コロナウイルスの影響で本来計画していた事業の半分程度しか実行に移すことができなかった。そのため、次年度以降自走していくにあたっての経験が不足している面は否めない。また、初年度実施した東京でのインターンシップを兼ねた「自分で創るフィールドワーク」や、「自らの当たり前は世界の当たり前ではない」という厳しい現実と向き合う「カンボジア研修」など「非日常」がもたらす衝撃は、参加生徒を大きく成長させた。しかし、これらの活動を実施するにはまとまった金額の予算が必要となる。

奇しくも、新型コロナウイルスの影響もあり、ICT環境の充実は学校、家庭ともに必須となり、学内の学びの中にもそれを導入しなければならなくなった。本学は私立学校であるため、ICT機器の購入などで家庭からの支出は増えている。しかし、同時に収入が減少している家庭も少なくなく、これ以上安易に家庭からの支出を増やすわけにはいかない。

さらに、これまで長きに渡って優秀な人材を大都市圏に輩出し続けてきたツケとして、和歌山県内の

人口減少・少子化はおそろしいスピードで加速している。現在、同じ和歌山県の私立学校である南稜高等学校が教員給与の遅配をきっかけに大きな騒動へと発展しているが、確認することができた最も古い資料によると平成24年度の和歌山県内の中学3年生の女子(※本学は女子校であるため)が4,931人、そして最も新しい資料によると令和4年度の和歌山県内の中学3年生の女子が3,813人と2割強の減少となっており、本学も入学定員の充足が年々難しくなっている。

このような状況下では、柔軟な学内予算の編成を行うことはできず、当初の目標であった本事業の自走は非常に難しい状況である。

ii 三菱みらい育成財団「高等学校などが学校現場で実施する心のエンジンを駆動させるプログラム」への申請

前述のように自校予算のみでは、これまでと同様の探究学習を実施する費用を捻出することはできないと考え、予算確保のために上記の探究学習に対する助成事業への応募を行うこととした。現時点では採択結果は発表されていないものの、現在書類審査を通過し、面接審査にまで進んでいる。

⑤ まとめ

このように本事業には、生徒たちに対して、どのように変化していくのか、その予測の難しい社会に対応していくために、「答えが一つとは限らない課題」に挑戦しながら、常に「最善の解」を模索し、それを行動に移すというこれからの社会を生きていくための基本的な資質を向上させる効果があることを確認することができた。

しかし、生徒に衝撃を与えるような本物の体験とともに、形だけの活動ではなく、一人ひとりの生徒が情熱を傾けて探究活動に取り組むように運営していくためには、「制度設計」、「運営資金」、「人的資源」が不可欠であるという現実もまた浮き彫りとなっている。今後本プログラムを継続実施していくために、学校や我々教員も「探究」していく姿勢は不可欠であるが、今後、日本の教育の中に「探究」の定着を目指すのであれば、文部科学省が舵取り役となって「探究」してくださることを強く期待する。なお、そのために本学の経験などが役に立つのであれば、喜んで協力させていただく次第である。

2019年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

2021年度研究開発実施報告書【第3年次・最終年度】

発行日 2022年5月25日

発行者 学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校

校長 平良 優美子

所在地 〒640-8151 和歌山市屋形町2-23

電話 073-424-1141 Fax 073-424-1160

H P <https://www.shin-ai.ac.jp/>